



# 貯蓄預金

(毛五厘六錢壹步日付 = 圓百、息利)

大坂市東區伏見町三丁目  
(電話 東五七七貳番)

## 大阪貯蓄銀行

一 貸付金  
一 手形割引

貸付金及手形割引ノ  
担保品ハ確實ナル有價  
証券倉庫會社ノ預券等  
又商業手形ノ割引ハ精  
々相働キ可成低廉ノ歩  
合ニテ御相談可致候

頭取 副頭取 取締役 全全全全全

鴻池善右衛門造  
外山脩之助  
平山龜三郎  
山崎吉三郎  
芦田安三郎  
平井直三郎  
越前野崎  
矢野清七

(電 東二一五) 南出張所  
大坂市南區太左衛門橋筋八幡筋角

(電 西三四八) 西出張所  
全市西區間屋橋筋新町南入

(電 東二一四) 北出張所  
全市北區天神橋北詰貳丁北ノ辻角

全市西區本町三番町妙見前角  
本町出張所

京都市下京區數屋町通四條上ル  
京都支店

全市上京區大宮通今出川角  
西陣出張所

全市下京區東洞院通松原角  
松原出張所

1937

造吟寒極  
酒本日印駒春  
S A K E  
HANUKOMA  
BREWED FROM RICE.

品用御省内宮

TRADE MARK

標商録登



元實設造釀  
市場府阪大

社會名合井鳥

設於 興 號番話電 ヤシイカイリト イカサ 稱略標電

TORII GŪMEIKWAISHA.  
TORII & BROTHER'S SAKE BREWING CO.,  
SAKAI NEAR OSAKA, JAPAN.

廣 告

榮社釀酒を米佛西の諸外國に於ける萬國大博覽會を始め内國勸業博覽會共進會等へ出品し其審査せらるゝや毎ふ優等の地位を占め名譽ある褒賞を受くる事殆んど二十四回蓋し酒質の精醇なると嗜好諸君の眷顧と相待り得たる結果なれば益醸製の改善を怠らば以て此榮譽も皆がさらん事を期せざるに信篤の御愛顧を乞はせ奉る

釀造發賣元

大阪府堺市甲斐町西二丁目

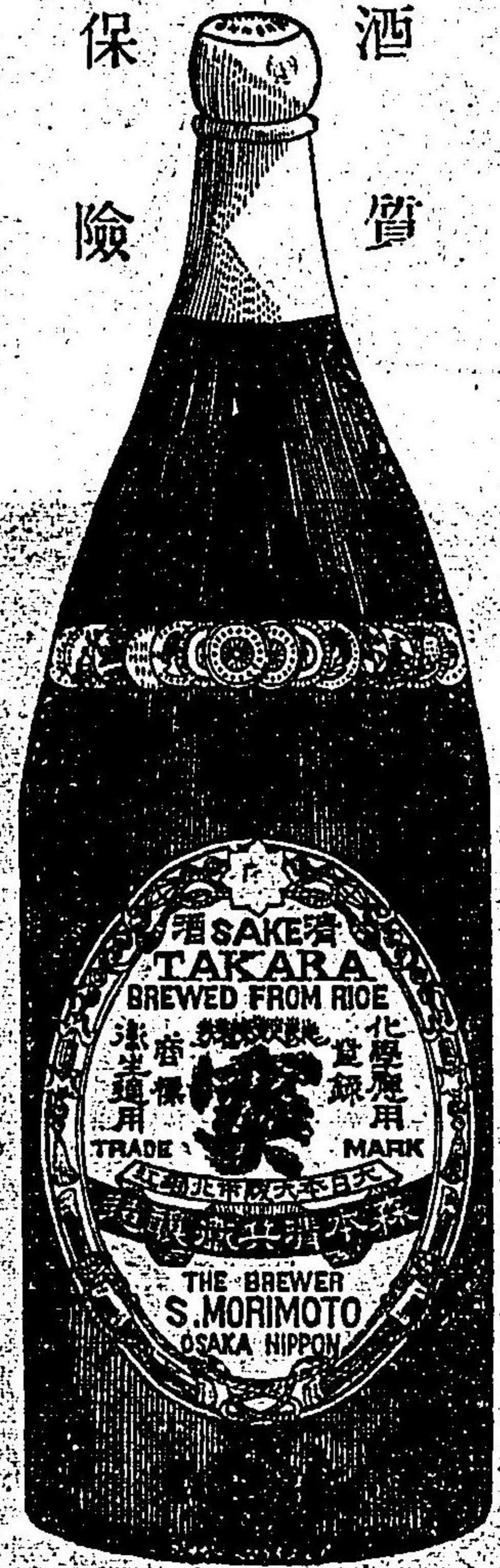
鳥井合名會社

(電話堺十番)



各國大博覽會  
優等賞牌受領  
寶印改良日本酒

品用御省內  
酒質  
保險



釀造發賣元

大阪市北堀江下通り六丁目

森本清兵衛

灘屋號

正港正標

資本金壹百萬圓

●●●●●  
 本社ハ普通一般ノ建物家具并ニ諸商品ノ火災保險ヲ爲ス  
 本社ハ右ノ外酒造用器具器械貯藏酒原料品及醸造中ノ半製品ニモ保險ヲ爲ス  
 本社ハ被保險物ハ日本勸業銀行及各府縣ノ農工銀行ノ擔保品ト爲ス  
 本社ハ保險料ヲ可及的低廉ニ迅速且丁寧ニ保險ノ契約ヲ爲ス  
 本社ノ規則ヲ望マル、向ハ御申越次第送呈ス



大阪市東區今橋四丁目 (電話東一七七)  
 東京市京橋區銀座三丁目 (電話新橋六六一)  
 京都府傳馬町五丁目  
 名古屋市傳馬町四丁目  
 廣島市大手町四丁目  
 福岡市博多妙樂寺前町

本 社  
 東 京 支 店  
 京 都 支 店  
 名 古 屋 支 店  
 廣 島 支 店  
 福 岡 支 店



圖略銃獵形折元

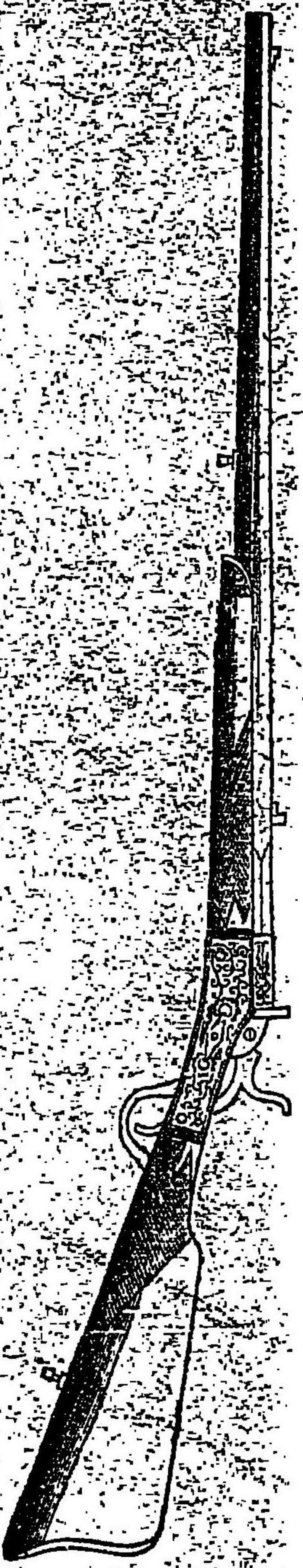
火藥

銃砲

商許免

助之林原野

目丁壹町郎太久北區東市阪大



免銃砲

商許

芝辻

作理

大坂市東區博物町櫻筋角

導火線

抗山用

火藥

ナイナイ

內國製

獵用

火藥雷管類

護身用

ピストル銃

內外各種

獵具

附屬品

內國製

獵銃

銃



大 阪 府 堺 市 車 之 町

# 藤 本 商 店

此 度 堺 起 業  
會 社 營 業  
全 部 引 受  
ク 一 層 奮 發  
製 造 及 意 匠  
ノ 上 注 意  
可 仕 何 卒 起  
業 會 社 同 業  
御 引 立 ノ 程  
偏 二 奉 願 上  
候 謹 言

商 標



營 業 部 類

## 斗 量 部

改 正 制 度 實 施 二 付  
一 層 製 作 擴 張 シ 盛 ノ 二 新 製  
品 ノ 賣 捌 ヲ ナ ス

## 眞 田 部

純 粹 ノ  
本 邦 製 手 織 及 器 械  
製 各 種 眞 田 販 賣

## 起 業 部

玉 簾、羅 鈞 寢 網 ノ 外  
新 二 信 州 行 李 取 引 ヲ 開 始 シ 專  
ラ 輸 出 貿 易 及 內 地 販 賣

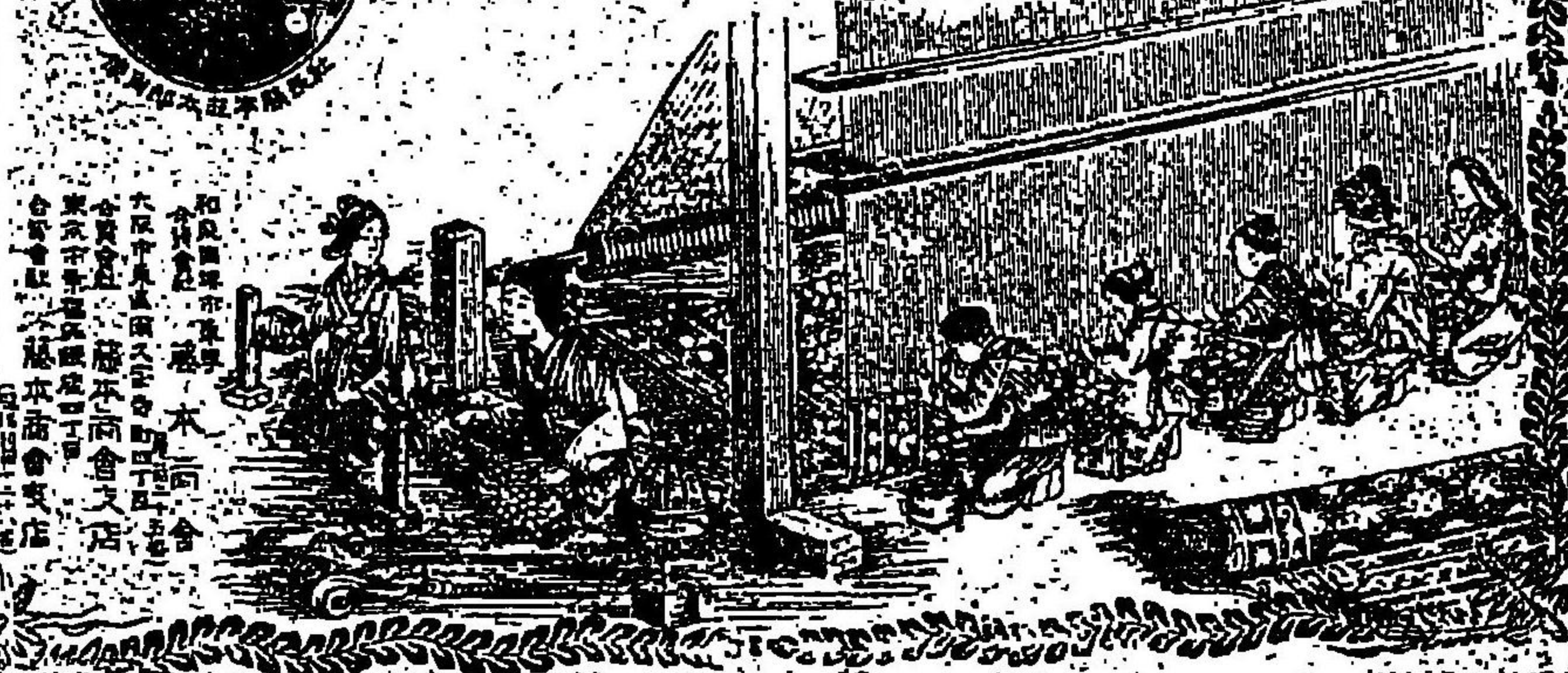
商 標



# 堺 段 通

SAKAI DANESU RUGS

創 業 者  
雙 藤 本 莊 齋 齋  
內 外 國 各 博 覽 會  
全 部 賞 牌 拾 八 種  
銀 木 五 種  
時 事 新 報 放 榮 金 牌



會 社 資

## 藤 本 商 會

(本 店)

大 阪 府 堺 市

車 之 町

(電 話) 堺

二 五 番 長

距 離 通 話

申 込 濟

(支 店)

東 京 銀 座 四 丁 目

(電 話) 新 橋 一 〇

二 八 番 大 阪 心 齋

橋 筋 南 久 寶 寺

四 丁 目 (電 話)

申 込 不 日 開

小 賣 阿 屋

# 段 通 貿 易

(七 五 七 六 七)



# 大日本英語學會

## 第二回會員募集

會長特命全權公使子爵秋元興朝君

- |             |             |                   |
|-------------|-------------|-------------------|
| 文學博士 井上哲次郎君 | 法學博士 和田垣謙三君 | 文學博士 加藤弘之君        |
| 文學士 嘉納治五郎君  | ドクトル 高橋順次郎君 | 文學博士 坪内雄藏君        |
| ドクトル 中島力造君  | 法學士 中川小十郎君  | 文學博士 上田萬年君        |
| 文學博士 矢田部良吉君 | 文學博士 元良勇次郎君 | 帝國大學 名譽教授 チヤムブレン君 |
| 高等師範 岡介山三郎君 | 文學士 金澤庄三郎君  | 文學博士 坪内雄藏君        |
| 文學士 上田 敏君   | 文學士 畔柳都太郎君  | 農學士 佐久間信恭君        |
| 文學士 幣原 坦君   | 文學士 斯波 貞吉君  | 理學博士 アラツドベリ君      |

内地雜居の切迫せる今日英語學の智識は邦人に最も急要なるに係らず人々就て習學する機關に乏く志ある者も空しく慄か飲て志を擲つ者の少からざるは識者の夙に遺憾とせし處也本會茲に感ずる處あり自ら揣らす敢て此急要の萬一に應ぜん爲諸大家の贊助を得通信教授の方法を設け以て有志者に斯學研究の便を興へんを希圖し本年五月を以て之に着手したり、時運の趨勢は大方諸士を促し大方諸士は本會の事業を歡迎し本會は創立以來僅かに半歳を越ゆるに係らず會員を得る七千餘名の多きに達せり思ふに斯かる盛運に至りたる者時勢の急要と及び本會の設備等に宜しきを得たるが故に外ならざるべし本會の光榮豈亦大ならずとせんや今や、現在會員の講習は着々歩武を進め將に第二學期に移らんを以て此際別に第二回の講習を開始し初學より講習す苟も英語を學ばんとする者は入會せよ十八ヶ月に卒業し専ら英語に精通し得べし

本會は毎月二回講義録を會員に頒布す●束修金廿錢會費一ヶ月金廿八錢六ヶ月金一圓六十錢十八ヶ月(全額)金四圓六十錢但し郵券代用は一割増●講義録は寶品にあらず故に希圖者は直接本會に入會するを要一覽書を見るべし郵券二錢送附あれば呈す

東京市麹町區飯田町四丁目十六番地

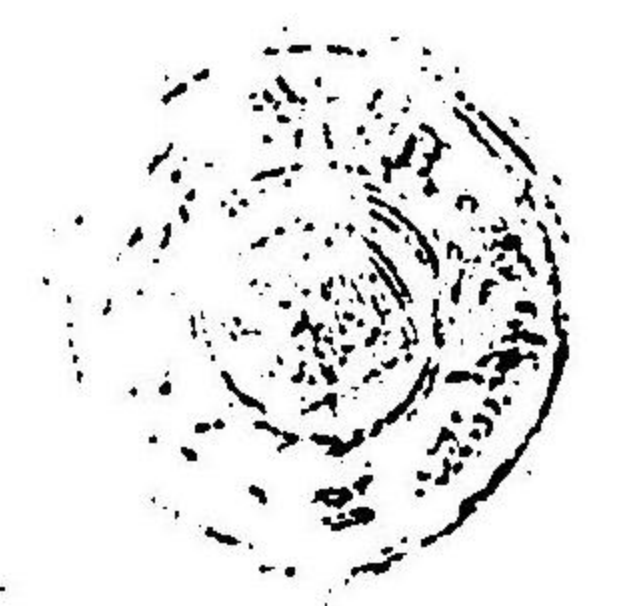
大日本英語學會

轉瞬之間  
濟名



勝

成齋老人頌

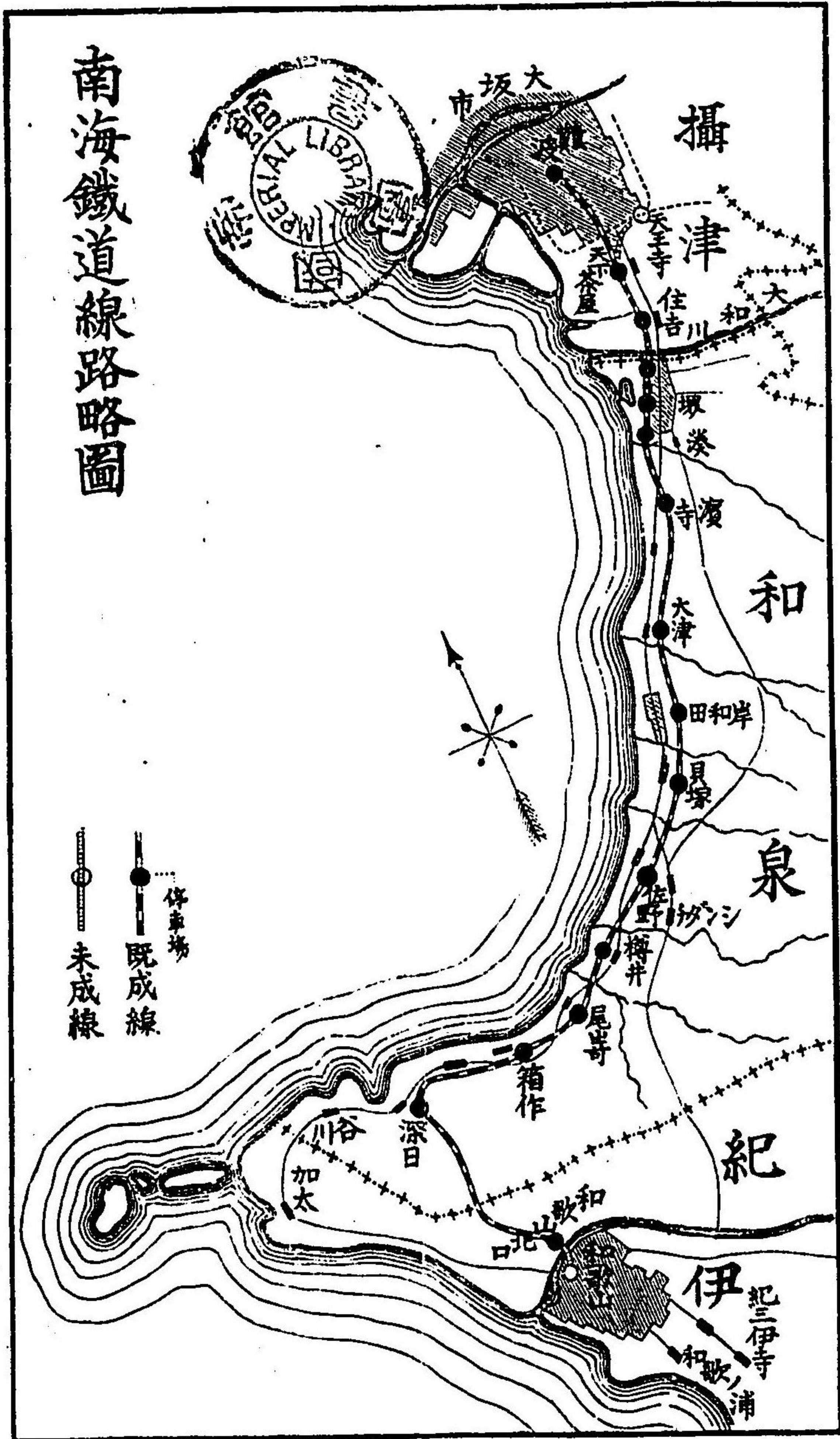




竹園  
竹園  
竹園  
竹園  
竹園  
竹園  
竹園  
竹園  
竹園  
竹園

永

南海鐵道線路略圖



○南海鐵道旅客案内序

頃日余遊左海、與小林翠陀同搭瀛車以歸、翠陀謂  
余曰、瀛車通而名勝壞矣、驚問之、則曰、紀人謀埋和  
歌浦以爲遊園、余曰、然、不可無一書存舊也、其翌、值  
文海宇田川君寄此冊乞序、閱之則泉紀名勝悉錄  
無遺、考證頗確、此以便遊觀也、而亦得我心、乃錄與  
翠陀相語者、辨其首。

明治丁酉天長節前三日

七香齋主人恒錄

車輪雙翼。此南海鐵道之信號也。乘之而往來者。顧  
 眄攝泉之滄溟。指點紀和之峻嶺。一霎時而足矣。快  
 哉。快或若懷斯書。就其所停。以探古跡。攬勝景。則奮  
 勵志氣。豁開胸宇。而爲家國。成事業也。將益廣大矣。  
 宇田川君著述。至此其功勞顯焉。嗚呼。瀛車運用之  
 捷利。比之於大鵬圖南。豈其讓乎。豈其讓乎。

明治三十一年十一月二十一日

倉田績識

總目錄 (上卷)

總	目	録
緒	書	一
南海鐵道の位置	大阪	三
道頓溝	劇場及び俳優	八
千日前	五花街	二
法善寺及自安寺妙見寺	二ツ井戸及津の清の岩松一帯の帯地	一五
高津社	高倉稻荷	一七
生玉	産湯清水及小橋里、朧衣塚	一九
舍利寺	紅葉寺	二一
四天王寺	天王寺公園	二二
阪松山一心寺高岳院	清水	二八
増井清水		二九
		三二
		三四
商業俱樂部	珊瑚寺	三四
月江寺	隆泉寺及胎延寺	三五
吉祥寺	苗新梅屋敷	三五
苗新梅屋敷	桃谷	三六
眞田山	圓珠庵	三七
圓珠庵	家隆廟墳及伊達自得翁墳	三八
家隆廟墳及伊達自得翁墳	陸奥伯の墳	四一
陸奥伯の墳	廣田神社	四四
廣田神社	今宮	四四
今宮	木津大黒天	四五
木津大黒天	難波水津市場	四六
難波水津市場	瑞龍禪寺	四六
瑞龍禪寺	難波午頭天皇	四八
難波午頭天皇	大阪鐵道湊町停車場	四八
大阪鐵道湊町停車場	玉造	四九
玉造	豊津稻生社	四九
豊津稻生社	森の宮	四九
森の宮	網島	五〇
網島		五〇

上 卷 目 録

大長寺	五〇
櫻祠	五一
源八渡口	五一
水道の水元地	五二
福島天神祠	五三
逆松	五三
野田の藤	五三
竹林寺	五四
茨住吉神社	五四
源光寺	五五
名柄川	五五
長柄橋蹟	五六
長柄川渡口	五七
鶯塚	五七
鶴淵寺	五七
崇禪寺	五八
天満神社	五八
天満菜蔬市	六一
桂木山大融寺	六二
八軒屋	六三
造幣局	六四
堂島米穀取引所	六五

商品陳列所	六六
郵便電信局	六八
鯨の松	六九
梅田停車場	六九
梅田電信局	七〇
西成鐵道	七〇
郵船通運二會社支店	七〇
曾根崎新地	七〇
露天神社	七一
北野天神社	七一
堀川戎神社	七二
北野凌雲閣	七二
中の島公園	七二
激江の納涼	七四
三大橋	七六
大坂城	七七
博物館	七七
商店の集合	八〇
高麗橋	八一
大阪株式取引所	八二
御靈神社	八三
浪花館	八三

總 目 録

津村御堂	八四
難波御堂	八五
上難波仁徳天皇の神社	八六
坐摩神社	八六
順慶町	八七
心齋橋通	八七
商品會	八八
名物案内	八八
三津八幡と三津寺	八九
四橋	八九
新町橋	九〇
新町	九一
阿彌陀池	九二
堀江の遊廓	九三
松島の遊廓	九三
雜喉場	九六
安治川	九六
瑞賢山	九七
天保山	九七
澤邊	九八
大阪府廳	九九
居留地	一〇〇

河口波戸場	一〇一
大阪商船株式會社	一〇一
大阪築港	一〇二
種々の案内	一〇三
有名の旅館	一〇四
有名の料亭	一〇四
川魚料理	一〇五
鶏肉店	一〇五
西洋料理	一〇六
牛肉店	一〇六
精進料理と天麩羅	一〇六
四季遊散の茶屋	一〇七
寄席	一〇七
落語寄席	一〇七
落語家	一〇八
軍談定席	一〇八
講談師	一〇九
女淨瑠璃定席	一〇九
女太夫	一〇九
其他雜種寄席	一〇九
俄師	一一〇
商業工業兩會社	一一〇

上 卷 目 録

銀行	一一一
案内者口上	一一一
跳忍閣	一一一
阿倍野神社	一一二
安倍野	一一三
小町墳、經墳、播磨墳、萱草墳、松虫墳	一一四
王子の社	一一四
天下茶屋停車場	一一五
天下茶屋天満宮	一一五
紹勳の森	一一五
名物和中散	一一六
天下茶屋公園	一一六
聖天山	一一八
天下茶屋村	一一八
兼好古蹟	一一八
住吉停車場	一一九
住吉神社	一一九
同名物	一二六
住吉神社年中行事	一二六
茶店	一二九
林茶庵古蹟	一二九
吾彦	一三〇
吾彦の觀音	一三〇
新家町	一三一
住吉公園	一三一
霞松原	一三二
小町茶屋	一三三
難波屋の笠松	一三三
住吉神輿火替所	一三四
新大和川	一三四
大和川停車場	一三四
大和橋	一三五
堺市	一三五
堺停車場	一三七
戎島	一三七
七堂ヶ濱	一三八
並松町	一三八
高須	一三九
高須稻荷	一三九
高須の遊廓の迹	一三九
經王寺	一三九
神明の社	一四〇
西本願寺別院	一四〇
善長寺	一四一

總 目 録

成就寺	一四一
金光寺	一四二
寶珠院	一四二
妙國寺	一四三
殿馬場	一四六
菅原神社	一四六
東本願寺別院	一四七
向泉寺	一四七
如意の神社	一四八
熊野小學校	一四九
開口神社	一四九
名物大寺餅	一五一
海會寺井	一五一
曹社	一五二
宿院	一五二
飯匙の池	一五三
山の口筋	一五三
祥雲寺	一五三
方違神社	一五五
百舌耳原北陵	一五七
天王の森	一五七
天王山紅谷庵	一五八
大仙陵	一五八
雁中天皇陵	一六〇
萬代八幡宮	一六〇
少林寺橋	一六二
乳守	一六二
臨江庵	一六二
龍興山南宗寺	一六三
海會寺	一六七
大安寺	一六七
鹽穴寺	一六八
少林寺	一六九
旭進社	一六九
南新地	一七〇
龍神町	一七〇
榮橋	一七〇
堺港	一七一
旭館	一七一
貝細工	一七一
大濱公園	一七一
魚市	一七三
北大濱	一七四
吉川倭右衛門	一七五



上	卷	目	録
一七八		本市の産物	
一七八		三福對	
一七九		旅館	
一七九		銀行と會社	
一八〇		官衙	
一八〇		各名所へ人力車賃	
一八〇		湊停車場	
一八一		人口戸數	
一八一		名産	
一八一		一路山禪海寺	
一八三		家原寺	
一八三		家原の城趾	
一八五		似雲の示寂地	
一八七		蛭子神社と乳岡	
一八八		濱寺停車場	
一八九		濱寺公園	
一九二		大鳥神社	
一九四		和田の城趾	
一九四		和田新發意源秀の墓	
一九四		鉢峠寺	
一九六		陶器莊	
一九七		千貫橋	
一九七		高石神社	
一九八		大津停車場	
一九九		泉穴師神社	
二〇二		藥師寺	
二〇三		國府の清水	
二〇四		式内泉井上神社	
二〇六		五社惣社	
二〇九		式内和泉神社	
二〇九		珍勢縣主居地	
二〇九		御館	
二一〇		和泉宮	
二一〇		葛葉神社	
二一一		葛葉神祠記	
二一三		聖神社	
二一四		上原	
二一五		妙泉寺	
二一六		契沖の舊庵	
二一七		國分寺	
二一八		横山莊	
二一九		父鬼村	
二一九		卷尾山仙藥院施福寺	
二二三		阿彌陀山松尾寺	

總	目	録
二二五	牛瀧山大威徳寺	
二二三	岸和田停車場	
二二三	岸和田	
二三四	岸和田城	
二三九	紀念碑	
二三九	岸城神社	
二四〇	蛤地蔵尊	
二四二	捕鳥部萬墳	
二四三	桑田寺	
二四五	桑田池	
二四六	橘諸兄公の塚	
二四六	光明皇后の塚	
二四七	久米田殿塚	
二四八	三好實休墳	
二四八	積川神社	
二四八	牛瀧	
二四九	貝塚停車場	
二四九	貝塚	
二五〇	金涼山願泉寺	
二五二	感田神社	
二五三	清水の大師	
二五三	長谷川桂山	
二五四	水積觀音堂	
二五六	龍谷山水間寺	
二六〇	鐵道馬車	
二六一	珍勢池	
二六二	顯如の螢穴	
二六二	佐野停車場	
二六三	佐野	
二六四	佐野市場	
二六五	佐野松原	
二六五	佐野池	
二六五	妙光寺	
二六六	蟻通大明神	
二七一	冠池	
二七二	近溪の浦	
二七二	樫井戰場	
二七二	兩將の墓	
二七四	舊家中村氏	
二七五	熊取	
二七六	土丸城蹟	
二七六	火走神社	
二七六	日根神社	
二七七	比賣神社	

上	卷	目	録
二七八	慈眼院	.....	二七八
二七八	日根野城跡	.....	二七八
二七八	茅渟宮舊跡	.....	二七八
二八〇	犬鳴山七寶瀧寺	.....	二八〇
二九〇	岡田	.....	二九〇
二九〇	樽井停車場	.....	二九〇
二九〇	樽井	.....	二九〇
二九四	山の井	.....	二九四
二九四	躑躅山林昌寺并に躑躅岡	.....	二九四
二九五	砂川	.....	二九五
二九六	海會宮舊趾	.....	二九六
二九六	金泉山長慶寺	.....	二九六
二九七	信達村	.....	二九七
二九七	御所村	.....	二九七
二九八	一乘山金熊寺	.....	二九八
二九九	信達神社	.....	二九九
三〇〇	疫神社	.....	三〇〇
三〇一	金熊寺の梅林	.....	三〇一
三〇三	男里村	.....	三〇三
三〇三	男神社	.....	三〇三
三〇三	男水門	.....	三〇三
三〇四	男森大明神	.....	三〇四
三〇五	尾崎停車場	.....	三〇五
三〇五	尾崎	.....	三〇五
三〇五	西本願寺御坊	.....	三〇五
三〇六	菟砥川	.....	三〇六
三〇六	菟砥河上宮舊跡	.....	三〇六
三〇七	自然居士禿倉	.....	三〇七
三〇八	波太神社	.....	三〇八
三〇九	捕鳥部萬邸宅舊地	.....	三〇九
三〇九	波有手村	.....	三〇九
三〇九	道弘寺の舊迹	.....	三〇九
三〇九	お菊の像	.....	三〇九
三一六	貝掛村及び貝掛松	.....	三一六
三一七	指出森	.....	三一七
三一七	箱作停車場	.....	三一七
三一七	箱作村	.....	三一七
三一七	石工	.....	三一七
三一八	田山稻荷	.....	三一八
三一八	濱輪村	.....	三一八
三一九	五十瓊敷入彦皇子御陵	.....	三一九
三二〇	約船守墓	.....	三二〇
三二〇	黒崎	.....	三二〇
三二一	深日停車場	.....	三二一

總	目	録
三二一	深日	.....
三二二	深日浦	.....
三二五	深日行宮	.....
三二五	吹飯城跡	.....
三二五	加茂神社	.....
三二六	國玉神社	.....
三二六	彌勒寺	.....
三二六	飯盛山	.....
三二七	孝子村	.....
三二七	橋邊勢父子墓	.....
三二七	高山寺	.....
三二九	和歌山縣廳	.....
三二九	和歌山縣警察部	.....
三二九	和歌山地方裁判所	.....
三三〇	谷川村	.....
三三〇	谷川港	.....
三三〇	谷川船渠	.....
三三一	觀音崎	.....
三三一	寶珠山光明寺理智院	.....
三三一	風樹山金剛院興善寺	.....
三三四	二宿觀音	.....
三三五	小島住吉社	.....
三三五	木本峠	.....
三三六	和歌山縣廳	.....
三三六	和歌山縣警察部	.....
三三六	和歌山地方裁判所	.....
三三六	和歌山縣第一尋常中學校	.....
三三六	和歌山男子高等小學校	.....

下卷目錄

一	加田港	.....
四	友が島	.....
九	釣魚、突魚	.....
一〇	加太神社	.....
一五	和歌山市	.....
一六	京橋	.....
一六	和歌山城	.....
一八	和歌山縣廳	.....
一八	和歌山縣警察部	.....
一八	和歌山地方裁判所	.....
一八	和歌山縣第一尋常中學校	.....
一九	和歌山縣男子高等小學校	.....

下	卷	目	録
和歌山高等女學校	二〇	和歌山縣尋常師範學校	二〇
和歌山測候所	二〇	和歌山縣警備司令部	二〇
和歌山市役所	二一	和歌山市會議事堂	二一
和歌山縣會議事堂	二一	和歌山縣監獄署	二一
和歌山縣監獄署	二一	和歌山憲兵屯署	二一
私立病院(神山、山縣)	二二	日刊新聞紙	二二
寫眞	二三	合資會社山崎銀行	二三
和歌山紡績株式會社	二三	株式會社和歌山銀行	二三
株式會社和歌山銀行	二三	株式會社和歌山倉庫株式會社	二四
和歌山電燈株式會社	二四	和歌山織布株式會社	二四
和歌山綿子株式會社	二四	和歌山綿子株式會社	二五
株式會社和歌山商業銀行	二五	株式會社紀陽貯蓄銀行	二五
和歌山印刷株式會社	二五	鹽津和歌山間漁船曳船	二六
株式會社四十三銀行	二六	紀州鐵道株式會社	二六
三井銀行和歌山出張店	二七	株式會社和歌山米穀株式會社	二七
株式會社和歌山貯蓄銀行	二七	南海絹糸紡績株式會社	二七
魚市場	二七	菜蔬市	二七
和歌山出嶋の魚市	二八	綿糸販賣店	二八
書林	二八	勸商場	二九
色染場	二九	芝居小屋	二九
旅館	二九	新聞雜誌賣捌店	三〇
花街(東廓、橋南)	三〇	人力車差立(自由軒、通運)	三一
紀州子	三一		

總	目	録	
紀州製附油	三二	向陽山松生院蘆邊寺	四七
奈良漬	三三	仙境山珊瑚寺	四八
傘製造	三三	慧の森御坊	四八
紋羽織木綿	三四	忍冬酒	五二
小魚酢漬	三四	朝棗神社	五三
花かつら(香油)	三五	慧の森	五四
密柑酒	三五	水門吹上神社	五五
紫蘇酒	三六	男水門	五七
蘆邊織(一名紀州子)	三六	小野港江	五八
蘆梅團扇	三六	志摩神社	五九
煉羊羹	三七	松龍山光明院普門寺	六〇
鰻飯	三七	吹上	六〇
洋食	三八	吹上神社墟	六一
和料理仕出し	三八	吹上の白菊	六一
吳服太物商店(山喜、大野屋)	三八	善曜山蓮心寺	六三
舶來雜貨店(菊地、宮嘉)	三八	増上山仙境院護會寺	六四
寶藥	三八	今福神明社	六四
蕎麥	三八	寶壽山光明寺	六五
和歌浦せんべい	三九	白雲山報恩寺	六七
岡公園	三九	妙見山圓如寺	六八
東岡東館	四六	常住山感應寺	六八
縣社岡の宮	四六	雜賀川	六九

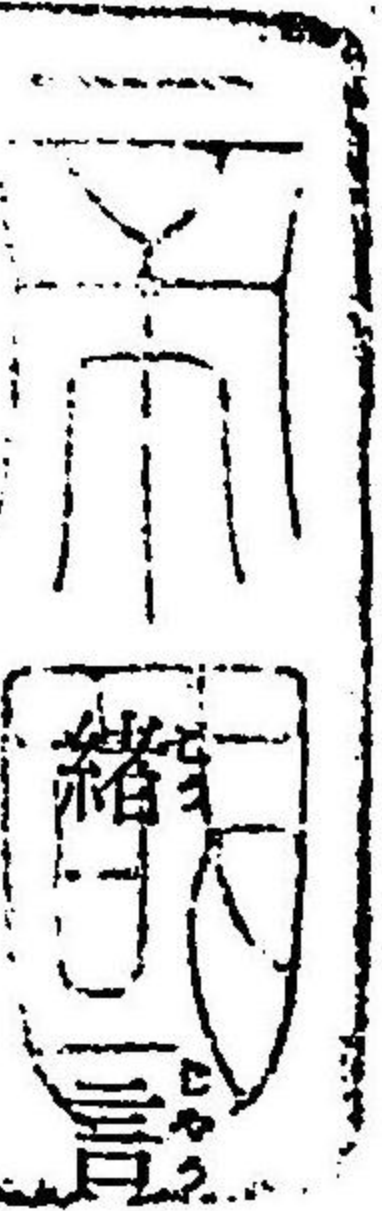
下	卷	目	録
七〇		鹽竈	鹽竈
七〇		紀三井寺	紀三井寺
七四		宗祇阪	宗祇阪
七四		名草山	名草山
七五		名草の嶺	名草の嶺
七五		布引の松	布引の松
七五		濱の宮	濱の宮
七七		琴の浦	琴の浦
七七		琴浦松縁	琴浦松縁
七八		根上り松	根上り松
七九		愛宕山	愛宕山
七九		彌勒寺山	彌勒寺山
八〇		尻口石	尻口石
八一		矢の宮	矢の宮
八一		五百羅漢寺	五百羅漢寺
八二		秋葉社	秋葉社
八二		龜遊巖	龜遊巖
八二		鶴立鳴	鶴立鳴
八二		蘆邊寺西跡	蘆邊寺西跡
八二		宗祇の松	宗祇の松
八三		蘆邊	蘆邊
八三		片葉の蘆	片葉の蘆
八三		天満宮	天満宮
一〇六		和歌浦	和歌浦
一〇七		東照宮御旅所	東照宮御旅所
一一三		不老橋	不老橋
一一三		浦の初島	浦の初島
一一五		芭蕉翁碑	芭蕉翁碑
一一五		日前宮願懸宮	日前宮願懸宮
一二六		鳴神社	鳴神社
一二二		龜山神社	龜山神社
一二三		伊太祁曾神社	伊太祁曾神社
一二七		根米寺	根米寺
一三一		全櫻	全櫻
一三七		全什物	全什物
一三八		粉川寺	粉川寺
一三八		全法會	全法會
一四四		全縁起	全縁起
一四五		全靈地靈跡	全靈地靈跡
一五〇		全寶物什器	全寶物什器
一五一		粉川町	粉川町
一五二		慶徳山長保寺	慶徳山長保寺
一五三		南叡山大同寺法華院	南叡山大同寺法華院
一五五		鳴瀧	鳴瀧
一五六		和歌浦	和歌浦

下	卷	目	録
八三		蘆邊團扇	蘆邊團扇
八四		雜賀の城迹	雜賀の城迹
八四		和歌の入江	和歌の入江
八四		妹背山養珠寺	妹背山養珠寺
八四		蘆邊茶屋	蘆邊茶屋
八五		三斷橋	三斷橋
八六		郭公山	郭公山
八六		經王堂	經王堂
八六		多寶塔	多寶塔
八七		妹背海苔	妹背海苔
八八		窟の祠	窟の祠
八八		響洗岩	響洗岩
八九		獨教盤	獨教盤
八九		玉津島神社	玉津島神社
九三		箕供山	箕供山
九三		岩根のすゝき	岩根のすゝき
九六		妹背牡蠣	妹背牡蠣
九六		和歌松原	和歌松原
九六		妙見山	妙見山
九七		南龍神社	南龍神社
九七		東照宮	東照宮
九九		和歌祭禮	和歌祭禮
九九		愛陽山知足院總持寺	愛陽山知足院總持寺

總目錄終

◎南海鐵道旅客案内五卷

案内者 宇田川文海口述



本年の夏の初め、余微恙に罹りまして、國手津田融君の診察を請ひま  
 したところ、此ういふ疾病は刀圭の技で治すよりは、自然の力で癒す方  
 が宜いから、轉地療養をしたまへとの勧め、仍で近縣旅行を企畫して、め  
 が折柄、恰好、余が親友にて南海鐵道會社の支配人を勤めてゐる、中川  
 君が來られて、鐵道の案内記を書けとの屬托、且つ云はる、やう、  
 聞く所に據れば、君は頃日疾病だといふが、此鐵道の線路は、攝泉紀の  
 三州に跨がり一路半澤の海に沿ひ、和泉の山に傍り、右に白沙、青松漁  
 舟遊鷗を指點し、左に嘉林修竹垂水、嶺峰を顧盼し、淡路島は近く前に横  
 つて呼ば應んどし、摩耶六甲の諸山は層岬遠く藍を堆ふして互ひに奇を  
 呈し、紀路の遠山は連互淡く黛を凝して遙に秀を送る、其風景の絶佳な

ること山陽鐵道と伯仲の間在り、且夫、古社老刹の訪ふ可きあり、古  
 戦場の吊ふ可きあり、其他名勝舊迹收舉に暇あらず、君若筆を載せて一  
 月の遊びを試みれば、心窓の神怡んで、管に二堅の順に其身を去のみな  
 らず、併せて泉石の音、煙霞の痾疾を癒すことを得んと、遂に己が不文  
 誘ひ、勉められたので、遊意勃々自ら禁ずること能はず、遂に己が不文  
 不才であつて、其任に勝へぬ事を、和田風月、松本悦三の二氏を従へて、杖  
 寫真版の技とを併せて能する、和風月、松本悦三の二氏を従へて、杖  
 を攝泉紀の三州に曳き、日を経ること一月餘り、郡衙に登り、名家に  
 古戦場を吊ひ、名勝舊迹を尋ね、學者古老に就き、郡衙に登り、名家に  
 入り、舊記に目を晒し、口碑に耳を傾け、景の美なるは寫真し、事の奇  
 なるを、筆記し、携へ歸つて之を稿本といたしまして、更に史乘に徴し、  
 書籍に考へ、統計書に糾し、漸く此書を作りました、否、余自身案内者  
 と成り、實地見聞した事に、史籍に據て参考した事を附加して、鐵道旅  
 客諸君の爲に説明し、聊か探勝吊古の便を謀り、且旅客ならざる諸君の  
 爲にも、居ながらにして名勝を知るの助けに備へる心算でございます、  
 併しなから、遊歴と編纂と僅々三月の間の日子を費したけの事でご

ざいますから、勿論遺漏錯誤の點も多きを免れませんが、且つ讀んで興味の薄いの  
 日、待て更に補助訂正するの心得でござります、且つ讀んで興味の薄いの  
 は、余の不文不才のいたすところでござります、且つ讀んで興味の薄いの  
 ます、篇中掲ぐる所の寫真畫は、悉く實地の撮影にかゝるもの、次第を  
 逐うて其箇所々々に就て説明いたします、是から地理と名勝と新事物を  
 説くに先つて、聊か該鐵道の経歴からお話しませう——此案内は、  
 案内者が諸君に對つて御案内をする心得乃ち筆で書くといふよりは、寧  
 ろ舌で辯るのですから、其思召しで——

南海鐵道の位置

我南海鐵道は、大阪府下攝津國大阪市南區難波新地六番町に起り、和歌  
 山縣下名草郡紀の川の北岸に終る、其間の里程凡そ四十英里、攝泉紀の  
 三國を貫通して、難波、天下茶屋、住吉、大和川、堺、湊、寺、大津、  
 岸和田、貝塚、佐野、樽井、尾崎、箱作、深日、和歌山の十六驛に停車  
 場を置き、又天下茶屋驛より分岐して、大阪鐵道の天王寺驛に接続す、  
 其位置、東は大阪京都名古屋東京の官設鐵道、及び草津四日市龜山津に



すが、中にも東横堀及び西横堀道頓堀等は、最も長流でございまして、又木津川で再會ふて海へ注ぐやうに出来てをります、近年水道が出来、又下水道の築造、且は裏屋の改造等が出来て、一層清潔便利になり、接近郡村が市に編入になりましたので、餘程區域を廣め繁榮を添へました、が、いよ／＼築港落成の曉、市區改正の日に、實に日本、否、東洋の一大都會に成りませう、序に大阪に尤も因縁の厚い仁徳天皇の御紀畧について一言申述べます、

仁徳天皇は又の御名を大鷦鷯尊と稱し奉り、應神天皇の第四の皇子にわたらせたまふ、父帝の應神帝崩じたまふ時、第五の皇子菟道の稚郎子にわたらせたまふ、御位を譲らんとすの御遺詔がござりましたが、稚郎子には譲らざりて、御心厚くわたらせたまふゆゑ、兄皇子の大鷦鷯尊に向ひ、我は弟にて而も文獻不足なれば、迎も大業に登らんと思ひも依らず、兄君には風姿岐嶷仁孝厚く、天下の君と成りたまふに足れるばかりか、昆は上であつて季は下であり、且聖は君となり思は臣となるは古今の常典であるから、速に聖位に即きたまへ、余は臣と成て仕へ奉るで有うと宣ひたれど、大鷦鷯尊は父帝の命を重んじて辭して肯ひ玉はず、各々相譲り

空位にして三年を過したまひしが、稚郎子には兄君の志の奪ふ可らざるを知り、豈久しく生て天下を煩はさんやと宣ふて終に自ら死なれました、大鷦鷯尊には之を聞て大に慟哭したまひ、いよ／＼御位に即きたまふ御氣色のなかつたのを、百濟國の書博士王仁が、既に空位三歳に遠ぶ、君の愁ひは天下の愁ひである、一日も早く登極あつて民の煩ひを愈し、寶祚長久にあらば、四海の幸ひこれに如かずと、頻りに諫奏して「浪華津に咲や此花冬籠り、今を春べと咲やこの花」の歌を詠じて諷し奉つたので、元年の春正月大鷦鷯尊始めて御位に即きたまひ、此難波に都をたきたまひて、之を高津の宮仁徳天皇と稱し奉りました、帝御位に即かれしより節儉を専らにしたまひ、一日高臺に登りて民戸の炊烟の乏しく衰徴の色あるを觀察したまい、是を恤んで課税を許したまふこと三年、ふたち朕の富めるなり、百姓富んで君の貧きは未だあらずと云ひて、甚く御歡びになりました、後年延喜の聖代に至りまして、藤原の時平公、帝の御仁徳を稱へ奉つて「高きやにのぼりて見れば煙立つ、民のかまどは今ぞとみける」と詠れました、此歌を新古今集の賀の部に「高きやにのぼ

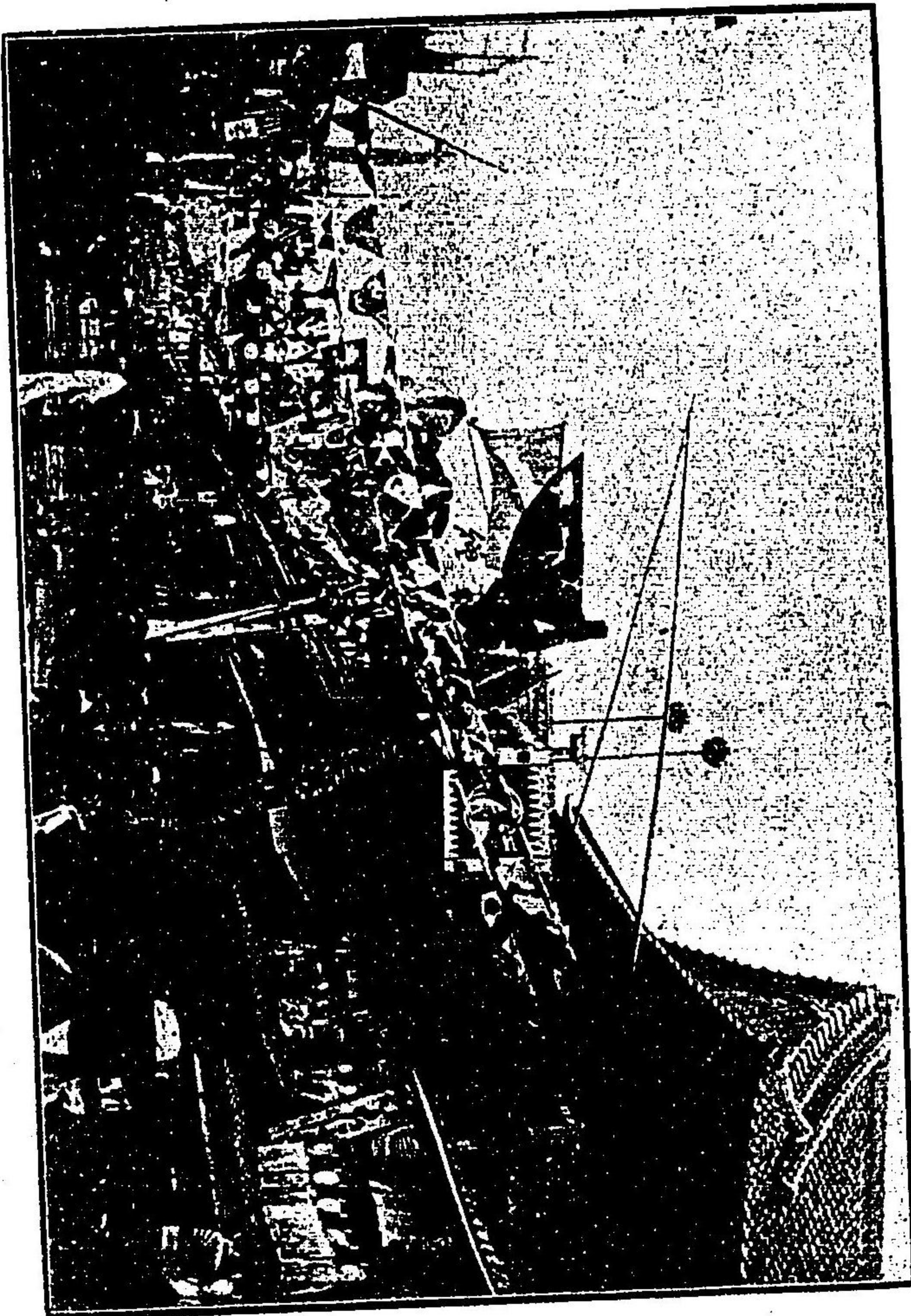


りて見れば煙立つ、民のかまどはにぎはひにけり」と下の句を引直して、帝の御製として撰れましたので、今の世にも尙その誤りを傳はてをりますから、つひでなから一言その事をも述べられます、先づ難波停車場近傍の名勝より御案内いたしませう

道頓堀

難波停車場を距ること四町餘り、是所は今の南區長安井健治君の祖先道頓翁が開鑿されたところで道頓堀の名はその紀念として附られてあるのでござります、東溝より流れて日吉橋の西で木津川に入つて、海に會するやう堀てござりまして、頗る水運の便利を興へました、長く其功勞を忘れぬ爲め、其名を其まゝ、溝の名につけたといふことでもござります、因に申しおきます、東溝は舊大阪城の外濠で、元和の昔豊臣徳川相約して、大阪城の外濠を墮ち外濠を填めた際、此溝だけを残したのでござります、日本橋より蛭見、新蛭見、大黒の三橋に至るの間、尤も熱鬧を極め、一側は五座の劇場、一側は劇場茶屋、其他は青樓飲食店を以て充されてをります、昔はいろは茶屋とまをして劇場附属の茶屋の数が、四十八軒あり

す、飲食店は九方、井筒、京興など、就中世に聞かれます、此道頓堀は、紗歌の響電燈の光が吹いてをります、



Theatres at Dotonbori, Osaka. Close to Namba Station.

つたさうでござります、今は參拾六軒ござります、其中で、三龜、河里、近安など尤も有名です、

大阪道頓堀車馬場

海と不夜城が一時に現出したかど怪まるばかり、大阪市中第一等に位する繁昌の地で、貴賤老若、群集雑沓、朝より夜、否、鴉のカーと啼くより鴉のカーと啼くまで、衣香扇影の断間のない位、さすが土地自慢の東京見も、此處の繁昌には舌を巻く程です、田中金峰が大阪繁昌詩に此處の繁昌を「嬌妓洗顔紅粉粧、波龍厨裝、一盃欲解醉中渴、汲得二春流、全是香」と述べてござりますが、今はなかく夫にも彌増す勢ひですが、其繁昌の半は、戯場があるからでござります、

劇場及び俳優附人形劇場

劇場は實に大阪第一の名物でございまして、又大阪人が第一に好む所でございまして、否、他府縣から入込む人も、簡要の用務の外は、先づ劇場の見物が第一の目的でございまして、現今道頓堀に劇場が五座ございまして、其名稱は、浪花座、中座、角座、朝日座、辨天座、而して、浪花、中角の三座を大劇場と唱へ、朝日、辨天の兩座は、中劇場とまをしてをります、浪花と角の兩座は、演劇株式會社の所有、中は三河彦治、朝日は淺野治助、辨天は尼野貴之の所有でございまして、各座とも一年

數度の興行、其度毎に相當の大入を占めてをります、此劇場の繁昌は、大阪が東京に優るの二つに數へられてゐます、是に出演の俳優の重なる者は、市川右團治、中村福助、嵐橋三郎、片岡我當、中村馬次郎等、其者、其藝を以て、或は艶を以て、或は人氣を以て、世上の喝采を博する者、其員百を以て數ふ可く、なか／＼枚舉に暇がありません、此他に成美團、福井一座などの壯士俳優も數十名ありまして、序に道頓堀以外の各劇場を御案内いたしませう、北區梅田に大坂演劇會社の所有にかゝる、大坂歌舞妓と云ふがある、是は重に形式を洋風に探して、當市中第一等の新様の劇場で、優に大劇場の數に加はるものです、同區會根崎新地の福井座、同區大工町の天満座、西區松島花園町の八千代座、同區北堀江上通一丁目の堀江座、同區同上通り二丁目の明樂座、南區千日前の横井座、是等は孰も小劇場でございまして、人形劇場は現今文樂稻荷の二座ございまして、文樂は、平野町の五靈社内に、稻荷は、博勞町の難波の社内に、互ひに牛角の勢ひを張てをります、文樂の方には越路太夫の美聲を以て鳴り、稻荷の方は團平の妙手を以て響いてをりましたが、惜い哉、稻荷の團平は、去年故人になりました、

文樂の方には、越路の外津太夫、呂太夫、綾太夫等の名ある太夫がをり、又三絃弾には、廣助を始め、吉兵衛、勝七、叶松太郎等の上手がをり、人形遣ひには、玉造、紋十郎、玉助等の名人がをります、彌太夫、大鶴太夫、組太夫、住太夫等の上手の太夫、團平は故人になり、また、大鶴太夫、龍助、源吉、小團二等の巧者の三絃弾、清十郎、玉松等、老練の人形遣ひがをりまして、是は大坂の特有物として、東京に優る、否天下に誇るのいでございませう

序に申して来ます、劇場を見物するのには、番附面に載せてある直段だけで見物が出来ると思ふと、大きな違算、棧敷なり、高士間なり、土間なり、一問買へば、注文しなくとも、茶、菓子、煙草、盆、敷物、番附等を出して、夫々代價を申し受け、其外に込みといふ物もありませう、遠國の旅客で見物なさる方は、其邊のね心得がないと、迷惑をする事があります

次に千日前の方へ御案内いたしませう

千日前

昔は刑餘の骨を埋めて、悲風塔婆を吹きたりし地今は興行物見世物を以て群集雑沓の巷となせり、千日前は道頓堀より南へ折れし處にあり、右皆寄席興行物を列ねて、鐘鼓の聲日夜に絶ず、或は北海の熊を飼ひ、或は印度の蟒蛇を固にし、奇獸異鳥の世に出づるもの、必ず一度此地を過ぐ、管に鳥獸のみならず、人類にして觀み物となるもの、頻々として踵ぐあり、一寸坊は既に己に看客に珍らしからず、日本無双の世界第一の大漢も、々々來阪出現して、孰が第一なるを知らず、日本無双の珍品と稱して、二つも三つも現はるゝあり、天下唯一の奇物にして、五ツも六ツも列ねるあり、古來釋迦の骸骨幾個もあること、豈怪むを要せむや、時に集りて可憐の藝を演ぜしむるあり、甲に洛陽の太夫あれば、乙に東都の花魁あり、白川の田植女、琉球の貝探り、乃至南海、山陽、山陰、東海、北陸、入道の奇觀此一區に會りて、其真相を示さるなし、然り而して其真相の解頗る難し、只實地を知らざる者のみ真相を信ずべきなり云々、是島田小葉君が大坂新繁昌記千日前の賑ひの題の下に記された處でございませう、頗るその真相をつくしてをりますから、その文を引いて案

内の口上に換へます、頃日千日前で興行したものなかで、尤も喝采を博したものは、寫眞活動機原名シテマトグラフと、英人ブラツクの催眠術でござります、又多くの興行物の中で、小屋も立派で且尤も盛大繁昌の物は横井座の戯場、鶴屋團十郎一座の戯劇、播重席の女義太夫、奥田席の大運動等とござります、又廉價を以て飲食物を賣る物が多くありすが、一杯五厘の氷水、一杯五厘のアイスクリム等尤も同所の名物でござります、此處に新金刀比羅の社がござりまして、其勝負に依て大阪力士の給金が定るので、東京なら回向院の本場所とござります、又此所及び道頓堀心齋橋筋などは、掏見の淵藪とござりますから、旅客諸君懐中物の御用心が第一、序でながら一寸御注意、

五花街

大阪は尤も遊治の地に富んでゐますが、その中でも南地の五花街が第一の繁昌を占めてあります、五花街とは、宗右衛門町、九郎右衛門町、難波新地、阪町、櫛町の五街を總稱していふのです、中でも宗右衛門町が

第一に位し、難波新地が之に次ぐのです、五花街合して貸座敷(甲部)四百八十戸、居稼貸座敷(乙部)百〇八戸、藝妓五百八十三人、娼妓甲部六百五十七人、同(乙部)千百十五人、帮間十五人、貸座敷の中で有名なのは宗右衛門町で、富田屋、見山屋、中雪、九郎右衛門町で、大七、山國、難波新地で、北梅、大西、竹葉屋、阪町で、伏善、櫛町で得田屋等です、藝妓の尤物は——オットあまり案内が密に亘ると却て親切が仇に成るの憂いなきにしもあらずですから、此等で御免を蒙りませう、何にいたせ、晚鐘一聲響否哉、百千の燈火一時に輝き、各種の絃歌一齊に鳴り、不夜と歌吹の兩城を咄嗟の間に湧出して、六百に近き青樓、二千に餘る藝娼妓、家として藝娼妓として、客なきはあらずといふ盛況、イナ家は客を以て充たされ、藝娼妓は客の引張爪といふ勢ひ、此一事にても第二の都市の繁昌を卜するに足るです、

法善寺及自安寺妙見寺

寺は中角兩戲場の南でござりまして、東門は阪町の青樓に對ひ、西門は難波新地の青樓に向つてをります、寺中に象頭山神廟を安置してありま

して、日夜香華が断りませんが、殊に毎月十日は夜肆が出来ます、格別の賑ひ、賽客廟前に充滿しまして、喧埃太揚り鬧熱最熾すといふ景況、十月十日の祭儀は甚だ盛んでございます、此廟へ参詣する人は土地柄とて藝妓尤も多数を占め、又その祈願も種々で、情事の爲に髪を剪る者もあり、酒を禁つ者もあり、袁彦道を絶つ者もあり、裸身に水を漉いて狂走る者もあり、彼の田中金峰が大阪繁昌詩に此寺を詠じて「一孔華鯨一曲歌、梵王宮外漲秋波、眼前未至意中客、香火私祈金毘羅」その一般をつくしてあります、此寺内に桂一座の落語席、女義太夫席、講談の席の三席がござりまして、晝夜興行してをります、水茶屋が二軒、入舟縁の二料亭、善哉屋は夫婦に湖月、又すし屋菓子屋などの多くの飲食店がござりまして、何でも好きな物を見たり聞たり喫たりすることが出来ます、竹林寺は法善寺の南隣で、弘法大師を安置してあります、毎月廿一日は賽人殊に多く、平日でも香火の絶間のない賑ひ、自安寺は妙見大菩薩を安置してあります、例日も参詣人が澤山ありますが、殊に午の日は縁日で大層な賑ひ、阪町通りから日本橋通りの裏まで、種々の夜店が出ます、夏向きは植木商が格別多く出まして、人の群集も多くあり

ます、

二ツ井戸及津の清の岩れこし轡の帯地

難波停車場を

距ること五町餘

往古から名高い井戸で、東堀留町に在たのでござりますが、道路變更の爲め、當時は取崩しに成て、大阪名所の一つを失ひましたが、此近所で、津の清の岩れこしと、轡の帯地の二軒だけは今尙繁昌してをりまして、旅客が國への土産にとて、競つて買つて行かれます、

高津社

難波停車場を距る十町餘

社は西高津にあります、上古の社地は是より北の方小橋寺町より餌指町に至る所でありましたが、天正年中に此地に移されたといふ事です、原は聖徳太子が始めて神廟を建て祭られたのですが、桓武天皇平安に遷都あつて、洛北平野に移され、則ち平野神社と稱されたといふ事です、祭神は仁徳天皇、末社が九社攝社が三社ありまして、例祭は六月十八日、秋祭は九月十八日で、鳥居の内に梅の橋といふがかけてありまして、其

南を梅の辻とまをします、社頭に高臺之頌碑があり、明和九年秋八月朔日に建たので、平安の芥煥彦章甫が、文を撰み、浪華の牟純平介甫が宇を書いたのです、此社頭は道頓堀の東の尤も高い處であり、社殿は南に向つて頗る壯麗を極め、老蒼たる喬松は賽路の兩傍に列り、又近來社側に舞臺の新築が出来て、爰に躡つて西の方を望めば、幾萬の人家鱗次櫛比一眸の中に集まり、數百の煙筒の空に向つて黒煙を吐くは、製造の盛大なるを證し、數千の旗幟の風に翻つて樹簇するは、戲場の繁昌なるを露はし、高厦の峙つは兩本願寺、洋風構造の白聖の皎々たるは府廳の火見臺、又帆樫の林立するは安治川及木津川の港口、六甲武庫の山々、渺々として海外に峙ち、洋々たる海面金波湯搖し、日光反照し、その艶耀は正視に見ることの出来ぬばかり、瀛船黒煙を吐いて絶えず去來する景況等、貿易の盛んなるを知らしむ、實に浪華の一大美觀です、境内の茶肆に望遠鏡を置いて、常に參詣人の娛樂に供へてあります、仁徳天皇は、民の炊煙の厚薄に依て、その貧富を察したまひし仁君にてわたらせたまへば、今日の大坂の繁昌、否、煙筒が日々に數を添るを見そなはして、さうかし慮をなぐさめおはしますでござりませう、境内に名高

い湯豆腐屋があります、青樓宿醒客、常携妓從牽頭子、來催破卵飲」と大坂繁昌誌の自注に陳てありますが、今はその繁昌はござりませぬ、

高倉稻荷

高津の境内の北手の一隅にござりますが、信心の人極めて多く、晝夜、四時、參詣の斷間がござりません、甚しいのは本社の前を素通りして、此社へばかり參詣して行く者もあるといふ噂で、數ある市内の稻荷の中で、繁昌は第一等でござります、

生玉

難波停車場を距ること九丁餘

社は高津の南にありまして、官幣大社です、祭神は延喜式に生國々玉二座とあり、三代實録には、貞觀元年春正月從四位下を授け、秋九月奉幣雨を祈るとあり、當市の上町一圓の生産神と崇められ、例祭は六月廿八日之を御稔と稱へ、九月九日を秋祭とまをします、五月の五日に走馬儀もあり、當社勸請の始めは、年歴が久遠で詳らかであり、せん昔の社頭は、今の大阪城の在るところの地でありましたが、明應四

年本願寺遺如上人御堂創建の時社を傍に移し、其後信長と本願寺の合戦の時兵燹に罹つて灰燼となり、僅に形ばかりの小祠を營んでありましたが、慶長の始めに豊太閤大阪城を修補するのついで、今の社地に遷され、奉行は片桐且元であつたといふことです、末社は都合九社、境内に秀頼の寄附の名物の石燈籠がありまして、神寶には菅家より寄附の神輿と、其中に靈玉が納めてあります、社地高爽、西南の眺望極めて好しく、市中の万戸、各所の官衙大刹大會社、且は製造場の煙筒河口の漁船の帆檣など、天を摩し雲を裂くばかり、高津の社頭に續いで、絶景、曾て馬場前に娼家軒を併べ、社内に觀物、齒磨賣の居合抜き、女祭文、浮世物真似、賣卜法印、切艾屋、作り花店など軒を連ねた、當時の繁昌は今に空しく夢と醒めてありませんが、尙數軒の茶店がござりまして、四時參詣人の絶間がありませんが、とりわけ近來は新道を開き、又境内に多くの櫻を栽えまして、花の頃は非常の雜沓を極め、生玉の夜櫻は大阪名物の一つに數へられるやうになりました、

産湯清水及小橋里胎衣塚

難波停車場を距ること十丁餘

美原の池の南にありまして、大小橋の命の産湯の水といふ傳へで、頗る名泉でござります、その上の丘に稻荷の社がありまして、之を産湯の稻荷と稱へ、境内に産湯樓といふ料亭がありまして、二階に登りますと眺望が頗る宜しうござりますが、桃花の開くころは格別の風景でござります、この傍に胞衣塚といふがあります、乃ち大小橋命の胞衣を埋めたところ、又此近所に小橋里といふありますが、是は大小橋命の館舎のあつた迹です、

舍利寺

難波停車場を距ること拾丁餘

舍利寺村にあり、最初は聖徳太子の開基、中興は木庵禪師、山號は南岳山、宗旨は黄蘗、本尊は釋迦佛、額は木菴筆、太子堂には聖徳太子四十二歳の尊像を安置、堂内の額は隱元、筆、聯も同筆、外額は木菴の筆、筆、禪堂の額は脱山の筆、祖堂の額は道宗、筆、表門の額は木菴の筆、聯も同筆、當寺の門前に太子御影の松といふ名木があり、是は一歳兵火の爲に此寺の諸堂灰燼と成た時、太子の御影が飛で此松に掛つて恙なきことを得たといふ傳へがあるので、書院の庭に和泉式部腰掛松と

いふがおりますが、其傳へは確と分りません、新古今に「尼にならんと  
思ひたちけるを、人のとめければ」と端書して「かくばかりうきをしの  
びてなからへば、これよりまさるものこそ思へ」といふ歌が載せてあ  
ります、發心して此邊を彷彿ふたことでもあるのでありませうか、舍  
利寺の名は聖徳太子毘婆尸佛の舍利三粒、其中二粒を天王寺と法隆寺に  
藏め、一粒に自筆の御影を添へて、此里の生野長者に附與されましたが、  
長者これに依て一字の精舎を建たのが、此舍利寺だといふ傳へ、境内に  
三十三所の觀音の模造が有て、以前は參詣人の絶間が無く、なか／＼の  
繁昌であつたといふことです、

紅葉寺

難波停車場を距ること十二丁餘

寺は天王寺の東門より北へ半町許り隔つた東側に在ります、境内はさま  
で廣大ではありませんが、古い楓木が數百株ありまして、眺望も面白く、  
春は芽出し秋は紅葉、共に二月の花よりも紅ですから、停車坐愛の客が  
澤山あります、

四天王寺

難波停車場を距る事十三町餘

當寺は荒陵山四天王寺敬田院とまをして、東成郡天王寺村にありませす、

大 阪 天 王 寺 景  
難 波 停 車 場 三 十 丁



Tennyōji (Buddhist temple), Ōsaka.  
One mile from Namba Station.

子の草創で、人も知りたる日本伽藍の最初でず、太子の傳と當寺草創の

昔は八宗兼學、今は天台宗、又の名を、難波大寺、三津寺、法華園、堀江寺、荒陵寺、ひます、聖徳太子



由來は、既に人口に膾炙する所ですから、案内者は敢て喋々いたしませ  
 ん、最初は玉造の岸に建立されたのでございませうが、後に其所より三拾  
 餘町の南の荒陵地、乃ち今の場所へ引移されたので、建立以來多くの  
 星霜を経ましたから、屢々荒廢に屬しました。天子將軍の祟敬厚くし  
 て、速かに修造を加へられ、今日にいたつたのでございませう、近くは天  
 正四年五月に寇火に罹りました。其後豊太閤が再興されました、今  
 東門と寶藏だけは其紀念だと云ふ事です、又元和年中にも兵火の爲に灰  
 燼に歸しましたが、慶長年中に徳川將軍が再興されて、總て舊觀に復し、  
 其後又享和の元年に、天火が五重の塔の上に落ちて、諸堂まで延焼しまし  
 たが、淡路屋太郎兵衛といふ紙屑屋で有たと云ふ人の、大信心、大盡力  
 に依つて、勸化他力の功を積み、堂塔迦藍漸く舊に復し、目今の天王寺が  
 即ち是です、此人の功を重んじて、其像を作つて一堂の内に安置して  
 あります、日本紀に見えたる淨刹は、多くは頽廢して、只僅に其名のみ世  
 に存し、梵宮だも猶消滅すの嘆を免れないに、此寺のみ、草創の時の  
 相を存して、一千三百有餘歳の星霜を累ねましたは、誠に稀有の事、  
 地球上多く得がたい名利でございませう、殊に今日では、其境内の一部が

公園に成て、春秋二季は勿論、夏冬共に、市民の信心参りと保養を兼て、  
 一層の繁昌を添へました……諸堂と名勝の概略を御案内申せば……○金  
 堂は……南大門の内に有て、本尊は如意輪觀音、彌勒佛、四天王○青龍  
 池は……金堂の内に有ります、白石玉出の水とまをして、龜井の源で、  
 ございませう、此水は樋を通つて龜井堂へ流れておます○轉法輪石は……  
 金堂の前に有ります○五層法塔は……金堂の南にあつて、層毎に雲水の  
 彫物が有りますから、雲水塔ともまをします○講堂は……金堂の北に雙  
 んで、阿彌陀佛、觀音、聖至、虚空藏、四天王等が安置して有ります○  
 鐘樓は……講堂の後ろ蓮池の側に有ります、此鐘を無常院の鐘、俗には  
 又、引鐘ともまをして、黄鐘調だといふこと、此鐘を無常院の鐘、俗には  
 東に有ります○舞臺は……蓮池の上の有て、石臺です、毎年陰曆二月二  
 十二日の聖靈會に、此舞臺の上で俗人が樂を奏する例です○樂屋は……  
 其左右に有ります○大寺の池は……舞臺の下に有つて、蓮の名所です○  
 六時堂は……蓮池の前に有ります、藥師、日光、月光、觀音、其他の佛  
 像が多く安置して有ります○食堂は……北門の側に有て、本尊は元三大師と普  
 が安置して有ります○椎寺は……北門の側に有て、本尊は元三大師と普

德川將軍代々の神牌が置てあるから、俗に之を御靈舎と申します。○西門は弘法大師も此門で日想觀を修したといふ傳へがあるもので、古來當寺の四門の内、尤も此門に重きを置てあります。○引導石は西門の外に在ります。○石華表は是も西門の外に在ります。○此華表に額が掛けてあり、釋迦如來、轉法輪所、當極樂土、東門中心の十六字が書いてあり、筆で、世には之を道風、又は弘法の筆など云ひ囃します。○此門は前に云ふ通り、秀吉の再興、今に奉行片桐且元の名を留め、彫物の美麗を以て、世に名高うございます。○影向石は東門の外に在ります。是は四石の筆つ、○下馬の表石は當山四門の前に在ります。○愛染明王を安置してあります。○勝曼院は西門の北西に在りて、愛染明王を安置してあります。○乾の社は六月一日開帳、境内に多寶塔が在ります。○古雅頗る愛す可し。○安井の天神は當寺の北の方に在ります。○祭神は少彦名命、毎年八月廿

賢菩薩が安置してある。○寶藏は東僧坊の東に在ります。此内に納めたる寶物で、殊に名高いのは、○聖德太子揚枝の御影。○本願緣起。○醍醐天皇の震翰。是にも同天皇の御手印が在ります。○太子の御守、緋の御衣。○兩毛柳林の御劔。一口。○六目鑄箭一筋。是は守屋退治の時、太子の用ひ玉ひしとの傳へ。○七星の御劔。一口。○京不見笛。太子作大小二管。○其他名器珍品數百點、一々枚舉ぐる暇が在りませぬ。○龜井の水。寶藏の南に在ります。白い石の間から流れて出るゆる、白石玉出の水とも云ひ、龜の口より流れて出るゆる、龜井とも云ひ、世に聞けた名水です。○聖靈院。金堂の東南に在りて、俗に太子堂と云ひます。太子十六歳の像と、蘇我大臣、五德博士、四天王が安置してあります。○寶殿は聖靈院の奥に在りて、太子四拾九歳の像が安置してあります。○二王門は南大門の内、在りて、金剛力士の像を安置し、獅子と狛犬が表裏に置てあるが、二動物共頗る名作です。○南大門は當山の南門で、是より南の筋は阿部野街道です。○萬塔院は二王門の西に在りて、毎年十月八日より十二日迄、十講會を修行します。○五智光院は萬塔院の北隣り、

日神祭、之を菅公といふは誤りです、境内に櫻が有て、春は賑ひます○  
 安井は此社頭に在て、七井の二つ○万代の池は……南大門の外にありつた  
 のですが、今は田圃になりました、チリヤタラリの橋も、名のみになり  
 ました○俊徳街道は……南大門の外、東に通ふ路○庚申堂は……南大門  
 の南にあり、庚申の日毎に参詣群を成します……次に一年中の法會  
 の中で、尤も著明しいものを一つ二つ述べませう……春秋の彼岸會を始  
 め、陰曆二月十五日の涅槃會、同二月二十二日の聖靈會、是は太子の聖  
 靈を祭る、當山第一の大法會、同九月十六日の念佛會、之を三大會と申  
 します、同三月二日の經供養、俗に之を縁の下の舞と云ひます、之も名  
 高い法會でござります……當山は名におふ一千有餘年を経た古刹で、名  
 勝舊迹、由緒古實も澤山あつて、案内者の類の外れる程饒舌つても饒舌  
 り盡せませんから、只其概略だけを述べておきますが、遠國から來て大阪  
 を見物する人は、一に金城、二に天王寺、三に住吉……是が浪華の三大  
 名勝でござりませう、

天王寺公園

今は當寺内北の一部に公園を置れ、四季の花弁を栽附られしを以て、又  
 一層遊人の數を添へ、春秋の彼岸の外も絶ず賑ひます

阪松山一心寺高岳院

難波停車場を距る事拾丁餘

茶臼山の北にありまして、浄土宗鎮西派、圓光大師廿五箇の舊蹟の一で  
 す、本尊阿彌佛、毘首羯摩天の作の立像長三尺、又方丈に善光寺の如來  
 を摸した一光三尊の金像佛を安置し、二階堂、三千佛堂、御影堂等數  
 棟の建物があります、書院の庭の駒繫松は、徳川家康當寺に來りて、馬  
 を繫いだといふこと、徳川の政府は倒れたれど、此松は今尙蒼々として  
 昔の色を變ず、幹の太一尋半、高貳丈許に繁茂してあます、寺内に二基  
 名高い墓があります、一基は豪傑、一基は名優、乃本多忠朝と、八代目  
 團十郎の墓です、忠朝は大坂夏の役に陳營の場所變更の事より、汝は父  
 には生れ劣れりと家康に罵られ、夫を遺恨に思つて翌日の戦に花々しい  
 働きをして、潔い戦死を遂げ、八代目團十郎は故人七代目團十郎の長男、  
 今の九代目團十郎の兄ですが、嘉永元年父の世話になる座元の懇情黙止  
 芝居の座元より強て招かれ、父の命且は父の世話になる座元の懇情黙止

がたく、遂に大阪角座に登り、狂言は見雷也豪傑物語と浮名横櫓を出し、團十郎は見雷也と與三郎をする筈で、其年の閏七月廿八日に船にて立派な乗込をいたしましたが、其人氣の盛んさ云ん方もなく、乗込の川筋は天満祭にもいや増る賑ひ、看板も上がり、いよ初日も八月六日と定まつたその前夜、行年三十二歳、俳優盛りの身を以て、寓居にて自殺を遂げたのでござります、その自殺の原因について、種々の噂があります、が、父への孝、金主への義理にからまれて、餘儀なく大阪に上つたが、俳優でありながら官より親孝行の褒美を賜はつた位、常より小心翼々たる人物ゆゑ、あまりに人氣の盛んところから、萬一開場の上不評を蒙つては、其身の耻父の耻、且は江戸の耻と、いろ／＼取越し苦勞をして、大に心を傷め、寧ろ舞臺を踏まで死するが増しならめど、一圖に思迫つて自殺を遂げたやうに想はれます、忠朝も團十郎も父に劣ると云はれてはと、名を重んじ技を重んじて死んだのは、その點からいへば奇特の志、夫が夫同じ寺内に葬られたのも奇遇でござります、抑も當寺は文治元年の春、時の天王寺の寺務慈鎮和尚、法然上人を招請して、此地に方四間の草庵を結び、新別所と稱へて上人を住せたのが始め、上人爰に住んで

日想觀を修すること數歳、然るに後白河法皇天王寺の五智光院に行幸の折柄、此新別所に葦を止め、上人と共に日想觀を修したまひ、其時「阿彌陀佛と、いふより外は津の國の、なにはのとも、あしかりぬべし上人」難波瀧、入りにし日を、詠れば、よしあしとも、南無阿彌陀佛法皇御製の贈答の和歌がありまして、上人これを眞筆に書とめ、之を難波名號とまをします、其後兵亂の爲に類撥に風しましたが、慶長の始め然道社本譽上人、圓光大師の舊蹟を訪ねて再興し、一心歸命の義を以て寺號といたしました、慶長五年の秋、徳川家康當山に來り、上人の勤行堅固なるを賞嘆し、上人の望みに應じて、殺生禁斷の制書を與へ、山内の古松に馬を繫ぎ、千歳貞松と祝し、地名を相阪と云へば、即ち有合ふ障子の板面に筆を染めて、阪松山の額をした、めりて贈られたといふ寺の傳へです、書院の椽側の側に名高い小堀遠州の三方明りの數寄屋があるりますが、是は大阪城内より移したのです、客殿の椽側の杉戸は永徳の筆、表は梅に錦雞、裏は蘆馬、數寄屋の襖は狩野常信の山水、八島合戦の屏風は山樂の筆です、什寶も澤山ありますが、第一は家康筆の額、振の、難波名號、並に大師眞草行の彌陀名號、其他惠心僧都の筆の鈴振の

如來、聖德太子自畫自影の彌陀三尊、隆信筆の元祖往生要集講嘆の御影、勝法坊筆の太原問答等、寶器什物枚舉に違ありません、書院より西の方を見渡せば、須磨の浦、明石瀉、淡路島繪の如く、若海に夕陽を湛へ、春秋二季の時正の日は、今だに日想觀修練の念佛怠慢なく勤行され、參詣の信徒四時に絶間無く、實に大師舊蹟の第一です

清水

難波停車場を距ること十一丁餘

有栖山新清水寺は、天王寺の西にありまして、初は有栖川寺と云ひました、齊宮の女御の難波の稜所は、田蓑島ですが、洪水の時には此有栖川寺で修されたといふことです、本尊は十一面千手觀音、聖德太師の作といふ傳へ、脇士は地藏毘沙門、開基は延海阿闍梨、寛永十七年、京師の音羽山から本尊を爰に移し、享保年中に新清水寺となつたのです、堂の前の舞臺から見渡せば、西南うち開いて、山海の風光畫よりも美しく、本元の音羽山にも劣らぬ眺めでござります、有栖の清水は石階の下にあり、齊貞柳の狂歌が石階の側にあります、ついでに同人の狂歌を一二

耳は遠く死るは近く成にけり夢覺せとや曉の鐘

天王寺にて

酒も強く顔の赤さも公平は四天王寺の花の下陰  
近年は音羽の瀧の摸造品も出来て、夏の日には避暑かた、就中參詣人が澤山あります、境内に八百松といふ料店ありて、頗る繁昌を極めてをります、昔は此寺の北門の向ふに浮瀬といふ料亭がありました、此樓に貝盃の名物がありまして、其銘を浮瀬とまうしますより、やがて樓名に呼んだといふ事です、浮瀬の外にも種々名物の貝盃がありまして、中にも七人狸々といふは、朱塗に七人狸々の詩繪のある常の盃で、六升五合を盛る大盃であつたさうです、ひとつなる人に見せばや津の國の、難波あたりの浮む瀬の月」といふ貞柳の狂歌もありません、又雁嶋の攝津名所に、家の圖、杯の圖を掲げ、金峰の繁昌詩の自註にも、都下醉客品評諸酒樓、先屈指於浮瀬、若福舍、兎角、大津湯、東李庵、西照庵、皆遜一籌」と書いてある位、市中第一の名樓でしたが、維新の變遷の爲め、今は形迹もなくなり、名物の盃の誰の手に落ちましたか、又繁昌詩に其名を揚げた福舍以下の諸酒樓も、西照庵のみは形ばかりをどしめられ

ど、庭園も家屋も昔の趣を失ひ、其他は浮瀬と同様、僅に其名を老人の口に殘してあるばかりです。  
増井清水 同上  
清水の下方の方にあつて、七名泉の其一です。

商業俱樂部 難波停車場より拾丁

今宮村にあり、廿二年の秋、府下の豪商岡崎榮三郎氏が八万餘圓の金を擲ち、獨力を以て四千八百坪餘の田地を買つて創立したので、洋館あり、和屋あり、舞臺あり、小亭あり、山を築き、池を堀り、樹を栽ゑ、瀑を落し、橋をかけ、鳥を放ち、魚を養ひ、料亭あり、茶舗あり、温泉あり、和洋折衷の一大別業、始は園内の長屋にて諸物品を鬻がせ、勸商場の体裁でしたが、今は夫を止めて、只遊園一方となり、二錢の入場費を取て、公衆の遊び場に供へてあります、春秋二季の彼岸、及び月に花に、遊客常に断りません、今は孰も衰微の傾きはございますが、難波の眺望閣、北野の凌雲閣と、此商業俱樂部は、近年新に出來た市内の三大遊園で、中にも規模の壯大なのは俱樂部が第一です、

珊瑚寺 難波停車場より十丁餘

天王寺町にあり、禪宗曹洞派、一桑山とまうして、善隣和尚の開基、本堂に秀吉公の像を安んじてあります、長八寸許、五十七歳の時の影だといふことです、是は旦那桑山修理太夫の寄附したものです。

月江寺 同上

是も同所にあります、浄土宗の女僧寺、光明山林照院と申します、本尊は阿彌陀佛、惠心の作といふことです、寺の門外の隍は、織田家の勇將佐久間信盛の城迹、寺は丘山の上に建られて、風景好し。

隆泉寺及齡蓮寺 難波停車場より七丁餘

兩寺は生玉中下の寺町乃ち生玉の祠の傍にあつて隆泉は古くより絲櫻の名所、齡延は近年櫻を植つけたのですが、煙華三月春風駘蕩の時は兩寺とも観花の客が群集して、折角の淨刹を酒くさくする程の賑ひです。

吉祥寺 同上

萬松山吉祥寺は、生玉の南蛇坂の上にあります、彼の義士の復讐で名高  
い故の赤穂の城主淺野長矩公の旦那寺です、長矩公國許の赤穂より江戸  
へ参勤の途中、大坂に立寄つて當寺へ参詣されましたが、長矩公豫て書を  
能くされ、殊に八法九勢に明なゆゑ、寺の住持、此機を幸ひに山門の額  
の揮毫を請ひました、公は生憎唐紙の有合せがなかつたので、小僧を市  
で買ひに走らせました、公は天性偏急であるゆゑ、筆を握つて机に向ひ、  
其使ひの歸るのを待つておりました、おまわり歸りの遅いのに待たせられ、萬  
松山の三字を机の面に題して遠に立去れました、住持の僧、その書の常  
よりは尙一層の妙を添へたるを歎び、机の脚を脱して字を刻み、藍紙を  
以て之を染めて山門に掲げましたが、筆力奇逸、今尙公の氣象を呈して、  
山門に現存してあります。

舊新梅屋敷

難波停車場より十一丁餘

舊梅屋敷は生玉と高津の間にあります、左まで廣くはありませんが、庭  
園臺榭すべて雅致がありまして、梅樹數百株、樹皆古木、紅あり白あり、  
花も亦種々様々でして、花の頃は觀梅の人多く集ひ、庭内に掛茶屋を設

けて、その需めに應じて茶菓酒肴を呈し、昔は風流を旨としておました  
が、今はや、俗氣を帯びて、三鉢で何錢といふ貼札を出すやうになりま  
した、近頃又、高津の東に新梅屋敷が出来ましたが、土地に高低屈曲が  
あつて、舊梅屋敷の平坦なのよりは面白うござりますが、木も若く、  
花も劣り、随つて見に来る人も下品、掛茶屋の体裁も悪く、頗る殺風景  
です。

桃谷

難波停車場より九丁餘

高津の東天王寺の北、春野十里南北皆桃花、他樹は一本もありません、  
市人桃谷又は桃山と稱してをります、花の盛りは年々上巳の前後です、  
我邦の中で、桃花の美はしく且つ多いのは、恐らく他に類ひはありません、  
い、此景、月瀬の梅、吉野の櫻と并べて、日本花の三景と云つても宜か  
らうと思ひます、桃花は高いところより見るが好いといふ唐人の説があ  
ります、如何にもその通りで、小橋邊から見下した景は又格別です、  
篠崎小竹の桃谷の詩に、達郭桃花十里春、賞花羅綺起紅塵、尋得林深人  
少處、閑眠欲擬避秦民と述べてござりますが、肝腎花の候は、貴賤老

若群集雜沓、所謂紫陌紅塵撲而來、無人不謂見花回の景況で、剩へ酒樽を擔げて往來を八人歩きする下等人物も、澤山出かけるだけが、可惜桃花の科でござります。

眞田山 難波停車場より十二丁餘

玉造の南にあつて、世に眞田山といひますが、同所に稻荷の社がござりまして、月の出丸を築いた迹だといひますが、同じ元和の役に、加賀宰相の其社の説には、此所を宰相山とまうして、同じ元和の役に、織山といふのが陣屋があつたゆゑ、此名が残つてゐるといふことですが、織山といふのが舊名です、織山神社の本殿は仁徳天皇でござりまして、稻荷はその側に祭つてあるのですが、庇を貸して本宅の喩、今は稻荷の方が名高うござります、此側は十年の戦役に討死した大坂鎮臺兵の墓碑がござります、此邊は一堆の丘山で、東南はるかに見晴し、比叡の山ついき志貴生駒二上金剛の山々一眸の中に在て、風景極めて好しく、吞春樓といふ料亭が有ります。

圓珠庵 僧契沖遺跡 難波停車場より十一丁餘

東高津餅差町に有ります、則ち國學中興の大學者、契沖阿闍梨終焉の地でござります、阿闍梨が國學に大功のある事は、普く世の知る處、その傳記は、水戸の儒官安藤爲明の撰んだ行狀に詳に書てござります、案内者も先年契沖阿闍梨の名を以て、阿闍梨の傳をしたため、東京の博文館から出版いたしました、又大町桂月君も、國學大綱の第一編として、同氏の詳傳をものさしましたから、爰に省いて申上げませんが、只學識の廣大なばかりか、水戸の義公の囑に應じて、萬葉代匠記を著述し、其謝儀の白銀千兩と絹三十疋を、寺院の修造の費に充て、且は貧民を贖はして一も身に着けず、又義公の懇ろの招きを堅く辭して應じなかつたことのみ二事、潔白の徳、高尚の操、實に世に得がたい大徳であります、古を好み學に志あるものは、是非一回舊迹を尋ねて、墓を拜し遺物を觀なければなりません、庵は阿闍梨に舊縁ある、和泉の久井郷伏屋長左衛門が寄附したもので、舊の狀をそのまゝ存してをります、阿闍梨が讀書などされた放れ屋は、近年大破せしゆゑ、もとの材に新らしい木を足して修繕しましたから、昔の面影が僅に残つてゐるだけで、此庵は阿闍梨臨終の時、弟尙春毎に匂ひまして、當時を追想させます、此庵は阿闍梨臨終の時、弟



子の智耀に附屬し、其後數代ついで今に至つたのです、庵中に傳來してある阿闍梨自筆の遺物の中、官より鑑査状の下つてあるものが數十點あり、其の他に阿闍梨の遺言一軸、懇篤詳密正直潔白にして、尤も阿闍梨の高風を伺ふに足るもの、鎮鉢一口、硯並硯箱磨餘墨、是等は極めて質素であつて、阿闍梨の謙徳を見るに足るもの、其他阿闍梨自畫久井閑居圖一軸。同肖像、高野の義剛の贊があつて、筆者は詳なりませんが、容貌風采、宛然活るが如く、拜まれます、此餘鑑査状にもれた書籍が澤山あり、當庵は阿闍梨退隱の地であり、漸く維持してある体裁、國に講中と唱ふる少數の信徒の補助に依つて、有志の人々を愛へて、何と學に大功ある阿闍梨の遺蹟の、ゆく／＼頽廢に屬さん事を憂へて、何と加して永遠維持の方法を建たいもの、有志の人々、昨今苦慮奔走の折柄で、案内者の文海も其内の一人ですが、世の國學歌道に志あるの人々、否、左なくとも、阿闍梨の如きは國學、歌學、梵學を兼て、日本の大學者、其國を益し人を利するの深き、弘法、親鸞、日蓮の諸大徳にも譲らねば、苟も日本國民たる者は奮つて淨財を喜捨し、其遺蹟を保存して可しうござりませう、既に宮内省よりも、阿闍梨の學徳を追賞ありて、去

る廿一年十二月、金百圓と從四位を贈られました、聞く所に依りますれば、歐米各國では其國の大學者の遺蹟は、其國民が保存するといふことです、是は其うなくては、叶はぬ事と思ひます、西京の石川丈山翁の詩仙堂、大坂の阿闍梨の圓珠庵と、兩都の二大遺蹟として長く世に保存させたいもの、來る三十三年は阿闍梨の二百年忌の正當です、夫迄に維持の方法も立て、且つ莊嚴な祭典を擧げたいものです。

家隆卿墳及伊達自得翁墳

難波停車場より十丁餘

天王寺勝鬘院の背後にあつて、地名を夕陽丘と呼び、乃ち壬生二位家隆卿晩年幽棲の地、且は遺骸を埋めた所で、墳上に古松一株聳え、其名を舊棲松と呼んで、常に卿の歳寒の心を表はし、人をして勿剪の徳を懐かしめてをります、惜哉五七年前の大風に折れて、今は形ばかり幹を殘してをります、其側に夕陽庵といふ庵があつて、是も卿の舊迹だといふ事です、卿が此地に在て病ひ限りになられた時詠れた、七首の和歌の中、左にその二首を抜いてお目にかけます、卿が晩年深く佛法に歸依し、厚く日想觀を修した信仰の程が見えます

難波の海雲井になして眺れば遠くも見えず彌陀の御國は契りあれば難波の里にやどり来て浪の入口をおがみつるかな此詠より此地の名を夕陽丘といひならはしたといふことです、卿の履歴は、享保年中に安井門跡大僧正道恕公の撰まれた卿の碑文に詳らかです、此には省きます、碑は卿の墳の上に建てあります、其側に伊達から、千廣翁の墳がござりますが、翁は舊和歌山藩の世臣、過日逝去された陸奥伯の尊大人です、和漢の學に通じられました、中にも國典に明らか、和歌を巧みに詠れ、和文を能く書れ、國勢三遷考、其他種々の著述があり、前年廣く門生故舊に頒れました、翁壯年の頃は、甚く佛教を嫌ひて、吟史の歌に

茅澤の海に流寄たる樟や八十禍津日の御船なりけん  
物部大連を  
君ひとり玉と碎て瓦ぶき世に普く予輝きにける  
などの口號もありました、事に因て田邊に幽閉されし折、徒然の餘りに、或寺院の佛書を借て讀まれてから、不圖感ずる所があつたが、罪免

されて後は、妙心寺の越溪和尚に參禪などして、尤も心を向上の一路に注ぎ、壬生の二品が、壯年は後世の勤めに疎かりしが、老後に及んで彌陀の誓ひを信じ、厚く日想觀を修して、此岡に往生の素懷を遂られた迹に能く似てゐると、かねてより二品の墳の傍に墓所を奠めおきて空蟬の売は何處に朽ぬとも我魂やどるかた岡予これと詠れたとか、而てみれば翁が此所に千歳の石室を設けられたは、全く彼卿を慕ふのあまりに基かれたもので、音風景を愛されたばかりではありませぬ、翁が詠歌の中、四季、戀、雜一首づゝを撰撰て左に掲ぐ、是は調のめでたく思はるゝと、志操の見ゆるを旨として取たのです。

立春  
華原の中つ國原うちかすみみどり角くむ春は來にけり  
曉更照射  
鴉飼人ねなじ恨にながむらん峰のともしのしのゝめの空  
暮秋山  
思ひかね秋のゆくへをながむれば眞木立山もしくれふるなり  
木枯

聞わびし軒端の萩はをれふしてたるひにひく木枯の聲  
忍戀

しのぶ山我かよひ路の隈ごとこころの鬼はなどこもらん  
幽居五十首の内一

はてもなくかぎりも知らぬ大空を、こころとなして月を見るかな

陸奥伯の墳 同

維新の功臣、明治の才人、外務大臣として、對等條約を執行し、且征清の事に與つて力ありし、陸奥宗光伯も、其父伊達自得翁の墓側に、其遺骨を埋められましたから、又當岡に一名迹を添へました。

廣田神社 難波停車場を距ること五丁餘  
天下茶屋停車場を距ること同上

今宮村に在ります、難波村より住吉へ行く街道で、廣田の森と申します、祭神は天照大神の荒魂で、例祭は三月廿三日、昔は此社も天玉寺の鎮守といふことですが、年頭の御禮に大内へ鮮鯛を調貢する例などありまして、なか／＼由緒ある神社です。

今宮 同上

是も同所の廣田の社の地ついで、其邊を今宮の森と云ひます、祭神は中央天照大神、左姪子尊、大己貴尊、右素盞烏命、月讀尊の以上五座でござりますが、今宮と云へば姪子、乃ち戎で名高うござります、祭會は毎年一月十日、都人之を十日戎と稱へます、十日を本式、十一日を殘福と申して、福を受る爲に參詣の人が群集して、實に言語に盡せぬ程の繁昌です、當日と翌日の二日は、戎橋より以南廣田の森まで、人力車の通行を止め、數百の巡查が道路を護衛して、參詣人の安泰を謀るといふ状況、今は世が開けて昔程華美な散財をする者は少なくなりましたが、尙その名残を留めて、南地五花街から、今宮までの兩側、竹枝を賣る者、小し、南海線の第一の踏功の邊から、烏帽子を沾る者、布袋の泥像を賣る者、賣る種々のものを賣りまして、肆と店と相寄り相對し、賣る者の聲、買ふ人の噪ぎ、天地も鼓動し、山海も翻覆るばかり、西京の稻荷山の初午祭、東京の慈大明神の酉の市と併べて、三都の大繁昌の祭りでござり

ませう、「春なれや、背中叩いて、歸る神」といふ或る俳人の句がありま  
すが、いつの頃よりか、此神は豊たと云ひならはして、参詣の人、社殿  
の後ろに廻つて、手にく、羽目板を叩いて大聲に諸願成就を祈ります、  
是も亦一奇觀です、篠崎小竹翁が擔竹枝人歌竹枝と作られ奥野小山翁が  
擲我真金買假金と作られしは實に十日えびすの景況見るが如くです。

木津大黒天

難波停車場を距ること八丁餘  
天下茶屋停車場を距ること五丁餘

木津村の東にあり、毎月の子の日には、福を祈る参詣人山をなして、  
非常な繁昌です。

難波木津市場

川を狭んで毎朝魚類と青物の市が立て賑かです。

瑞龍禪寺

難波停車場を距ること四丁餘

慈雲山瑞龍寺は難波村の北の端にあり、臨濟禪の黄檗派、佛殿には  
藥師佛と十二神將を安じ、天王殿には中央に彌勒佛、右左に四天王を安

じ、禪堂、禪堂、鎮守、禪堂などありて、黄檗派にては當市第一の大  
刹、佛殿、天王殿、山門を始め、諸堂の額及び聯に、隱元、木庵、高泉等、  
利派の高僧の手跡多く、頗る見るに足るものです、開山は世に名高い鐵  
眼禪師、禪師は肥前國の益城郡に生れ、本願寺末の僧で、既に妻も蓄け  
ておましたが、其宗徒の弊習として、如何なる不徳無才の者も、寺格に  
依て上位に居るを快からず思ひ、奮つて黄檗山に上り、隱元禪師に従つて  
道を問ふ、其妻なる婦人迹を逐ふて尋ね上りたれど、師の容易く對面せ  
ざるを慮り、黄檗の門前に旅を宿り、師の外田を窺つておましたが、一  
日師の托鉢に出るを途に要し、強て歸りを促したれば、師も止事を得ず  
伴ふて國へ歸り、其郷里まで足を入れました、ふた、び脱けて黄檗に  
至り、遂に木庵の法を嗣いで延寶の四年に當山を建立され、一切經の藏  
版を思立つて勸化し、其料金の漸く聚れる頃、天下大饑饉となつたので、  
師は人民の疾苦を恤み件の金を殘らず施し、その後勸進して又金を得た  
りし折柄、又も五穀不熟にて、途に餓死する者多ければ、師之を他に  
るに忍びず、今回も其金を施行につくしたれど、徳の至れるのか、第  
三回の勸進にて首尾好く藏經の印刻を成就し、之を黄檗の本山に納め、

今尙黄葉にその板木現存してゐます、師の曰く、貧道生涯に三度藏經を  
印刷したるが、其中に二度は活ける藏經を印刷して、功德就も廣大なり  
と、以て其志の濟世に厚かつたのが能く判ります、師佛學に深く、能辯  
にて能く法を説く、廣く道俗を化度して、普く世上の歸依を受たといふ  
こと、詳しい事は行實に誌してありますから、爰に喋々の辯をつひやし  
ません。

難波午頭天皇 難波停車場より六丁餘

難波村にあつて此地の氏神と仰がれ、例祭は七月十日、西區南區へかけ  
て氏地も澤山あつて、中々の賑ひです、一月の十四日には氏子が集つて  
左右に分れ、大綱を争ひ引て、其勝た方は其年福を得ると云つて、力籠  
べをしますが、是も随分の繁昌です。

大阪湊町停車場 難波停車場より五丁餘

當鐵道は本線は港町に起點して、和州の奈良に止まる、支線は王子驛よ  
り高田驛櫻井驛まで達してをります。

玉造 難波停車場より十三丁餘

大阪城の南の方にあたります、昔四天王寺を初めて此處に建立した時、  
伽藍の瓦を此地で造り始めたゆゑ、此名を唱へ始めたといふ事ですが、  
舊事記に玉屋命始て玉を此地に作るといふ事がありすから、此方が正  
しい地名の起りでせう、玉造川、玉造江といふ名が古歌に見えますが、  
今詳かなりません。

豊津稻荷社 同上

玉造の稻荷町にあります、夏祭は七月三十日、秋祭は十月十五日、共に  
相應の賑ひです、又例年二月初午は格別の群集、祭神は蒼稻魂神。

森の宮 難波停車場より十五丁

玉造の森の宮にあります、委しくは鶺鴒の森でございませう、日本紀に推  
古天皇の六年四月、鵜二喉を難波の森に養はしむとあるは、即ち此地で  
せう、明應の頃此地に本願寺の御堂があつて、信長と和睦の後紀州の難

賀に退去しましたが、やはり舊名を呼で鵠の森御堂と稱してあります、祭神は用明天皇、即ち聖德太子の御父帝です、崇神天皇二年の秋七月聖德太子此地に創めて四天王寺を興立し二十五年を経て今の荒陵山へ移されました、夫故此邊の舊蹟に、金堂講堂駒ヶ池大池の淵などいふ字の地が今に存つてゐます、例祭は六月八日七月晦日十月十六日等です。

### 綱島 難波停車場より廿丁餘

此所は金城の京橋を右に折て北へ行たところ、漢江に枕してゐますから日夕京通ひの群船を望み、且つは造幣局の構造を前に扣けて、誠に幽静閑雅の土地で、市上の塵気がござりませんので、昔から豪富の別荘がありましたが、今は藤田傳三郎氏も此所に居を占め、善美をつくした邸宅が数々ござります、料亭鮎宇樓は舊くより此地の名物、近來は一層の繁昌を添へました。

### 大長寺 難波停車場より二十丁餘

綱島にあります、宗旨は淨土、本尊は惠心作の阿彌陀、寺内に近松の淨

瑠璃で名高い、紙屋治兵衛と小春の墓があります、この寺内で情死したといふ傳へです、又鯉塚といふがあつて、元和戦死の士某が鯉に生れ變つて、當寺の住僧の夢に現れ、寺内に葬られたといふ傳へがありますが、開明の今日は、三歳の小兒も如此な無稽の説を信ずるものはござりますまい。

### 櫻 祠 難波停車場より廿五丁餘

綱島の北の中野村にありまして、祭神は天照大神、例祭は十月廿一日、此社内及び淀川の兩岸に櫻の花が多く、東京の向島と美を争ふ地でありまして、此祠の名も夫が爲に喚れたのです、去る十八年の洪水に、東岸の櫻は大半枯れ、又西岸の櫻は造幣局設立の爲に伐られて、舊観を失ひ、今は櫻の祠は名のみに成りましたが、東の野邊は一面に菜花を以て充され、見る目限りの黄金世界、復是一種の奇觀、春の彌生の空になり集すと、観花の人は舊慣に依り不相變船に車に陸續として此地に來り、群集雑沓、堤畔の酒樓、江上の妓船、實に雙眼を眩し、兩耳を聳んと欲すと、繁昌詩に述べた通りの景况、碧傘紅裙芳草渡、三絃雙鼓夕陽舟の田

中華城の聯句、能くその趣をつくしてあります。

源八渡口 同上

西成郡天満源八町より東生郡中野村への舟渡なり。

水道の水源地 同上

は都島にあり、此の水道の敷設は、多年の刻苦經營を以て、去る明治廿八年に落成し、同年十一月十三日を以て通水式を挙げたのですが、爾來日に月に給水申込者が増加し、現今（八月末日調査）給水の現在者は、市部で専用、及び共用、放任給水、計量給水の四種の戸數人口水栓水量は左の如くです

戸數	七萬四千四百六拾四戸
人口	參拾萬千四百六拾七人
水栓數	貳萬六千九百拾六個
水量	百貳拾三萬九千貳百六十六石五斗七升

而して本年度の給水料豫算金拾壹萬四千六百拾九圓九拾壹錢貳厘といふ

事です、此水道が出来て市民の便利は云ふばかりでなく、從來大阪は流行病の本場とまで言われたところですが、爾來は大いに流行病者の數を減じました、多くは水道と下水工事の落成の餘澤でございませうけれども、各自身衛生に注意をするのも一つの原因ではありませうけれども。

福島天神祠 難波停車場より半道餘

上中下三所の福島にありまして、孰も菅神を祭つてあるので、例祭は毎年七月廿五日、天満祭と同日です、菅神筑紫左遷の時、此島に船が、りしたまふ縁故に依て、勸請したのでといふ傳へです。

逆櫓松 同上

上福島橋爪町杉本氏の別荘にありますが、彼の元暦の昔、義經と景時と逆櫓の論をした舊迹だといふことですが、如何さま幹の形驚蛇に似て、千載の名松と見られます。

野田の藤 同

野田村の林中に春日の祠があつて、其祠の林の中に藤の花があつて、其名世に高く、小歌節にも吉野の櫻野田の藤と謡はれるくらゐ、今尙花の盛りには、遠近の貴賤こゝに集つて幽艶を賞します、貞治三年の四月、足利將軍義詮公住吉參詣のついで、此地に立寄つて藤の花を詠め、傍の池を玉川に准へて、左の和歌を詠じられた事は、住吉詣の記に載せてあります

古のゆかりを今も紫のふじなみかゝる野田の玉川  
又天文年中兵燹に罹つて、只古迹のみと成たのを、文禄年中秀吉公こゝに來り、藤の花の僅に残つたのを見て、其時の休息所を藤の庵と號け、傍衆の曾呂利新左衛門に額を書せたといふ傳へがあります、其後國學中興の偉人、下河邊長流其庵の記を書き、左の和歌を詠みました  
みつ 蘆の 時うつりにし 難波津に有し名残の 藤波の花。

竹林寺 同上

九條にあつて名高い寺です、宗旨は淨土、山號は忍心、又の名を寶樹院とまうします、本尊の阿彌陀は惠心僧都の作、開基は教譽上人、本願は寛永年中香西哲雲、境内に三股竹、香の梅などの名物があります。

茨住吉神社 同上

是も同所にあります、此社も香西哲雲が九條島開發の寛永元年の勸請、當村安治川町の生産神で、例祭は七月廿九日、祭神は住吉神社と団体。

源光寺 難波停車場より廿五丁餘

南濱村にあります、宗旨は淨土、山號は清淨瑠璃山、寺の名は三昧院源光寺本尊の天筆阿彌陀は殊に名高いもの、當寺は當國屈指の古刹、聖武帝の天平勝寶年中、大僧正行基三昧火炕を始めた古蹟、其側に精舎を建て、土木石の三佛を造て安置し、其後大原の良忍上人中興して、融通念佛宗一派の本寺としたのです、

長柄川 難波停車場より三十丁以上

又の名を中津川とも云つて淀川第二の支流、長柄川より西に流れ、傳法に至る海に這入ります、仁徳天皇の時に開鑿されたといふ古い川です、



千載集にも  
蘆のやの假初ぶしは津の國の長柄一行と忘れざりけり  
といふ爲貞朝臣の歌がのせてあります。

### 長柄橋跡

此橋は名高うござりますが、古から其蹟が定かでござりません、何の世に架初めて何の世に朽たか、夫さへ分明でござりません、橋杭と稱する朽木が所々にあつて、今でも田畑から堀出す事があります、昔は大物の浦から東北は江口の里、南は福島浦江曾根崎より、北は神崎川まで、一面の大江であつて、大江の名も夫から起り、難波江、難波入江、難波江の浦、三津の江、御津の浦など、和歌にも詠れ、其江に多くの島嶼があつて、その嶋嶼、即ち孝徳帝の皇居の豊崎の宮へ通ふ路に、架渡した橋の名で有ふといふ古人の説があり、後世に及んで神崎、長柄、天満の川々の水路溶々として、江海變じて田園となり、田園又村りとなつたのです、此橋を詠んだ古歌が澤山あり、今一二を左に掲げます  
古今難波なる長柄の橋も造るなり今は我身を何に譬へん 伊勢

拾遺 蘆間より見ゆる長柄の橋柱昔の跡のしるべなりけり 清忠  
玉葉 さもあらばあれ名のみ長柄の橋柱朽ずば今の人もしのばし 定家

### 名柄川渡口

難波停車場より三十丁以上

此長柄にあり、又横關渡は南方村にあり、本庄の渡しは本庄村にあり、十三の渡は成小路村にあり、

陽炎にむらなし何所が橋處

來山 秋里

すしさを見よと長柄に朽もなし

### 鶯塚

同上

長柄村の田圃の中にあつて、塚の上の古い梅の木があつて花莢が六形です、土人の云ふには、昔此地に一個の富家が有て長柄長者といふ、其愛する所の鶯の死んだのを哀んで、爲に此墳を立たたので、毎年正月元日の朝、此墳に鶯が来て鳴初むるゆゑ、鶯塚といふと、その他此塚について種々説があります、後人の附會の説で、上古の貴人の荒墳でせう。

### 鶴満寺

同上

南長柄にあつて、天臺の律宗で、雲松山慈祥院といひます、本尊は慈覺大師の作の阿彌陀、開基は久遠で詳なりませんが、中興は忍鏡上人、延享年中の再建で、寺内に秩父坂東西國等の巡禮の札所の、百体の觀音の像を安じてあります、國々の觀音堂の土を聚めて布地に交せて、其上に堂を建たといふ事です、此寺の梵鐘は長門の國主毛利侯よりの寄附で、唐士の器物、西晋の二世惠帝太平十年の銘がござります、太平十年は我朝の永康元年、乃ち應神天皇の三十二年に當りますから、凡そ千五百年前の古物です、又境内に櫻が多くありまして、黄だの藍だの珍しい花もありましたが、十八年の洪水に傷んで、惜哉少し舊觀を失ひました。

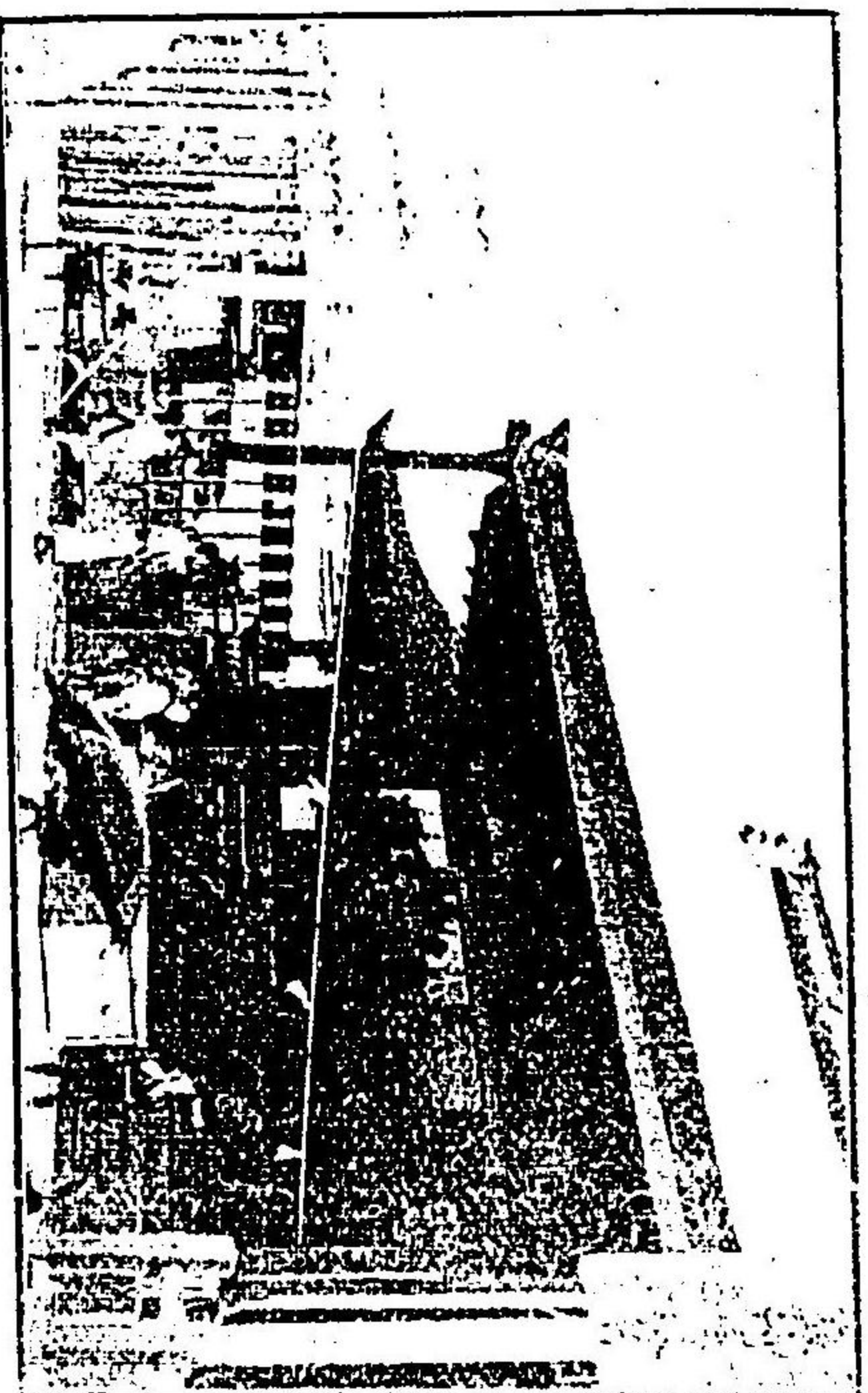
崇禪寺 難波停車場より一里

北中島にありまして禪の曹洞宗です、此寺は遠城兄弟の復讐談で名高うございますが、其復讐の顛末は古く人口に膾炙してゐますから、今喋々其の辨を用ひません、寺に兄弟の遺物、刀、脇指、長刀、鎗、鎖帷子、手裏劍などが保存してあります、又兄弟の墓もござります。

天満神社 難波停車場より二十八丁餘

自在天神、乃ち昔原道真朝臣でござります、朝臣が皇室の大忠臣であつて、然も大學者である事は、詳しく世の知るどころです、今更喋々の辯は用ひ

大阪 難波 停車場 神ノ社 丁八十二



Temma Jinja (Shinto shrine), Osaka. Two miles from Namba Station.

北區天満の大工町にあり、始めは當所の北の方、明星池の邊にあつたので、舊地を露か秋里とまうし、社格は府社、創建は天曆年中、祭神は天満大

ません、社説に因りますと、昔は天満山とて廣い叢林であつて、天曆の頃その叢林に靈光があつて、諸人之を奇異んでをりますと、即て里人に神託があつて、難波の梅を慕ふてこゝに影向したといふ告があつたので之を奏問して昔神を祭つたといふ事です、此邊を天満といふのは、云ふまでもなく此社があるからです、社頭の未社は地主の神、大將軍の祠、靈符神、蛭子祠は昔神眞筆の像を安じてあります、其他紅梅殿、老松祠、白太夫、神明、八幡、稻荷、住吉、松尾等の神社があります、西手に庭園を設けて一層の美觀を添へました、社内に劇場、寄席、物席、料亭、茶店など數軒あつて、日夜參詣の人が群集しますが、毎月廿五日は格別の賑ひ、一月の廿五日は初天神とて、北新地の遊廓より寶惠駕籠に乗りて多くの藝妓が賽をし、滿市の人腕車に徒歩に陸續として參詣して、南地の十日蛭子に劣らぬ繁昌、三月廿五日は右府の正忌辰、菜花の儀があります、大祭は七月廿五日、之を銚流しの神事と申して、其夜神輿の渡御の式があります、午後の四時頃から難波橋より神輿を船に乗せて、松島の旅所まで渡御になります、供奉の小船幾千艘、さしも淀川も爲に填まつて、徒涉りが出来るばかり、俗人は樂を奏し、其聲

瀏亮として水底の魚を舞はし、神宮は禮を奉じ、其式嚴肅にして岸頭の人を感ぜしめ、數千の炬火渡御の途を照して、神慮を慰め奉るを例とするを以て、所々に大箱を焚立て、一炬の用材數万斤、薪は累々として積んで山の如く、一回之に火を加ゆれば、光焰万丈天を衝き水を燒き、赤壁の火攻を目前に見る心地、蓋し天下の一大奇觀、近縣の人は云ふに及ばず、遠方の人までも千里を遠しとせずして拜觀に来るものがあります、御輿の松島に達するは、既に夜半を過ぎますが、旅所に在らること數刻で、即て夜を冒して歸社されるのが例です、京の祇園會と大阪の天満祭は、聞たよりは見たが百倍といふ諺があるくらいです、秋祭は十月廿五日で、是もなか／＼の賑ひです。

天満菜蔬市 同

市場は天神橋北詰の上手より龍田町まで濱側通り三町許りの間、問屋中買百餘軒、日々朝毎に多くの人が集つて菜蔬を買ふところ、抑も春のあした春日野の若菜より賣初め、蔦菜、磯菜、嫁菜、杉菜、芥子の若菜、蒔の姑、根白草、早蕨、天花菜、獨活芽、濱防風、枸杞、五加木、

三葉、芹、菰、蔞、草、人參は木津難波の名産、天王寺無、棕橋菜菔、海老、江冬瓜、勝間の海藻、住吉の神馬草、姫松の菱草、濱村の瓠蓄、伏見孟、宗、笋、壬生菜、白慈姑、白芋は京より下る、宇陀の薯蕷、河内の蓮根、昆陽の池の萐、葺市、栗市は九月の重陽前、又十月の初旬より二月下旬へかけては、紀州より積來る蜜柑の入市、一年中日々店々所狭きまで飾りたて、往來もむづかしい程市人が立塞がり、賣る人あり、買ふ人ありその賑ひ言語同斷、清少納言の枕草子に市は辰の市、棒市、ねふさの市、しかまの市、あすかの市までは數へて、此市を書もらしたのち千古の大遺憾です。

桂木山大融寺 同上

北野にあり、宗旨は古義真言、開基は弘法大師、大師弘仁年中此地に來り、叢林の中より異香を放てる靈樹を伐て自から地藏沙門の二軀を刻み、佛院を草創しました、其頃嵯峨天皇之を敬感あつて、大悲の尊容を寄附になりましたが、是が本尊と脇士だといふ傳へです、同帝の皇子源融公、當地に來遊のついで、仁海上人に遺命して、大伽藍を建營さ

れ、彼の靈樹の生じたる地ゆゑ、山號を桂木山とつけ、融公の諱に依つて大融寺と稱したといふ事です、其後星移り物換つて逆亂の爲に諸堂荒廢に屬し、大門の迹は是より西北三町の所に字のみを殘し、其外の寶塔樓閣の蹟も、皆田圃の字に残り、浴室の迹は今風呂小路と云つて、やはり耕作地に成てゐます、後世快濟上人が今の姿に再興し、堂前の藤波麗はしく開きみだれて、參詣人の眺めになり、昨今は不動、愛染、辨天、庚申など、種々の流行佛をとりこみ、例月の巳の日と、隔月の庚申は格別賑ひです、當寺の寶物の中に「當寺は河原の左大臣融公の草創、一々不二の靈場なり、心願有るに依て、攝州倉橋の庄一分を寄附す」云々としたゝめた、尊氏將軍の寄附狀があります。

八軒家 難波停車場より二十丁

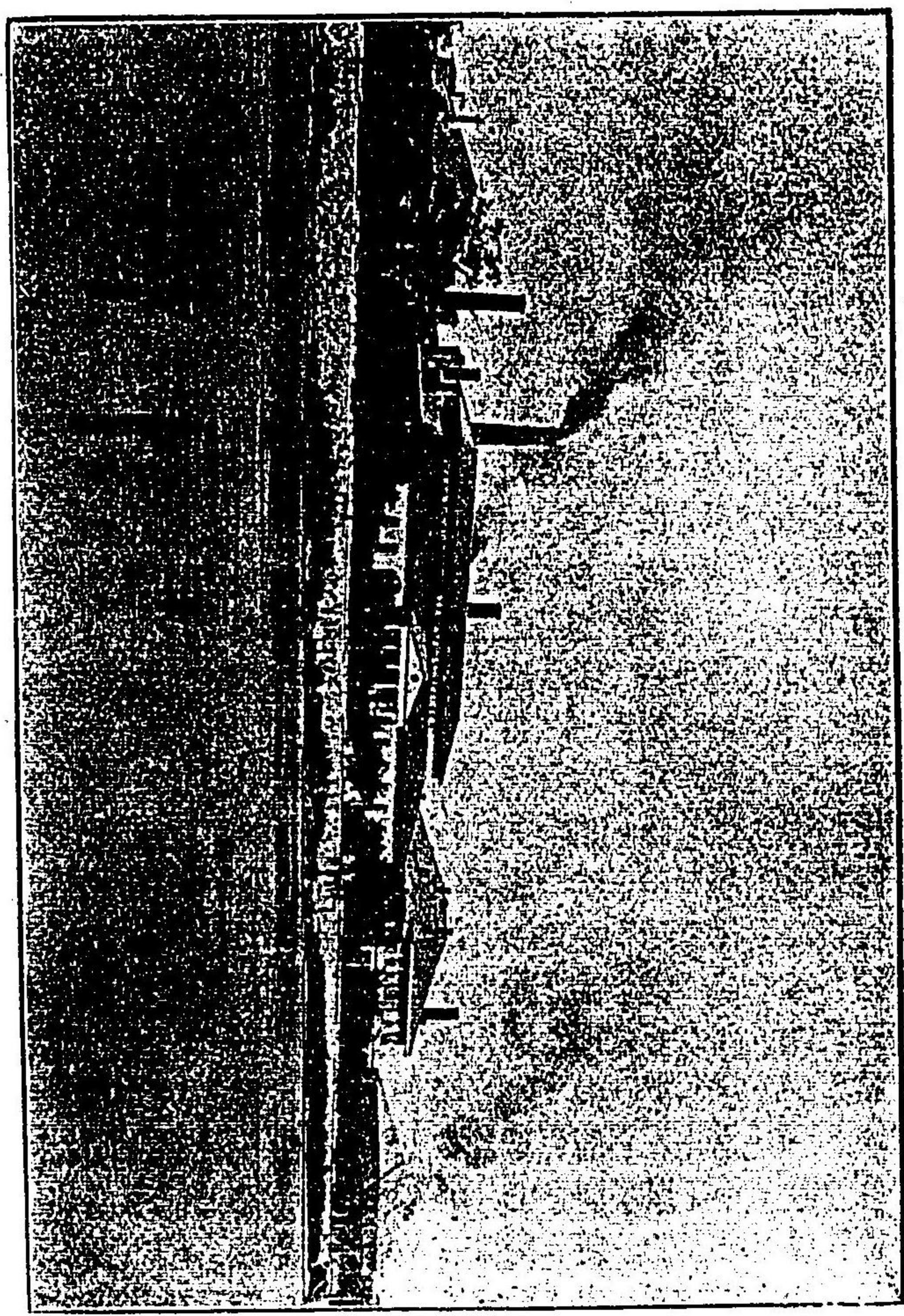
天神橋の南、昔は此邊を大江の岸と云つて、南は一堆の丘山、西北は大江であつたので又八軒家の名はその以前旅舎が八軒あつて、京都へ上下の旅客を泊め、三十石船の周旋をしたのですが、今は三十石船を廢して漁船を用ひ、淀川漁船株式會社が其代りをしてゐます、漁車といふ

便利なものもあるにも係らず、漁船の外に和船の出入も日夜數十艘ありまして、旅客の群集おびたしく、宿屋の敷も數十軒をならべて非常な繁昌を極めてをります、漁船會社の所有漁船は十一艘、賃金は上等貳拾錢、下等拾五錢、京阪の往復は日夜數回、時間は凡そ登り六時間下り三時間半。

造幣局 同上

川崎にあり、東櫻宮に對し、南網島に向ひ、石壘高く淀川の清流に臨み、南北二拾餘町、石を砌し鐵柵を繞らし、中に洋風の大廈軒を列ね、數個の煙筒天を衝き、黒煙盛んに噴き、金銀貨幣の製造、日々にその幾百萬なるを知らず、樓閣館舎、總て巨麗奇巧を極め、中にも泉布觀は宮廷の御用邸で、裝飾も頗る善美をつくしてあります、又庭園の結構も面白く、古くより裁てあつた幾百株の櫻樹に、新しいのをも裁添へましたので、種々様々の奇しい花が咲き亂れ、陽春三月のころは、春色實に市内第一、その花盛りの最中を撰んで、三日間衆庶の縦覽を許されますが、群集雜沓、黄金界に極樂國を併せた繁昌です。

大阪造幣局 大坂造幣局 大坂造幣局



Imperial Mint, Osaka. About two miles from Namba Station.

六十四

造幣局 同上

當所は、狂歌師九鯉が「指頭で百万斛を動かすは鯛

此處に寫しましたは造幣局の風景です

牛の角の争いと見んと詠じた通り、日本國內の米穀の糶糶をして、相場を立、須叟の間に津々浦々へ知らせるので、此市の始りは、夫の城州八幡の人三郎右衛門(乃ち淀屋の祖先巨菴)淀川に四拾八町の長堤を築いたのを始め、豊臣徳川兩家へ功勞をいたした報酬に、淀屋橋の爪に米廩を設けて、關西諸大名の領地より米穀を上させ現米の取引をしたのが始め、三代の辰五郎驕奢の件を以て家産を没收された後、今の堂島の地に轉じ、正月四日の初相場のみは、舊例に依りて淀屋橋の南詰で營んでおきました、以前は往來で立合をしましたが、通行の妨げになるからとて今やうに市場を設け、又米穀取引所と成て、一定の規則の下で營業をするやうに成たのは、明治廿六年からです、本州上半季の取引所の決算報告に依りまするに五拾圓一株につき一割六分の配當です、以てその商況の一般を卜するに足りません。

商陳品列所 同上

堂島濱貳丁目にあり、今の大阪市參事會員西村捨三君が、曾て當府に知事たるの時、貿易事業を發起せしめる爲、公共的に創立する目的で、勸業費の餘有を以て、去る廿三年十一月、初めて北區堂島濱通二町目に

設立し、其月の十五日を以て開所したので、それから廿四年の四月より經費を地方税に移され、年々經費一万三千圓の地方税を仰いで、り、庭園の空地は廿七年の春、府下の實業家三拾八名が發起に成て、參千圓を寄附し、府廳より一萬圓を補助して、賣品室四棟を建築し、該四棟は目下二棟を内國製産品參考室に供へ、二棟を賣品室に供へてあり、また、遠からず賣品室を廢して參考室にする目的だといふ事です、縦覧は毎日午前八時から午後五時まで、但し日の長短に由りて時間伸縮する事に成て、満五歳以下は無料、陳列品の區別は、外國品、内國品、圖書、工業試験部、外國品は専ら輸出品の参考となるべきもの、殊に現在外國生産物で、我國輸出に競争を持ち、若くは將來に競争を來さうとする傾向あるもの、及び外國市場に於て他國の輸入供給に係るもの、我國へ輸入を要する物品類の製造原料、半製品、精製品、及び專ら外國より我國へ輸入を要する物品類の製造原料、半製品、及商工業品等を陳列してあり、内國品は主に本府及び各府縣、下産出の製造原料、半製品、及商工業品等を陳列してあり、圖書、本邦發刊の報告書、及商工業

緊要の新聞雑誌、圖書の類を蓄へて、縦覧人の閲覧に供へ、工業部試験部は廣く工業上の諮問に應じて、豫て化學的商品の分析及び鑛物の分析試験を爲し、以て府下工業の改進を助長する目的、現今の所で、商工業上に就て質問に来るもの、日々間斷なく、又縦覧人は一日平均百九十人以上二百人、其盛況を知に足ります。

郵便電信局 同上

本局は大坂郵便電信局といふ名稱で、北區中の島二丁目にあります、洋館で頗る立派、郵便電信、同じく爲替、郵便貯金、小包郵便等を取扱ひます、支局は西區の江の子島に川口郵便電信支局、東區高麗橋詰町に高麗橋郵便電信支局の二ヶ所ありまして、本局と同様の事を取扱ひます、又南區南久寶寺町二丁目船場郵便支局、南區の二ツ井戸に高津郵便支局の郵便支局がありまして、電信を除き、其他は本局同様の事を取扱ひます、又南區末吉橋通三丁目心齋橋電信支局、西區南堀江四丁目堀江電信支局、梅田停車場構内に梅田電信支局の三電信支局がありまして、是は電信のみを取扱ひます、其他市内の四區に七拾ヶ所の郵便受取所が

蛸の松

難波停車場より廿丁餘

あつて、各自、小包郵便、郵便爲替、郵便貯金、書留郵便等を取扱ひます。北區中之島の田裝玉江兩橋の間にありまして、大坂名松の一つです、枝葉が垂て蛸に似てゐるより、此名が起つたのです。

梅田停車場

難波停車場より廿五丁

停車場は其名の如く、北區の梅田にあります、其域内頗る廣大でして、處々に數株の樹木を栽え、自から庭園の趣を成してをります、家は總て煉瓦石を以て構造してありまして、樓上は官局、樓下は待合室に備へ、前は東西の二路を通じてあります、西は緑橋に向ひ、東は堂島櫻橋を経て大江橋を渡り、淀屋橋に至るのです、其結構は東京の新橋停車場に一步を譲るやうですが、併しなかく規模壯大です、其線路は、西は神戸を過て山陽線に連絡し、東は京都を経て東京に達し、鐵道延長三百里、又大阪鐵道の城東線此處に連絡して、市の東南を迂迴し天王寺を経て奈良に達し、又阪鶴鐵道も神崎停車場に連絡して、既に池田に達すといふ

状況ですから、上り下りの乗客、日に數万を超へ、其繁昌雜沓實に筆舌の及ぶどころでありませぬ。

梅田電信局 同上

同局は梅田停車場の構内にあつて、公衆の電信の取扱ひをしてをります。

西成鐵道 同上

同鐵道の線路は、梅田官設鐵道に沿ふて、此所を起點とし、西の方櫻島の方へ向けて延長する計畫で、目今工事最中です。

郵船通運二會社支店 同上

郵船會社の支店は、梅田停車場の西に當つて店を開き、數棟の倉庫を建築し、同社の漁船に依て運ばる、貨物を取扱ひ、通運會社の支店は、南に當つて店を開き、是は廣くあらゆる貨物の運搬を取扱ひ、共に繁昌を競つてをります。

曾根崎新地

難波停車場より廿丁餘

該廓は北區曾根崎新地壹町目貳町目三町目、同裏通壹町目貳町目三町目を區域としてあります、貸座敷の數百八拾貳戸、居稼貸座敷の數貳百、藝妓の數參百五拾七人、娼妓の數百參拾九人、廓内で有名の青樓は河佐、平鹿、豊田、其他にも尙澤山あります、大阪で花街を云へば、先づ南地の五花街に指を屈しますが、當所其五花街に正敵する繁昌、藝妓も亦、南地は華麗を以て鳴り、北地は高尚を以て稱せられ、互ひに長所特色があるといふ、粹士間の評判です。

露天神 同上

曾根崎にあります、祭神は菅公、例祭は七月廿日、社傳に依れば、菅公築紫へ左遷の時、福島に船泊りしたまひ、大融寺へ佛詣あらんとて、船頭茂大夫案内者となりて行られしが、此道のはとり露いと深くありければ、菅公露と散る涙に袖は朽にけり都の事を思ひいづれば

北野天満宮



一名を綱引天神と云ふ、北野にあり、菅公左遷の時、福島に船繋りの間、此地に遊び、綱を敷物にして難波の梅を愛された舊迹で、往古の浪華の圖にも見えた古社だといふことです。

堀川戎神社

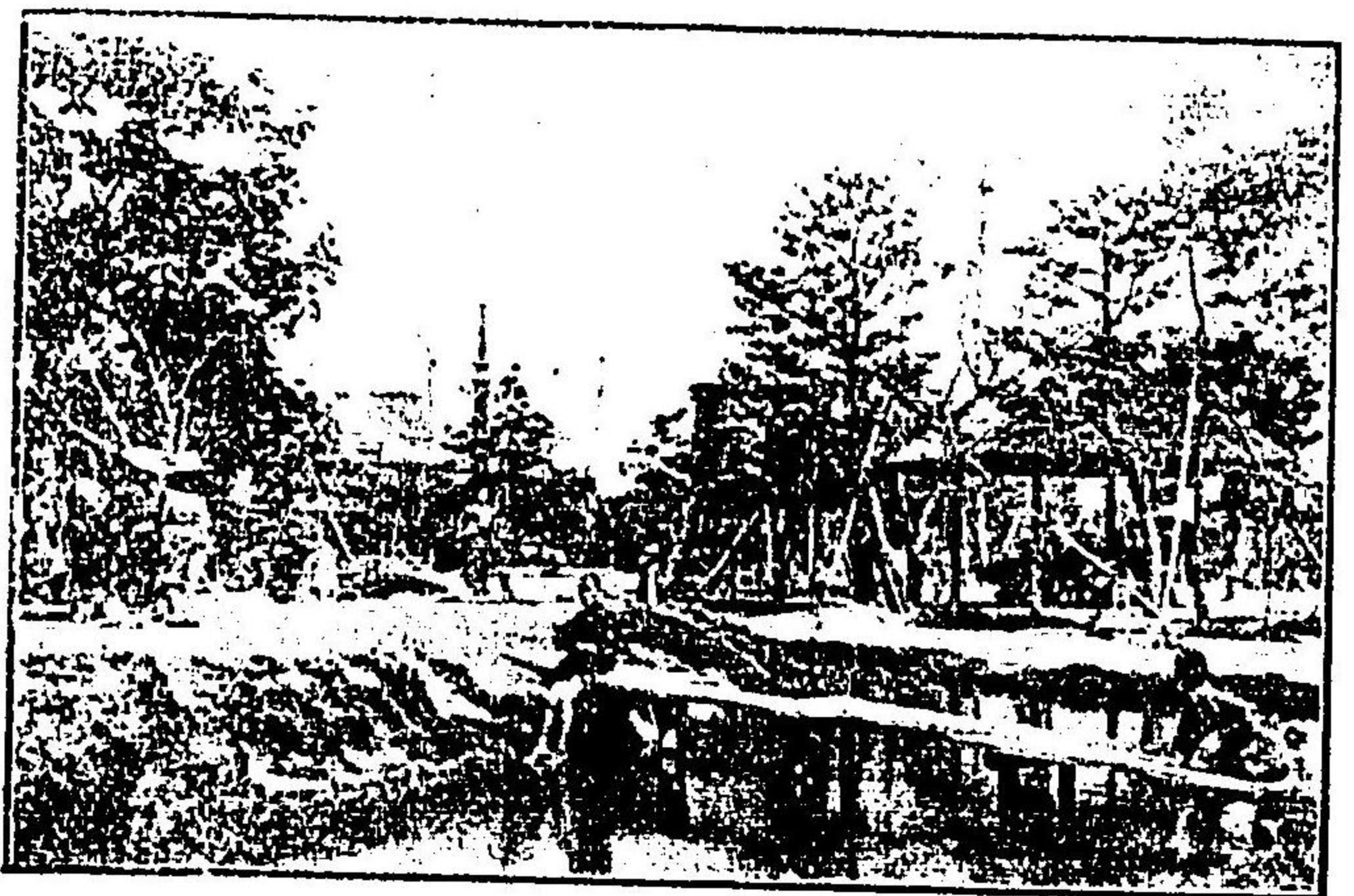
は天満の堀川にあり、中央は蛭子命、左は少彦名命、右は太玉命を祭つて、他に末社もありません、例年一月十日には南の蛭子についで、繁昌です。

北野凌雲閣 難波停車場より卅丁

は北野に聳ゆる九層樓です、一名を有樂園と云ひ、最初は堂島の人権重三氏が、明治廿一年三月上棟式を行ひ、粗落成するに及んで、現今の鷲尾守之平氏の所有となる、九階の第一層は百坪、高さ廿三間、其壯大均て思ふ可し、苑内も広く、四時の花木を栽て人目を娯ましむ、縦覧人平均一个月五百人上ると云ひます。

中の島公園 難波停車場より廿町餘

大 阪 中 島 公 園  
難 波 停 車 場 三 丁 二 丁



Nakanoshima Park, Osaka. About two miles from Namba Station.

公園は浪華橋の西にある一區の地でござります、北は堂島川に沿ひ、南は土佐堀川に臨み、青柳翠松枝を交へ葉を重ね、車馬絡繹煙茫たる此大阪市中に在りて、此處のみ一閑地と云へば言へるところです、近來水道の水に依り噴泉を設けられ、石を疊んで臺となし、丈餘の飛泉其上高く珠を飛ばし夜は彩色電氣を照して、更に觀を添へ、公園の粧飾の一に成つてをります、公園内に東屋を設けて又所々に共同椅子を備へて、衆庶の休憩に便を與へてあります、豊國神社は園の中央に麗々然として鎮座し、其背後には薩肥の暴徒鎮

として高く聳え、豊國神社の側には、自由亭大阪ホテルの洋館壯麗を極め、銀水樓も亦和屋ながら一種の風致を備へ、孰も料亭と宿屋を兼ねてをりませ、豊國神社の境内は櫻樹を多く栽ゑ、又萩をも栽てありませゆゑ、春秋二季観花の人を招き、社頭一層の繁昌を添へます、公園の洲崎に立て東を望みますと、名にしおふ天満天神の二大橋と併せて、大阪城の天主臺を見ることを得、人をしてそゝろに豊公の功業の大なるを追憶せしめ、只澗江の景色の美を賞する情味のみならず、歴史上一種壯大の念をも起さしめませ、日本第二の都府たる大阪の公園として、規模狭小の嫌ひはござりませ、風晨月夕此に杖を曳きませすれば、又塵念を洗ふに足りませ、殊に夏の夕、市民競つて此に集りませして、晝の暑さを忘るゝ一大樂土といたしてをりませ、本年から公園の西手に旭麥酒會社の出店が出来て、麥酒と洋食を販ぐので、又一層の賑ひを添へませした。

澗江の納涼

何となく殺風景、四條は又夫に反して、水は如何にも清ふござりませ、川が淺すぎませして、僅に足を浸すのみで、京の人わづかの水で涼んでおと川柳點の悪口がありませ、真にその通りで、之に比ぶれば大阪は江澗く、水清く、橋大いに、通船あり、船生洲あり、中の島の公園を控え、築地の料亭に添ひ、風景に富み、酒食に便に、水陸兩ら好しうござりませ、すから、納涼は大阪が三府第一でござりませ、是を細に陳ますれば、橋上の畫燈、氷を賣るものあり、館湯を鬻ぐ者あり、水濱の遊客、西瓜を齧む者あり、麥酒を飲む者あり、藝妓を載せたる船は三絃を弾き兩鼓を撃つ音あり、醉客を乗せたる船は搏戰戯を起し淨瑠璃を呻ありといふ盛んな状況で、世界は忽に變り、水か陸か、晝か夜か、朝か晩か、時を知らず、處を辨はず、心魂俄飛び、夢の如く醒るが如く、痴の如く、狂の如く、自ら我身を護る事を知らずとも云ひませうか、之に添ふるに煙火戯を以てしませから、その豪華熱鬧畫も及ばず、況んや筆をや、増て不調法な案内者の舌では、とても十分の一もつくせませんから、今は昔頼山陽が此納涼を詠じた詩がありませ、左に掲げてその足らないところを補ひませ、

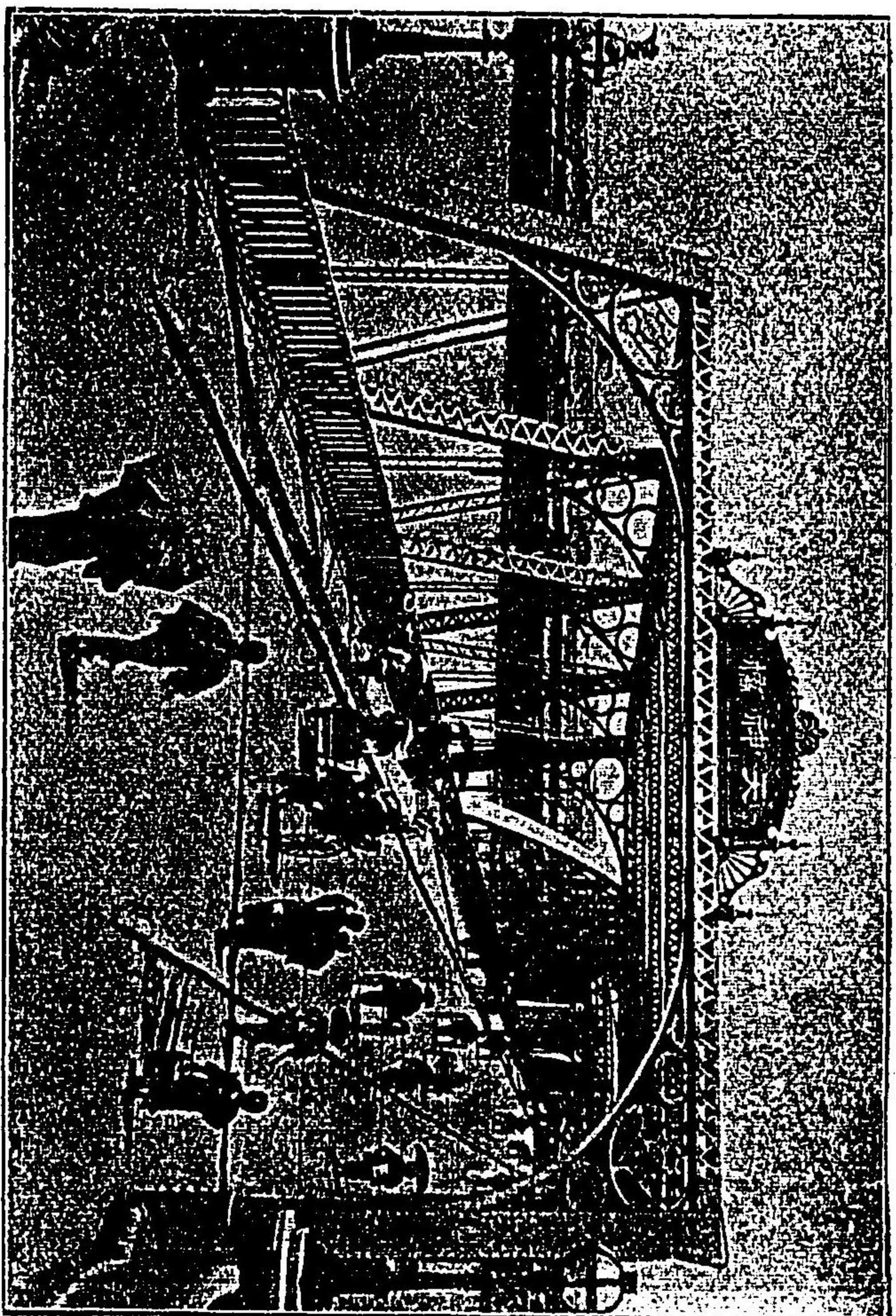
萬人聲裡夜如何。  
豪竹哀絲船楫比。

月到天心露氣多。  
一江無處著金波。

三大橋

橋の多いのは大阪の一つの名物です、今仔細に計算しましたら無慮三百四五十、極く小さい橋をも加へましたら四百にも達しませう、其中で天神浪華を三大橋と稱して、共に大川に架つてをります、以前は浪華橋のみ鐵橋で、天神の二橋は木橋でござりまして、その壯觀も今程ではありませんが、去ぬる明治十八年の大洪水に破損をいたしましたので、時の知事建野郷三氏、遠き慮を廻らして、三年の月日と數十萬の金を費して、今の鐵橋に架替たのです、乃ち天神天満兩橋とも明治廿一年十二月の落成、此費用天神橋は金拾五萬〇三百拾八圓、天満橋は金拾參万六千〇七拾圓、當時此架橋に就て、府會議員の不満を買ひ、成式に議員一名より臨席しないといふやうな状況でござりましたが、固壯嚴、人馬往來に便に、洪水の氾濫に殞せず、風致を添へ、偉觀を飾り、海内無雙の名を博し、市民も今日は却て氏の英斷を賞し功勞を感

六丁もござせう。  
大阪城  
難波停車場より廿五町  
天正の十年豊臣の秀吉、明智光秀を山崎に當城は



Tenjin Bashi, Osaka. About two miles from Namba Station.

てをりませう、  
因に申す、  
難波橋は廿五  
丁、天満橋は廿五  
丁、天満橋は廿五

開き、宏壯堅固、内國第一等の名城、七層の天守を築造したるが、元和の兵燹に罹



Castle of Osaka. About two miles from Namba Station.

討て、茲に城郭を築きましたので、周囲一里餘、遺蹟深く、大手、京橋、奇麗、玉造の四門を

大 阪 難 波 車 場 平 塚 城 丁 五 十 五

り、其後修理して、當時の本城のみとは云へ、僅に舊觀を存してをりま  
したが、戊辰の戦に再び灰燼となり、今は只石臺のみとなりましたが、  
尙其規模の壯大を伺ふに足りずばかりか、今は鎮臺第四本營を其内に  
構へ、精兵常に統率し、城外には講武練兵場、砲兵工廠の設けなどあり  
まして、銃器の製作日々隆盛を極め、兵營病院、偕行社、其他洋風の建  
築處々に聳々、又是一大壯觀、地方の人の殊に目を駭かす所です。

博物館 難波停車場より十五丁餘

は明治七年九月内務省の認可を得て、今の本町橋詰町五十八番地、即ち  
舊大阪府廳の建物を借用ひ、翌八年十一月初めて開館し、爾來土地を  
弘げて陳列室及び事務室を設け、或は美術館を建てるなど、漸次規模を擴  
張し、大阪府の監督の下に屬しておりましたが、二十二年内務省令第一號  
に依り、同年六月より市郡連帶の所屬に變じられたれど、尙大阪府の管理に  
屬しておます、現今の敷地坪數五千四百五十九坪七合四夕、建坪千〇九  
十五坪三合四夕、場内に西洋造の美麗な美術館あり、尋常陳列所數棟あり、  
諸雜貨を鬻ぐ賣店あり、茶室あり、目今建築中の能舞臺あり、動物

園あり、數種の花卉を栽えて四季に花を絶えず、美術館には年中新古の美術品を陳列し、春秋の二季には美術品の大展覽會を爲し、又市内の日本畫と洋畫の専門家諸氏、此館を借りて時々新畫の展覽會を開くことあり、茶室では時々茶會花の會を催し、能舞臺では時々能狂言和洋音樂の合奏など催す事がある……此ういふと博物場も可成り其用を爲してあるやうだが、只今の組織では、只人に買物の便利を與へるのと、夫から見聞について高尚の娛樂を興へることの二つの効能はあるが、肝腎の人智を開發するの用が薄いやう思はれる、案内者は常に夫を遺憾に想つてあるのです、今度場内を擴張すると共に其他の組織をも改革して、博物場の名に背かぬやう、否、大阪博物場と云つても羞かしくないやうに、完全なものにすることを願ひたく思ひます、通券は貳錢で、一年中を毎日平均して千二百人に下らないといふ、又盛んなりと云つべしです。

商店の集合

大阪には同種の商店が一所に集つてゐて、買客の便利を達してゐる所が處々にあります、夫を一々案内するも煩はしうございますから、此所  
 本町、古着商は坐摩の前、人形商は御堂前、鼻緒商も同上、疊商は島の内  
 の疊屋町、古道具商は同上の八幡筋、道具屋は船場の井池、堀江の桶通、  
 材木商は西長堀、藍商は堀江、砂糖商繪具商は探筋、瀬戸物商は横堀の  
 瀬戸物町、干鰯商は鞆の永代濱、魚問商は雑喉場、雜菓子商は南區松屋  
 町、傘商は南區長古町、煙草入商は東區淀屋橋の南詰、煙管商は南區四  
 橋、西南詰、炭薪商は西區西道頓堀、石商は西區西長堀、石炭は北區安治  
 川町等です。

高麗橋

難波停車場より十五丁餘

高麗橋は高麗橋筋の東堀に架る大坂最初の鐵橋、長崎の蘭學者で活版の  
 創作者である元木昌藏氏の手に成たものだといふ事です、此橋の東詰に  
 里程の元標が建てあつて、各府縣の元標に達する里程が細かに名物に數  
 あり、昔は此高麗橋筋で虎屋の饅頭と三井岩城の呉服店が名物に數  
 へられてゐましたが、時勢の變遷の爲め、虎屋と岩城は形跡も無くなり、

只三井のみが昔に勝る繁昌をいたしてをります。

大阪株式取引所 同上

北濱一丁目にありす、是は明治十一年の創業で、發起人は五代友厚廣瀬宰平其他の諸氏、創業の時は當時の株式條例の命ずる所に依りて、資本金貳拾萬圓、十九年の株式條例改正に依りて、資本金を拾萬圓に減じ、其減額の拾萬圓を以て、大阪製銅會社の資本に當り、其後廿八年に至りて又も拾萬圓を増加して、元の二拾萬圓の資本となる、廿九年に亦も拾萬圓を増加して引續ぎ三拾萬圓を増加して、六拾萬圓の大資本と成たのです、營業の次第は、十一年の創業ころは、公債證書の賣買を専らにしてをり、十三年ころから銀貨の賣買を始め、十四年十五年ころは、公債の賣買の盛大をいたしてをり、十五年より十六年にかゝり、銀貨賣買頗る盛大を極め、夫が爲め公債の賣買や、沈靜の傾きでしたが、十七年に金銀貨の賣買を禁止せられたので、夫からは諸會社株式の賣買を始め、最初は大坂商船會社の株式賣買が頗る盛大、引續て山陽鐵道會社其他の鐵道會社の株式賣買が盛んになり、今日では鐵道會社紡績會社銀行其他

種々の株式賣買が隆んになり、仲買人の數も、最初創業の時は三十名、賣買の盛大になるに隨ひ、一時五十五名にまで増加し、後に又衰頽して二十四五名にまで減少しましたが、今日は百名に充ち、尙續々望み人があるといふ事です、以て其盛大を卜するに足ります。

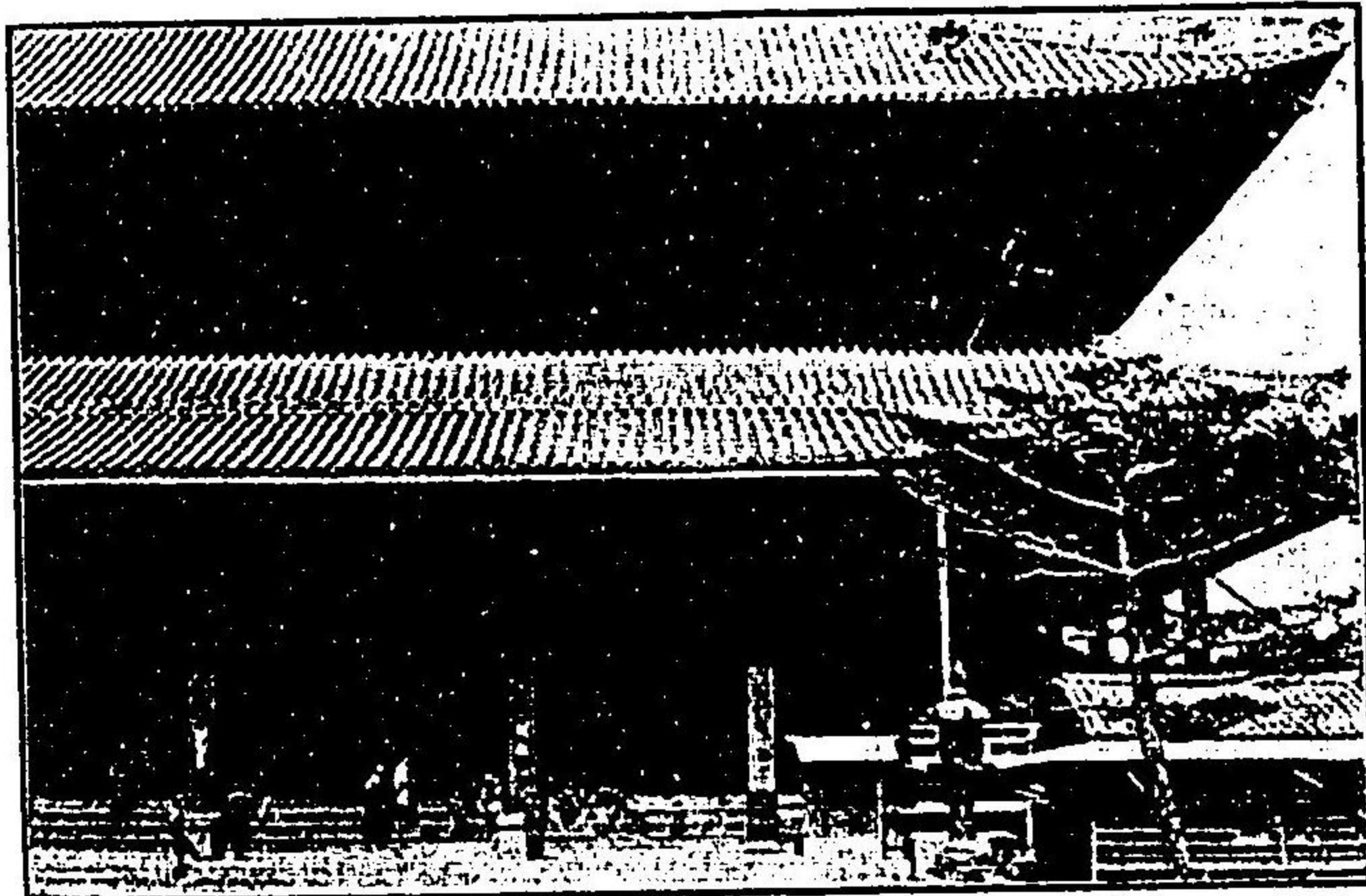
御靈神社

同社は東區平野町にありす、祭神は中央は天照大神宮、左は八幡宮、右は鎌倉權五郎景政、例祭は七月十七日、秋祭は十月廿七日、社内に文樂座人形淨瑠璃、寄席其他飲食店などあつて、所柄なかくの繁昌、殊に一六の夜店の賑ひは大阪中の夜店の第一等です。

浪花館

御靈神社の前にありす、本年の夏の始めに開館しました勸商場で、心齋橋筋の商品會と大阪で二つの勸商場、此所へ這入れれば何れも彼も一度に調へる事の出來る調法の場所、殊に正札つきですから、地方の人の買物するに、格別便利です、此館は東京の品物を多く陳列してあります。

大阪南御堂ノ景  
難波停車場ヨリ十丁



Minami Mido (Buddhist temple), Osaka.  
One mile from Namba Station.

川將軍より命を蒙つて、文祿年中に建立したのです。

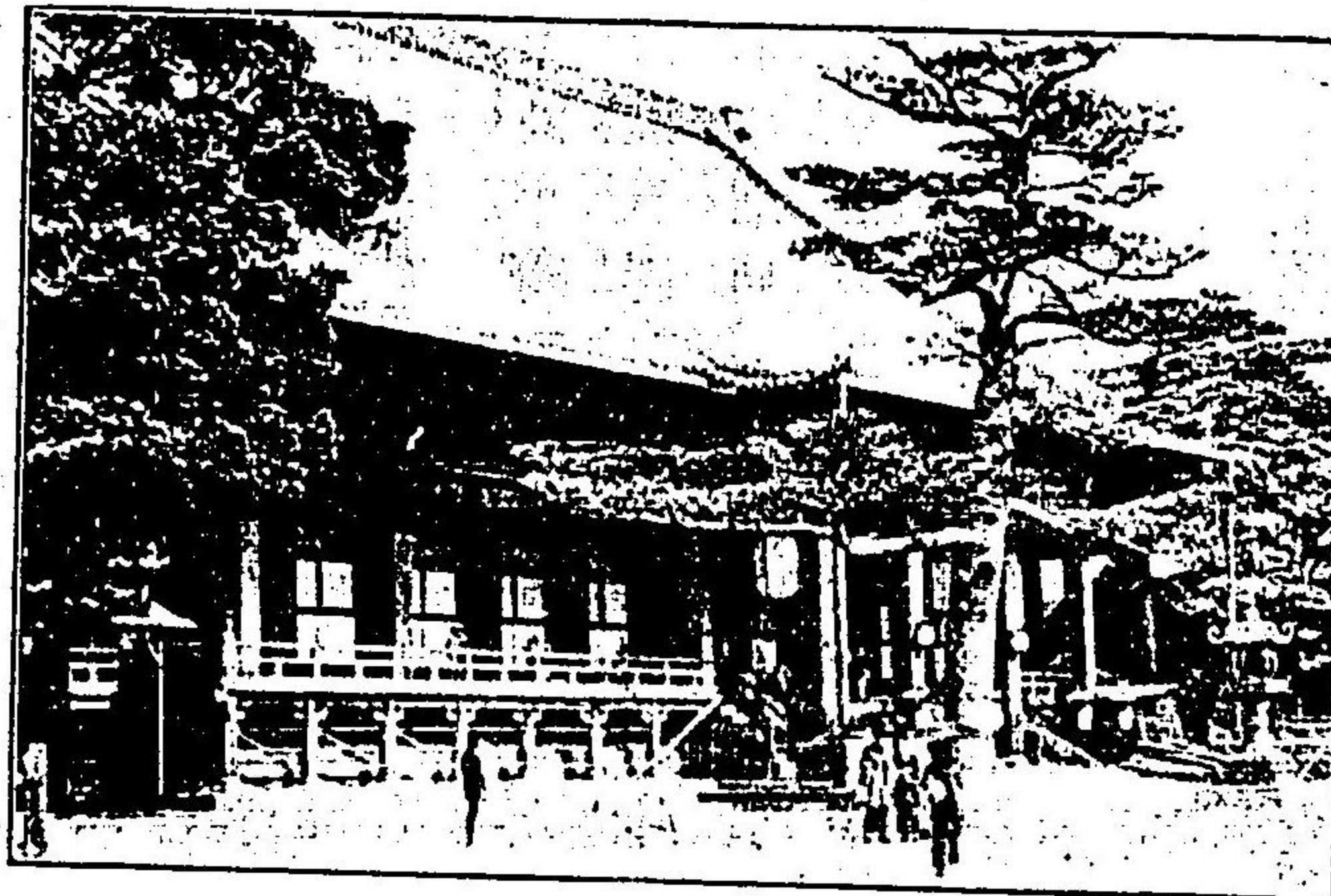
嘆の一句を吐きました。西風に、何ぞ自力の、扇つれ

是も同じ御堂筋の久太郎町にあ  
ります。裏御堂又は南御堂とも  
云ひまして、京都東本願寺の抱  
所です。本尊の阿彌陀はやはり  
安阿彌の作、對面所、書院、鐘  
堂、鼓樓、唐門、茶所、窟門等  
があつて、津村御堂に劣らぬ廣  
大の建築、中興の教如上人が徳

難波御堂 同拾丁

今日は境内に相愛女學校があつ  
て、盛んに生徒を教育してをり  
ます。

大阪北御堂ノ景  
難波停車場ヨリ三十丁



Kita no Mido (Buddhist temple), Osaka.  
One mile from Namba Station.

津村御堂 難波停車場より拾三丁餘

つた因縁に依つて、准如上人の再興されたもので、其時に西山宗因が贊

東區御堂筋の本町の北にありま  
す。表御堂とも又北の御堂とも  
云ひまして、京都西本願寺の抱  
所ですが、津村は圓の訛だらう  
といふ故人の説であります。本  
尊の阿彌陀佛は安阿彌の作、又  
二尊堂には開山聖人と進如上人  
の二影を安置してあります。其  
共に進如上人の筆といふ傳へで  
す。其外對面所、轉輪藏、鐘樓  
堂、鼓樓、茶所、等があつて、  
市内有数の大建築です。此堂は  
進如上人が石山本願寺を建立あ

上難波仁德天皇の神社

東區の博勞町にあり、俗に博勞町の稻荷と唱へてをります、祭神は  
鳥鷲聖帝、又勳一等若宮、祭神は菟道稚郎、博勞神祠、天照太神宮、其  
他に末社があります、例祭は七月廿一日、秋祭は十月廿一日、社内に稻  
荷座の人形浄瑠璃、又は飲食店寄席などありまして、頗る繁昌です。

坐摩神社

東區の南渡邊町にありまして、社格は府社、延喜式内の神社、祭神は生  
井神、福井神、網長井神、波比祇神、阿須婆神の五坐、應神天皇の三年  
十一月、神功皇后三韓を征伐して、凱旋の日、此浪花津に船を寄せたま  
ひ、佩ぶる所の神璽を奉じて祭られたのが始めで、舊は大江の岸田装の  
島、今の御旅所の所にあつたのを、天正年中に今の所に移されたこのこ  
と、當市中で尤も由緒ある御社で昔公の筆、道風の書、大塔王の墨蹟な  
ど結構な什寶があるといふ事です、例祭は七月二十二日、秋祭は十月二  
十二日、社内に寄席飲食店などあつて、随分繁昌いたしてをります、

昔は今にいや増した賑ひであつたといふ事です。

順慶町 難波停車場ヨリ八丁餘

順慶坊上夜尤明、汗雨袖雲縦又横と田中金峰は唄ひ、飛埃映燭夜成霞、  
隔水新街是妓家と廣瀬旭莊は吟じ、昔は夜市を以て名高うございましたが、  
今は左までもありません、併し種々の商店が軒を連ねて晝夜分ちなく繁  
昌を極め、心齋橋につい賑ひです。

心齋橋通 難波停車場より最近二三丁最遠十丁餘

心齋橋通は、北は平野町より南は心齋橋を経て戎橋道頓堀に至るの地、  
大阪第一等の繁昌の場所でございます、人と腕車の往來さながら織る  
が如くの漢語で往來の雑沓を形容して、肩摩殺撃と云ひますが、此通  
の繁昌は真に其語の通りです、多くの書林は孰も目に立つ招牌を掲げ、  
和漢洋の書籍を店に積んで學校の生徒を呼び、數の呉服屋は種々の布帛を  
軒に垂れて良家の姉女を招き、其他西洋小間物商、時計商、蝙蝠傘商、  
煙草屋、華簪屋、團通敷物類、畫草紙、寫真、石版類、銅器、磁器、骨



董商、文房具商、其他物として賣らざる無く、品として鬻がざる無く、殊に近來は日月に店飾りが巧妙になり、一路十數町の間、宛然一個の大勸商場とも云ふべく、地方の人の買物には尤も便利などころですが、人を見て甚しい掛直をいふ店もありますから、能く注意をして買はねばなりません。

商會 難波停車場より六丁餘

南區戎橋筋周防町南入たどころにあり、御靈前の浪花館と一對の勸商、此所は當地製の物を重に賣捌いておますが、浪花館も同様、品は正札附です。

名物案内

ついでに當市の名物を一二御案内いたしませう、菓子には土佐堀の高岡、高麗橋の鶴屋、淀屋橋筋の龜末廣、新町の廣井堂、御堂筋の高取、宗右衛門町の湖月、カステラは北濱の花月、煎餅は平野町の利休、大江橋北詰のねげ、岬橋北詰の近藤、西洋菓子には京町堀の風琴堂、奈良漬は

天王寺の六万堂、鯛味噌は新町の幾村、生魚の鰯詰は戎橋の丸万、岩おこしは二井戸の津の清、北堀江の大黒、小鯛の雀ずしは西横堀のすし万、淀屋橋筋の九政、花かんざしは九郎右衛門町の英、小倉油は八幡筋の小倉、襟は平野町の襟平、蒲鋒は北濱の京鐵と灘万、扇子は北濱の團扇堂、香類は心齊橋筋の仁壽堂、博勞町の松榮堂、團通は本町の三谷等その他種々あり、夫を一々述べては、案内者の舌が爛れますから。

三津八幡と三津寺 難波停車場より六丁餘

八幡は南區島の内木綿橋筋にありまして、祭神は應神天皇、例祭は七月十五日、放生會は九月十五日、寺は南區島の内三津寺筋にありまして、宗旨は古義眞言、本尊の十一面觀音は、行基の作といふ傳へ、境内に昔は大木の楠があつて名高うございまして、今有るのは枯て二度めに植たのです。

四橋 同上

四橋は西横堀に上繫橋下繫橋、長堀に吉野橋炭屋橋が架つてゐる、之を

新町の遊廓は、寛永年中公邊の許可を得て、田圃を開いて町にして、諸方の遊所を一つに集め、新に開いたといふ意で、新町の名を呼んだといふ事です、其時木村亦次郎といふ伏見浪人、花街の長を勤め、幕府より飄箆の馬印を拜領して、常に玄關に飾つて置いたゆゑ、通り筋を飄箆町と云つたさうです、大坂第一の古い遊廓で又由緒のある土地です、今日この現況を云ひますと、西區新町通り壹町目二町目、同北通りを九軒と云ひますが、是は創めに玉造の九軒茶屋を移したから此名が残つてゐるといふ事です、此所は青樓の前に櫻が栽てありますが、春の彌生の花盛りには、夫に火を入れて夜櫻と唱へ、又格別の賑ひ、櫻の中に、春の夜は櫻にあけてしまひけり、だまされて来たことなり初櫻の二句の碑が立てをり、又此花折りたまひせと上代様でした、めた昔ゆかしい制札が立てをります、同南通壹町目貳町目を越後町と唱へ、又其南通を裏新町と唱へ、昔は此廓に總角夕霧吾妻松山などいふ、名高い太夫が生まれ

、廣く國々へ聞はてゐます。

新町 難波停車場より八丁餘

合して四橋といふのです、二流が十文字に成て、橋を四方に架したので、橋の上の人の往來、橋の下の船の交通、晝夜絶間なく、風景極めて面白ければ、古くより浪華名所の一つに數へられ、尤も月見に好き所とて、故人の吟咏も數多ありますが、その中で案内者の殊に面白く吟じましたのは、春田壺所の茶籠詩、蓬伴酒瓢、孤舟短棹、正搖々、月華何處望、尤好、十字江流口、又來山が涼しさに四つ橋を四つわたりけり、の句は子供までが知てをります、前の名物の所にも述ましたが、此橋の煙管は名物の一つ、乃ち四橋を以て名を呼んでゐます。

新町橋 同上

西横堀に架つてゐて、北より十二目の橋です、東は順慶町、西は新町の入口、尤も繁昌の地で、尤も往來の多い橋、心齋橋、戎橋と肩を併べてゐます、又古く演戲の脚色にも用ゐられてゐますから、大坂の橋の中で

たが、今に解語花の栽培所、蘭麝のかほり、絲竹の響、霞郁洋々として、遊蕩家の目から見れば一の極樂界です、此廓の年中行事の一斑を云へば六月の住吉神社の田植の神事に、數名の藝妓が植女に出かけ、其月に轉進の道中があります、又毎月同廓裏町の婦徳會場で、歌舞の温習會があつて、藝妓の技藝を研ぎ、且は來客の娛樂に備へてをりますが、春秋の二季には特別の大温習會があります、貸座敷の數は貳百參拾一戸、此内尤も有名なのは九軒の吉田屋、神崎屋、新町通の袋屋、川保、加藤、南通の中木原、藤田、茨木屋、菱田等です、居稼貸敷座廿八戸、藝妓三百九十七人、娼妓參百八拾五人。

阿彌陀池 難波停車場より拾丁餘

西區北堀江御池通りにありまして、遺池山和光寺、又の名を智善院とも云ひます、本尊の阿彌陀は一光三尊佛、金銅で身長壹尺五寸、左の手に刀劍の印を結び、右の手に施無異の印を結んである、淨蓮上人の鑄造、阿彌陀池は本堂の北に在るが、池の中に寶塔が有て、其中に阿彌陀三尊を安置してある、其他觀音堂、普門堂、愛染堂、藥師堂、地藏堂、焰魔

堂、鐘堂など有升、舊曆二月の佛涅槃と同四月の佛誕の兩會は、當寺第一の繁昌の法會、此日は寺の門前から市の側まで植木屋が店を出し、阿彌陀池の植木屋として、大阪市の人が群集します、當寺の阿彌陀池は昔物の部の守屋が佛像を棄てた難波堀江の古蹟だといふ傳へで、乃ち本多善光が肩にして歸つた信州善光寺の如來と同体の彌陀を安じて、元祿年中に智善上人が此寺を作つたので、夫で阿彌陀が池といふことですが、守屋が佛像を棄たしたのは、大和の高市郡豊浦寺の東、飛鳥川の西の入江だといふ説があります。

堀江の遊廓 同上

此遊廓は、西區北堀江上通壹町目貳町目三町目、同下通壹町目貳町目三町目に跨つてをりまして、新町につゞいての場所、明樂座と堀江座の二戲場があつて、なか／＼繁昌な遊廓です、貸座敷百四拾戸、藝妓百九拾四人、娼妓百貳拾人、貸座敷の數の中で、木屋、一力田中屋其他名高い家が二三あります。

松島の遊廓 難波停車場より二十丁

西區松島橋西詰より、西は梅本橋の東、北は松ヶ鼻より南は天神御旅所の横手の堀割までが、松島遊廓の區域です、此遊廓は、市内の遊廓の内

大 阪 松 島 花 街  
波 難 車 停 場 丁 廿 一



Matsushima, Osaka. About two miles from Namba Station.

青樓の中で屈指だといふこと、又此樓では客の好みに依りて、藝妓に舞臺

たのですが、なか／＼の繁昌を極はめ、其區域は前に述べた通り、貸座敷の數百五十拾四戸、藝妓八拾八人、娼妓は二千六百五拾七人、娼妓の數は各遊廓の内、此廓が第一です、貸座敷の數、東京樓が第一位を占め、八拾餘名の娼妓と數名の藝妓を抱へてあつて、藝妓とも和洋の兩装をさせ、客の望みに應じて孰でも出すといふ事です、又家の大きい事は、大阪

で伊勢の古市の音頭やうの舞を舞はせませんが、前年案内者が頼れて、戯に筆を採りましたから、松島最寄の名所の案内かたがたお笑ひ草までに載せておきます。

四季の松島

「東の京と名にしおふ、その樓は四ツの時、詠めたえせず千代崎と、常盤にしげる松島の、廓の榮は予賑はしき」  
「初音ゆかしき鶯の、ねぐらさだむる梅本の、橋についきし花の園、にほふさくららの仇くらべ、契り嬉しき中の町、すゑはたがひに高砂の、名にあやかりし友白髪、ほんに思ひも春の空、」  
「あだに苦勞を千本の、まつは辛氣な一人寐も、いつか逢瀬のさし向ひ、うかれて木津の舟すゝみ、流れに映つる月かげに、こがれし胸の暑さ、」  
「夏の夕の川遊び、よい／＼よい／＼よい／＼」  
「物の情を尻なしの、人めつゝみのはじもみぢ、岸の淺瀬による沙魚を、釣する竿のみだれ糸、なびけどさそふ秋風の、いなにはあらぬいな網に、ひかる／＼袖をわしあてし、顔はてり葉の初しぐれ、」  
「深い戀路にみをつくし、すねてそむけし脊とせな、こちらむいてとみ

かはした、天保山のやまほどに、つるる口舌もどけやすい、雪の朝のむかひ酒、よいわぢ川の冬げしき、よい〜よい〜よいやさ。

雑喉場 難波停車場より十七丁

前に商店の集合といふ所にも一寸述べてをきましたが、雑喉場は、西區京町堀通五丁目及び江戸堀五丁目にあつて、魚市場の惣名です、四國中國泉州紀州の浦々から、毎朝魚を運んで来て、市を開く場所です、鯨鮓の小鮮より、鯨鮓の大魚まで、凡そ魚と名のつくものは、皆こゝに集りまして、賣買をしますから、天満の青物市と併んで、大阪市の二大市場です、最初は船場の中にあつて、鞆町と名を呼び、生魚と乾魚と両方の市を立ておましたが、延寶の頃に、生魚と乾魚と二つに別れ、生魚の市は此所に移つて、雑喉場と號し、乾魚の市は阿波座へ移つて、新鞆町と改めたといふことです、元來雑喉場は雑魚場と書くのが當前ですが、雑喉場の誤りのまゝで通用してゐます。

安治川 難波停車場より貳十丁

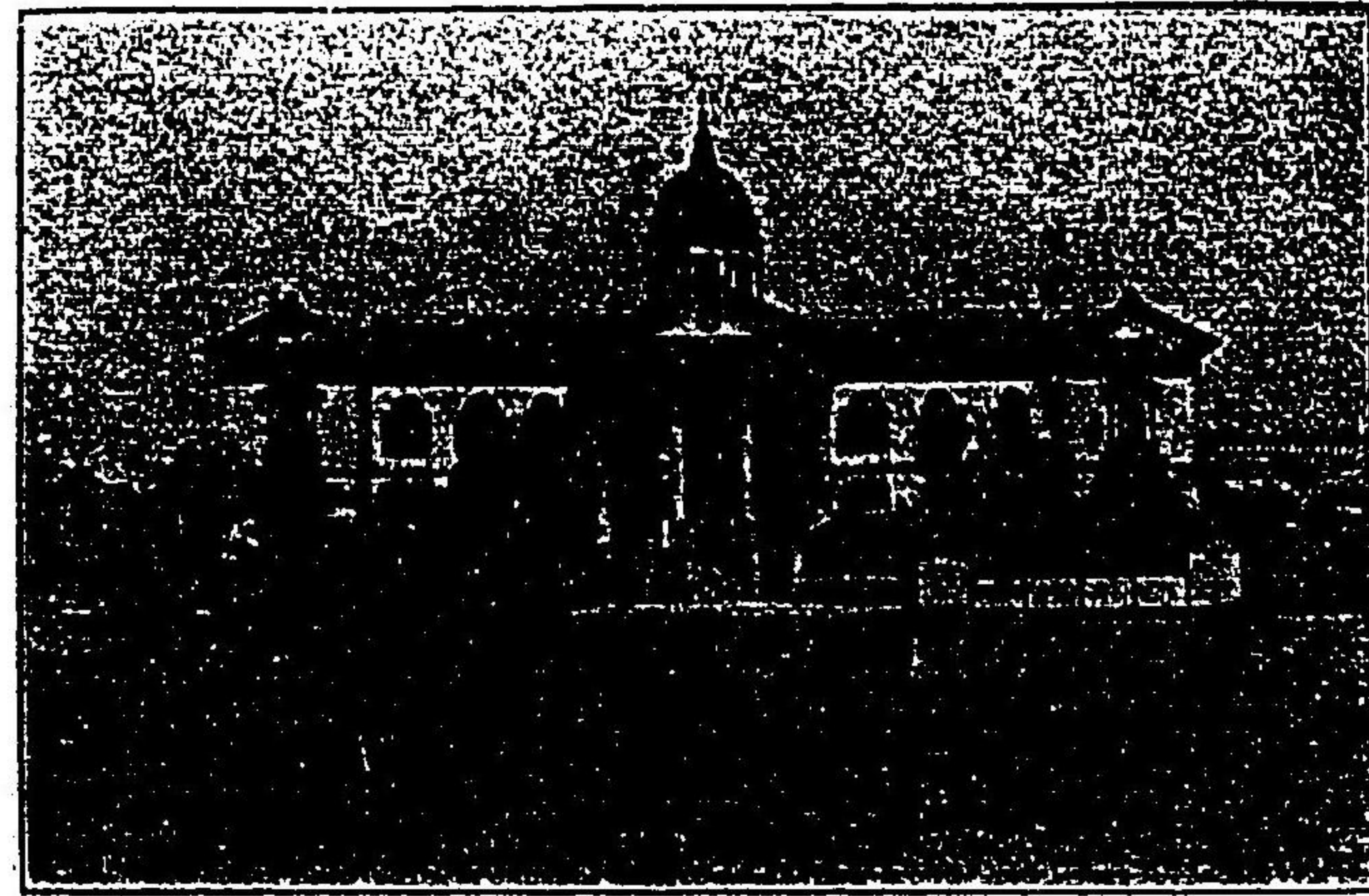
安治川は土佐堀の西の末、其昔川村瑞賢が幕命に依つて堀た川です、瑞賢の名を安治と云つたので、其紀念の爲に名をつけたといふことです、昔は橋の北詰に戲場があつたといふ事ですが、今はありません、僅に五人男の戲場に其名残がのこつてゐます、市内の商賈が諸物貨を海内へ運ぶのは、皆此川から河口へ送るので、此川を堀た爲に洪水の害が少くなつてゐるので、只夫ばかりでなく、此川を堀た爲に洪水の害が少くなつて、戎島九條島市岡新田泉屋新田などの田園が開けたといふ事ですから、實に大功業です。

瑞賢山 同二十五丁餘

山は安治川の末にあります、瑞賢が此川を堀た時、土砂を爰に積上げさせて河口を助けたので、之が乃ち瑞賢の名の因つて起るところ、本名は洪水の時波を爰で堰除げるの意で、波除山といふさうですが、誰も云ふ人はありません。

天保山 同上

大阪府 難波停車場 丁五廿



Osaka Prefectural Board of Administration. About two miles from Namba Station.

は凡そ金拾五六万圓も掛つたといふ事です

二月六日みをつくしのもとより出で、難波津をきて河尻に入る云々とあり、又類聚國史にも難波江始建、滯標と見え、延喜式にも、凡難波津頭海中立、滯標若、有舊標、折者、投、拔、云々とし、してあります。

大阪府廳

難波停車場より 廿五丁

天保山は瑞賢山の西にあり、天保の二年に、大阪の川々の大濠ひを志て、その土砂を此に運んで作つた山だから、夫で此名を呼ぶのです、其當時は、春日には、妓を載する船、絃歌、赤鬘を膾にして、永のをした佳人が芳草の上に坐つて、銀の觴を洗ひ、酔客喧譟日あそび暮して、尙日の短いのを惜み、秋日には、煮を釣る船、酔客喧譟して、餌を投げ、釣を垂れ、釣ては飲み、飲では釣り、夕陽西に沈むころ、海風に快く、吹れ、彼の滯標に詣り、明月に輝して、誰も行く事ですが、今は秋の煮釣のみその面影を残り、春の遊びは誰も行く事はありませんが、併し、東南には泉紀河淡の諸巒を望み、西北は摩耶鉄拐の峰影の、雲間に聳つて眺め、煩る絶景です、西成鐵道が山上来り、築港も落成した曉には、復昔の賑ひに歸つて、此邊は、界の大濠公園を壓倒するやうな繁昌になりませう。

滯標 同一里餘

是は河口の下、河と海の境に立てある水尾木、俗にいふさばの尾、昔よりの浪花の名物の一つで、百人一首の元良親王のわびぬればの歌、その

大阪川口居留地ノ景  
難波停車場ヨリ廿五丁



Foreign Settlement, Kawaguchi, Osaka.  
About two miles from Namba Station.

が新築に成てゐますが、同じく洋風の建築です。

居留地 同上

居留地は、西區の部内、戸數三十一戸、地坪一〇万四百拾四坪、在留外國人の物數三百三十壹人、其内譯、英國人五拾七人、米國人六十八人、獨逸人一人、佛蘭西人九人、清國人百九十八人、瑞西國人三人、白耳義國人二人、西班牙國人一人、男二百五十四人、女七十七人、と云ふと、誠土地も狭く、人口も少なからず、大阪の都會に比べては不釣合ですが、さすがにハーパーの其他の家屋も亦建築を始め總

ての様子が變つてゐますから、一寸見物する價はあります。

河口波戸場 同上

河口は河と海との喉口、イナ大阪の喉口、此所から重に大阪の繁昌を吞たり吐たりしてゐるので、河口は二つあります、一は安治川と云ひます、是は大川筋土佐堀堀川等の下流、一つは木津川と云ひます、是は長堀道頓堀及び西の方の諸流のこゝに歸會ふところ、昔から入船千艘出船千艘と云ひなす繁昌の所ですが、今では和船と漁船と出入頻繁、貨物の運送、人間の上下、其他諸車の輻輳、漁笛の音、柔櫓の聲、吶喊の響、相集つて常に一種の雷鳴をなし、其維沓は實に名狀のならぬ程です、此邊は廻漕問屋、石炭商、鉄工所等軒を駢べてをります、其他何吳の會社があります、中でも一番盛大なのは大阪商船會社です。

大阪商船株式會社

該社は北區富島町七拾五番屋敷にあり、明治十五年の創業、資本金百五十万圓、所有の船數五拾八船、解用の小蒸氣船七艘、併せて六拾五

艘、神戸、門司、基隆、多度津、徳島、宇品、宇和島、大分、赤間關、長崎、鹿兒島、釜山、仁川、東京、臺北等に支店を置き、其大阪以西の津々浦々に荷客取扱店を設け、航路は南海、西海に至らざるなく、沖繩、臺灣、朝鮮にまで及んでをりますが、此會社の盛大は即ち大阪の盛大の一斑を表はしてをります。

大阪築港

案内の序に事が未だに屬しますけれども、此の大阪に就ては貴重の事です。案内から、大阪築港設計の梗概をお断致してをきませう、併せて此計畫は港の全部を内港外港の二區域に分つ組織であります、外港は南北突堤に依りて圍繞せられるもので、其北突堤は安治川河口の南涯、天保山燈臺より凡そ西南西六百五十間にわたる處を起點とし、殆んど同一の方向に依りて一直線に海に突出し、終端に於て少く灣形を畫し、水深印以下二尺八尺の所に達して止むのです、其延長は千四百九拾貳間、而して南突堤は天保山燈臺を凡そ南々東に距る千五百拾間、即ち尻無川燈臺を離る事九百三拾間の所を起點として、凡そ北西微西の方向に進むこと四百貳拾

拾間にして、更らに凡西微南に轉じて一直線に進行すること千八百五拾五間、水深印以下二尺八尺に至り、少しく彎曲して北突堤に對し、兩者の間、水深に於て幅員百間を存し、以て西微南に而して港口を作成るので、内港は木津川海口の北岸舊砲臺跡の附近に起り、凡北西微西に進むこと三百三拾間、亦轉じて凡北微西に進むこと五百八十間、南突堤の起點に達する船渠底に依つて擁護せられるので、如斯にして包圍たる水面の内、凡百九拾万坪を埋立て、新港市街及各種用地に供し、且其沿岸に於て櫛形の凹凸を存し、以て船渠築造に便する者であつて、外港に於ける該埋立地の涯端は港口を距る、實に千七百貳拾間の長大距離を以て居ります、此築港工事に要する日數は明治三十年より同卅七年の八年間の長日月であります、又費用は貳千六百七拾万五千圓、實に世に稀なる一大工事、此築港落成の曉には、又更らに大阪繁昌を添ゆること幾何で御坐りませうか、想像にも及びません。

種々の案内

東西南北の四區の名所舊迹及び官衙新事業の概略御案内致たしましたか





澤龜

（上巻中挟）

亭料の名有      館旅の名有      内案の々種

ら、此次には御聞きに入れておいたら、多少御便利に成るだろうと思ふ事を、類を以て集め、ひつくるめて申上げませう。

有名の旅館

東區大川町の松卯、原平、北川、備忠、同北濱壹町目の花外樓、同二町目の灘方、加賀屋、同四町目の錦波樓、同今橋四町目の紫雲樓、島町壹町目の山鶴、伏見町三町目の加納屋、同築地の竹式、同道修町壹町目の花房、同備後町二町目の鈴木屋、同安土町二町目の駒井屋、北區中之島公園の大坂ホテル、同所の銀水樓、同三町目の花屋、同四町目の同榎上町の竹田屋、同會根崎新地裏町の静觀樓、同所の角治、同所の傳屋、同橋北詰西への丸萬、同日本橋南詰の岸澤屋、同日本橋壹町目の喜戎橋北詰西への丸萬、同日本橋南詰の岸澤屋、同日本橋壹町目の箆屋、同長堀二町目の河内屋、西區長南橋北川岸の宮本等其他家澤山あり

有名の料亭

ますが、先つこゝらで………

廣 告

宮內省御用品  
各國大博覽會優等獎牌受領

# 改良日本酒



釀造發賣元

大阪府堺市

## 肥塚酒造店

電話五拾五番

(上卷中扶二)

各國大博覽會於有功賞牌受領

# 改良日本酒



瓶詰等御好ニ依リ調進仕候

## 益山嘉兵衛釀造

大阪府堺市場寺町  
電話三十六番

改良  
清酒

まじりのたぎり

醸造元

各國博覽會  
優等獎牌  
於  
共  
會  
進  
領  
受  
會

吟造日本酒



釀造發賣元

大阪府堺市

山縣酒造會社

(電話三百一十一番)

此為商標

芳 香 醇 良

釀 造 發 賣 元 大 阪 府 堺 市 大 塚 和 三 郎



大 阪 府 堺 市

大 塚 和 三 郎

(上卷中挟七)

宮 內 省

御 用 酒

KINRO

金 露 印 改 良 日 本 酒



各 國

大 博 覽 會

賞 牌

受 領

(上卷中挟六)

領受牌賞譽名會覽博各國外內

酒本日良改



市場府阪大

社會名合星八

(番八十六話電)

(上卷中換入)

各 國 大 博 覽 會 優 等 賞 牌 受 領

創 業

堀尾丁の由來たるや久し天正年間豊太閤の阪城に在りし時我祖本手長兵衛剃刀を製し妻常  
 に之を公の邸に鬻ぐ公其銳利を嘉し命じて其庖丁を作らしむ妻其事に奔走し遂に之を創造す  
 是れ當鍛冶の始めなり公其妻能く事を辨ずるを稱し本手を改め尾方と稱せしむ蓋しおかた庖  
 丁と稱せらるゝ所以なり今代善四郎に至る迄凡て十四世尙本業を營む

受 賞

- 明治十四年十月 内國勸業博覽會 鳳紋賞
- 明治十四年六月 奈良博覽會 二等賞
- 明治十五年九月 奈良博覽會 二等賞
- 明治廿一年六月 堺市製産物品評會 有功賞
- 明治廿二年四月 堺市前同會 再度有功賞
- 明治廿三年七月 内國勸業博覽會 有功賞
- 明治廿五年十月 大阪府工産物品評會 三等賞

以上

其庖丁製造所并販賣



尾 方 善 四 郎

大阪府堺市綾ノ町西壹丁



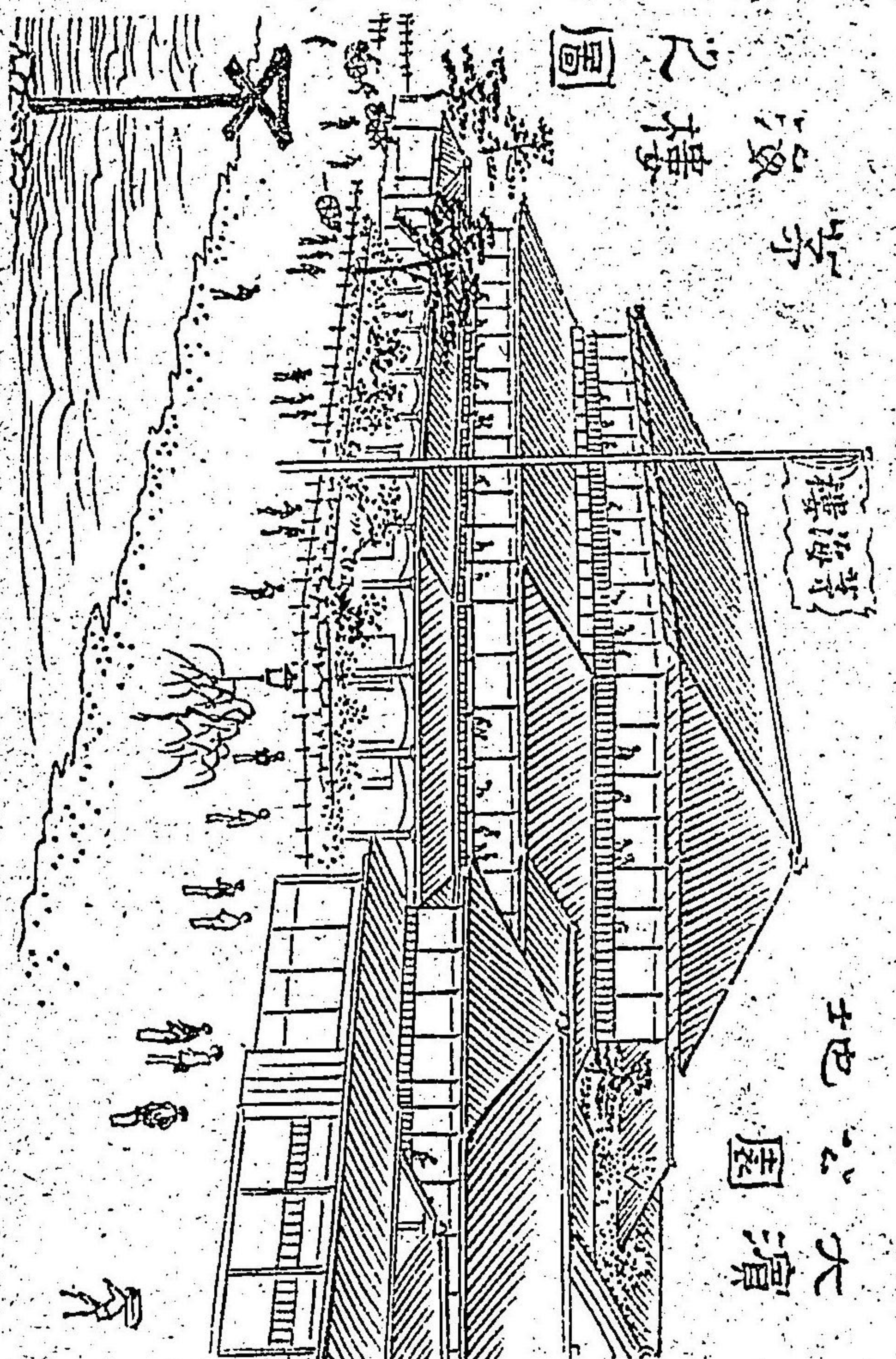


標大寺境内南門

登録  
商標  
大寺餅

之祖河合堂

御遊來程の待上候  
御料乘旅館



堺市

耳卯樓

電話百五十一番

御料理兼旅館

特別御引立ヲ奉願上候

一寸前以て申上げていただきますが、旅館と料亭を兼ねてゐるものがありますから、重複いたしますが、夫は厭はずに申します。

東區では竹式築地灘方、(北濱二、探宇平野町四)、丸水(瓦町二)、備二(備後町一)、吉常博勞町二、西區では岸松(長堀鯉坐橋北詰)、南家(新町沙場)、榎田(江戸堀樟木橋北詰)、越伊(南堀江通一)、南區では播半(心齋橋北詰)、富貴樓(道頓堀相合橋北詰)、金屋(宗右衛門町)、金水(同上)、南吉(難波新地五番町)、明月樓(同上)、丸萬(同上)、東千(日前)、井筒(同上)、入船(法善寺境内)、緑亭(同上)、播半(橋町)、京興(同上)、丸萬(戎橋角)、紅葉館(湊町)、吞春樓(真田山)、産湯樓(桃山)、好静館(生玉源正寺阪)、八百松(清水)、西照館(生玉寺町南)、北區では大阪ホテル(中之島公園)、銀水樓(同上)、静観樓(新地裏町)、鮎宇(網島)等です。

川魚料理

東區では富南(貴備後町二)、柴藤(大川町四)、西區では伯太山(江の子島)、南區では東吳(難波新地一)、二熊(西橋町)、伊勢萬(同上)、重宗(右衛門町)、播半(心齋橋北詰)、北區では菱富(新地裏町)等です。

鶏肉店

東區では鳥道修町四、鳥清安土町一、西區では源長松島橋西詰、鳥菊(新町橋西詰)、鳥米北堀江下通り五、源長京町堀通り五、南區では大豊大黒橋北詰北入、鳥安西橋町、鳥六同上、北區では鳥定岬橋南詰等です。

西洋料理

東區では三好亭高麗橋二、天五樓大川町貳、岩榮亭本町、未廣亭瓦町一、西區では萬歳軒北堀江下通り二、南區では魁陽亭西橋町、一陽亭久左衛門町、岩井亭順慶町四、北區では大阪ホテル中之島公園、西洋亭常安橋北詰等です。

牛肉店

東區では改進黨淡路町貳、江戸安淀屋橋南詰、二見亭平野町五、西區では江戸富川口、新門亭新町橋西詰、南區では北村(新町橋東詰)、源氏(東橋町)、森田芝居裏、北區では江戸留淀屋橋北詰、江戸重長池等です。

精進料理と天麩羅

精進料理は茶臼山の雲水、清水の八百松、天麩羅は御靈筋の梅月、太左衛門橋南詰の魚喜等です。

四季遊散の茶屋

高津梅ヶ辻の新梅屋敷、天王寺北の舊梅屋敷、櫻宮の岩國屋、天王寺の一家、天王寺境内の茶店、森の宮の虎の屋、桃山の茶店、北野の車茶屋、下三番の朝妻、蒲江の茶店、今宮の夫婦池、同じく奥の屋、赤手拭のうかれ亭、難波のね多福茶屋、同じく一方亭、尻無川堤の甚兵衛の小屋等。

寄席

寄席も澤山ありますが、今その部類を分て、有名のものばかり左に御案内いたします。

落語寄席

では、幾代(東區淡路町五)、此花館(同平野町三)、常盤亭(同平野町神明社内)

金澤南區法善寺内、相生亭同千日前、瓢亭西區新町通貳、賑江亭同北堀  
江下通り三、此花館同江戸堀北通り貳、遊藝館北區曾根崎裏町、林家席  
同大工町等です。

落語家

右の寄席へ出て客の願を解く落語家連中、今は文枝派と三友派の二派に分  
れておますが、其二派の中で重なる人々は、文枝派では桂文枝、同南光、  
同文三、同小文枝、三遊亭圓馬、扇屋三馬、西國坊明樂、寶集家金之助  
等で、三友派では、月亭文都、曾呂利新左衛門、笑福亭福松、桂文團治、  
同米團治、三遊亭圓若、桂文我等です。

軍談定席

文正堂南區二ツ井戸、西村席同法善寺内、集寄館同千日前、玉英亭西區  
阿波橋南詰、玉龍亭同北堀江上通り貳、一瓢亭同土佐堀通り四、日の出  
席松島町一、燕文席北區大工町、玉英亭同新地蛸橋、福井亭東區御靈裏  
玉猿亭同松屋町生玉旅所内等。

講談師

右の席へ出演する有名の講談師は、玉田玉芳齋、神田伯龍、三省社一瓢、  
西尾魯山、笹井燕文、旭堂南陵、神田伯猿、松月亭香海、石川一口、笹  
井燕樂、旭堂南右、松川堂一山、笹井燕玉等です。

女淨瑠璃定席

金城席南區東櫓町、播重千日前、南歌久席北區大工町天神社内、寶席西  
區立賣堀北通り貳等。

女太夫

右の席へ出て嬌喉を弄し美聲を鳴す女太夫の中で、尤も評判高き人々は  
豊竹呂昇、同長廣、竹本源之助、同東捷、同久吉、同照玉、同愛之助等です。

其他雜種寄席

世に聞えしもの無慮三十にもあまり、其他四區の端々にありて、所謂端

席と唱ふるもの、其數二百にも餘る程です。

### 俄師

俄は演戲淨瑠璃と共に大阪名物の一つに數ふ可きも、今俄師の中で世に名あるものを挙げれば、尾半、小半、寶樂、團十郎、東玉、たにし、團之助、團九郎、松蝶、田樂、東蝶、茶樂、歌蝶、龜蝶等です。

### 商業工業兩會社

商工業の會社は、日に増し月に殖ゆるといふ勢ひでして、とても御案内がしきれませんから、こゝで一才概略だけを申してをきませう、商業株式會社で、百万圓以上の資本のもの五、十万圓以上のもの廿九、一万圓以上のもの三十一、それから、合資會社が四十七、合名會社が十一、支店五十四、工業株式會社で、百万圓以上の資本のもの六、十万圓以上のもの卅六、一万圓以上のもの二十五、合資會社三十九、合名會社十二、其他工業製造所六百十四、是は大阪府管内の總數を挙げたのでございませう、其内十の八九は當市内にあるのです、以て當市の商工業の盛大な

のを卜するに足ります。

### 銀行

銀行も諸會社と同様ですが、今廿八年の統計に依て、ざつと御案内いたします、大阪府管内に本店あるもの、其數八十一、又他府縣管内の諸銀行にして、支店を置くもの七十、夫から百万圓以上の資本のもの三、五十万圓以上のもの七、十万圓以上の資本のもの、三十八、五万圓以上の資本のもの二十一あります。

### 案内者口上

是にて大阪市内の、否、難波停車場以北の御案内をあらまし終りましたから、今より方向を轉じて、難波停車場以南の名所舊迹等を御案内いたしませう。

### 眺望閣 難波停車場の前

該閣は去る明治十一年の建築で、木製の五階造り、其頂上に上りますと、

西北は淡路島、攝津、播磨の諸山に對ひ、東南は紀伊及び五畿の諸山を  
見渡し、快晴の日望遠鏡にて眺れば、西は神戸西の宮、南は堺市の繁昌、  
且は海上を走る和船の白帆、涼船の黒煙、すべて一望の中に收め得られ、  
近くは大阪市の全景、東は金城天王寺、南は南海大阪兩鐵道の線路、住  
吉の松原、西は三軒屋の紡績所等手に取る如く、眺望の好きことその名  
に背きません。

### 阿倍野神社

は天王寺村の南、字阿倍野の丘陵にありまして、難波停車場を距ること  
二十町ばかり、別格官幣大社でございまして、南朝の忠臣北畠親房、同  
顯家の靈を祭つたので、社殿は明治十五年の創建、其結構清酒壯麗、境  
内も亦廣うございまして、櫻樹、楓樹など栽てあります、涼車の進行中  
車窓から其社殿を望むことが出来ます、顯家卿は、案内者が申すまでも  
なく、元弘の四年五月二十二日、此野に於て賊軍と戦ひ、利あらずして  
討死された事は、太平記に詳しく記してございしますが、維新以前には此  
卿の墓は土人大名塚と呼んで、確かに此卿の墓と知る人さへ稀であつて、

彼の廣瀬旭莊が阿倍野の詩に

興亡千古泣英雄、虎鬪龍爭夢已空、欲問南朝忠義墓、鶯花秋仆野

田風

どその荒涼たる景色を述べたばかりか、其自註に、源公顯家の墓焉に在り  
聞て、之を尋ねれども得ずと書いてありますから、容易くその所在を認  
める事も出来ないやうな始末であつたのを、維新後に至つて、此く立派  
に社殿の造営も出来、別格官幣大社にまで崇められたのですから、朝廷  
の厚き思召を感じて、公父子にも定めて地下で歎ばれたのでございませう  
が、併し、月の卯の日や一日十五日に、住吉へ参詣の人は幾方を以  
て數ふる程あります、只涼車の窓から社殿を望むのみ、公の祥月命日、  
乃ち祭典の當日にも、参つて其忠義を追慕する人の稀なのは、實に遺憾  
なことです、此社へ参詣するには、里程から云へば難波の停車場からが  
近いやうでございしますが、今日涼車の便に寄るとすれば、堺からも大阪  
からも、天下茶屋停車場で下りて行くが宜しい。

### 阿倍野

天王寺の南大門から住吉に至るまでの間を、すべて阿倍野と云つて、古の南海道です、平治物語に、清盛熊野参詣の留主に、京師に大亂起り、悪源太義平が二千餘騎の兵で、此野に出て歸るを待伏せしめてゐると聞て、清盛が大に駭いた事が出てゐます、此邊に

小町墳、經墳、播磨墳、萱草墳、松虫墳

なごいふ多くの古墳がありまして、小町墳は、小野の小町、經墳は、聖徳太子が經文一字一石に書寫して爰に築き納め、播磨墳は、播磨守某の墳、萱草墳は即ち大名墳で、顯家卿の墳墓、松虫墳は、後鳥羽院の官女鈴虫松虫、法然上人に歸依して、發心を生じ、出家遁世して此所に彷徨ひ來り、松虫こゝに庵を結びて終りを遂げし故、この名があるといふ傳へですが、年代永久實は孰も確かではありませぬ。

王子の社 天下茶屋停車場より二丁

安倍野街道にありませぬ、祭る所は熊野王子、京都より紀州牟婁郡にいたる間に、九十九所の皇子を祭つてあります、その第一の社です。

天下茶屋停車場

停車場は西成郡勝間村字天下茶屋村の西の端、乃ち住吉街道の西手にあります、難波停車場を距ること二哩餘、此所の字を天下茶屋といふのは

天下茶屋天満宮

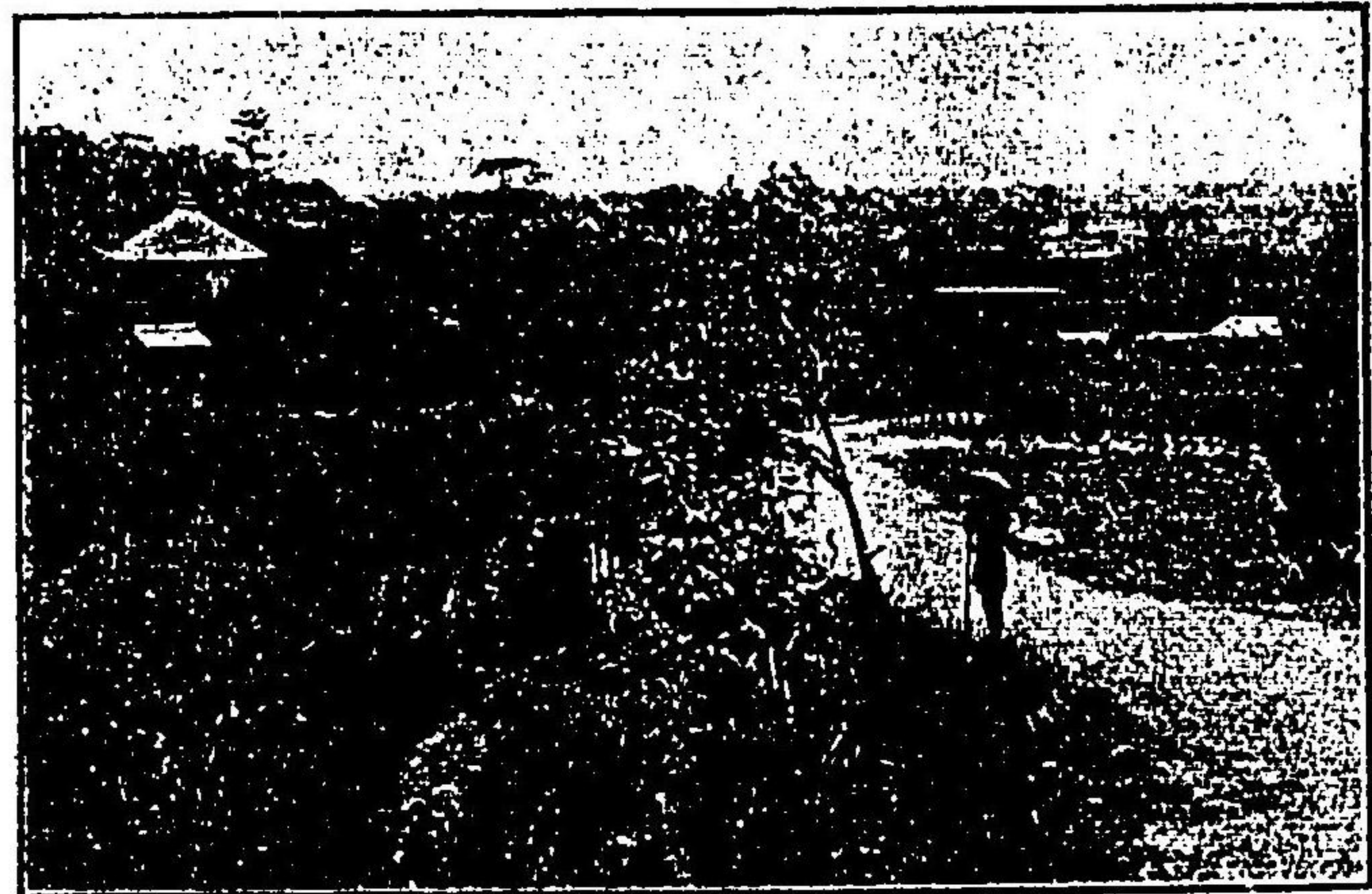
が住吉街道に在りて、乃ち祭神は菅公、此地の生産神で、例祭は九月の十五日で、額の天満宮は寶鏡寺の宮理豊徳巖尼公の筆で、世に名高うございます、此社頭の森を

紹鷗の森

とまうして、茶人紹鷗の舊棲の地であつて、豊臣秀吉が、堺の政所へ往來の時、此紹鷗の茶亭に興を止め、風景を賞翫されたので、天下茶屋の名が残つてゐるといふ傳へですが、否、その以前すでに此地名があつたのだといふ、兩説があつて定がでありませぬ。



景 ノ 地 園 遊 屋 茶 下 天  
丁 五 四 リ 三 場 車 停 全 (一 其)



(二 其)



Tenkajaya Park. Close to Tenkajaya Station.

公園の上の橋の上から北を向いて撮影したのです。

の花を見ることが出来、月にも雪にも好い遊び處です、此公園の寫眞は、

名物和中散

は當村にありまして、姓は津田氏、字を是齋と呼びますが、祖先宗本といふ人、始めて爰に舖を開いて、此藥を賣弘めたといふ事です、以前は往來の人に藥を施してのみましたが、維新後、住吉參詣の人、人力車や瀛車の便を利用して、自然往來が少なくなつたので、今は施藥はいたしませんが、其家は當村の名物として歴然と残つてあります、又此家にも昔太閤が立寄たといふ傳へがありまして、遺物などもあります、後園に草亭がありまして、其名を盡天閣とまうします、先年主上御巡幸の時御休憩になりまして、一層この家の聲價を添えました。

天下茶屋遊園

此公園は公共の遊所といふ意味で、眞個の公園ではりあません、廿八年に野田橋本の兩氏が發起で開設したので、今では、千成樓、瓢々亭、ひさびさやなどいふ料亭が出来、かすがといふ待合もあり、寫眞屋もあり、豪商紳士の別荘なども建たれ、多くの植木屋がありますから、自然四時

聖天山

その名の如く歡喜天が祭つてあり、昔は松茸などを植て市人の茸狩の遊  
びに供へ、秋は殊更人が出ましたさうですが、今はその事もなく、只眺  
望の好いのでちらほらと遊びに行く人があります。

天下茶屋村

是は勝間村の字で、勝間全村の戸数は八百九十餘戸、人口は三千六百餘  
人、此村は昔は是齊と、林源次郎の復讐とで名高く、今日では公園に依  
て人に知られてゐます。

兼好古蹟

天下茶屋村の内、住吉街道より二町ばかり東に、丸山といふ所がありま  
すが、是がその舊迹だといふので、印に石の寶塔が立てゐます、兼好亂  
を避けて、己が召仕へる命婦丸の故郷にたより、乃ちこの阿倍野に來り、  
其賤き業を扶けたといふ説があります、芭蕉翁が句に兼好も廷織かけり

住吉停車場

花の時とこゝにて作られました、兼好は申すまでもありませんが、徒然  
草の作者で名高い文章家、扶桑隱逸傳などに其傳が出てをります。

住吉神社

住吉停車場を距る二町餘

は東成郡住吉村の北端にあります、天下茶屋停車場を距ること一哩餘。

當社は官幣大社で攝津の國の一の宮です、祭神は一の神殿は底筒男命、貳  
の神殿は中筒男命、三の神殿は表筒男命、四の神殿は神功皇后、抑も此の  
住吉三所の太神は、神代の昔、伊弉諾尊日向國小戸の橋の檣原に被した  
まふ時、海底より現れたまふ御神であるが、其後又神功皇后新羅國を征  
したまふ時、此御神海底より出現したまひ、皇軍の魁をしたまふたので、  
三韓平治の後、皇后其功德を賞せられ、歸朝のついで築紫に祝ひ奉られ  
たが、其後太神又皇后に詔宣あつて、吾和魂は大津の淳中倉の長峽に居  
り、往來の船を見んどのたまふたので、則ちこの住吉の津に鎮座しま  
したので、四社の神と崇め奉るのには神功皇后を併せ祭り奉るからです、



招魂社本殿の背後にあり、此外に方違、艘松、如意御前、甲、三村の五攝社があり、是は堺驛の部で御案内いたしませう、次に名所舊迹は(神馬舎社)頭にあり、田邊村の神役、毎朝神馬を牽來り、毎夕牽き歸る、(香石神館)殿の前にあり、形に依て此名がある、(后土木神宮)の館内西北の隅にあり、此神木の下に神供を進めて祀る、夫を名けて后土祭といふ、(誕生石)嶋津忠久出生の故跡、神頭猪鼻の邊にあり、(反橋)神代高橋の遺製、當社内の一奇觀、(鳥井)島木造りと云ふ、昔は木で作つてあつたのを元和の造營に今の石の鳥井に成たので、(神木橋)三韓より我朝へ貢した物の中の一品だとの云ひ傳、(楠大木)本殿の後にあり、(便宜)水社頭の御手洗を此く名づくとも云ひ、又有り所が詳かならぬとも云ふ、(駒止)石社頭の四方にあり、是より下馬、(長峽橋)西の鳥井の馬場、(前長峽)浦にあり、(鶴橋)社頭の石の舞臺の東の石橋を云ふ、(獨梁橋)淺澤の西にあり、(龍橋)淺澤の東にあり、(玉出櫻)舊神宮寺の跡にあり、(舊大阪府知事)建野氏の書の上の碑が立てあります、(石燈籠)境内に充滿してあります、(忘)貝住吉海邊の名産、(忘)水淺澤小野の細江の流を云ふ、(忘)草

る南向きの社、夏日旱天に雨を祈るに靈應ありと云ふ、(祭神)は岡象女相殿は高龍神、(后土祠)小神館の東にあり、(祭神)は保食神、(惣社)神宮所藏の内、(深秘)にて祭神は知れませんが、(國盛)神祠若宮の後、西向の社、(祭神)は荒魂國盛明神、(市笑)姿神祠國盛の社の後、西向の社、(祭神)は命、(侍者)御前神館殿の北にあり、(子安)社又の名を結神社とも云ひ、(祭神)は田袋見宿禰市姫、(子安)社又の名を結神社とも云ひ、(祭神)は南北向きにあり、(祭神)は高皇產靈尊、(神皇)產靈尊、(天御)中主尊、(祭神)は產靈神、(苗見)社又の名は種貸神社、(多)米の神社、(猪)鼻道にある南向の社、(祭神)は宇賀御魂神、(大海)神社、(玉)出島の神社、(社)内西北の角にある一棟三扉、(祭神)は玉姫、(志)賀明神社、(大海)神社、(社)内西北の角にある一棟三扉、(祭神)は喜式神名帳には生根神社とあり、(其)後文明十四年十二月廿四日、(天)宮を祭る是は本社、(西)紅梅殿といふ小社、(大)歳神社、(本)殿の南一町ばかり西南向の社、(祭神)は素盞烏尊之御子大歳神、(淺)澤神社、(天)照皇大神宮の遙拜所にあり、(遙)拜所第一本殿の北脇にあり、(天)照皇大神宮の遙拜所



子祠(舊)の津守寺南門前にあります、祭神は熊野若王子、(潮崎正面の鳥居反橋の邊より南の方安立寺町迄の名住吉踊)昔は此邊から出て近郷を廻つて米錢を勸進しました、此他に尙澤山ありますが、限りがありませんから其他は略します、一寸つひでに

住吉名物

蛤、蜆、蕃椒、竹馬、土人偶、麥蕪細工、貝細工、燕芋、金魚、松露、ころく、せんべい、住吉踊、海藻(二名神馬草)、筆、香附子。

住吉神社年中行事

一月、一日、二日、三日、(新年神事) 此三日は前にも申ししたが、鉄道會社よりも参詣人の便利の爲め、日夜數回の臨時列車を出します當社一年の神事の中で七月の南祭と併べ稱せられる賑ひです、 毎月卯の日 是は例祭なれど参詣人は極めて多うございます、

三月三日

(沙干)

住吉の濱で蛤蜊を拾ふとて、大阪より堺より、近郷近在より、貴賤老若群集ひ、隨て本社へ参詣する人も澤山ですが、その風俗を見るは一奇觀です、尤も此日一日に限らず、三月四月の交、此海濱一里の間潮退きて砂洲となる故、不斷潮干狩に入が出来ます、

四月上の卯の日

(卯の日祭)

此日は神功皇后十一年辛卯、大神當社に鎮坐の日とて殊に繁昌です、

(御田植神事)

六月十四日 此日は神田に苗を植る祭式です、昔は神宮寺の僧甲胃を着て遊戯する法式あり、又利泉の太津より田樂人が來て藝を演じ、界の乳守の遊女が盛裝して來て、自ら田を植ることなどがあつて、極めて面白い神事、朝野群衆にも其事が詳に載せてあります、今は大阪の新町の妓女が代つて早乙女になつて式祭に加はり、法式も頗る省略されておますが、早乙女の衣裳花笠などは尙古代の風俗を存して、頗る雅致に富んでおます、之を見るため遠近より参詣する人稻麻の如く、社頭の賑ひ云ん方ありません、

舊曆六月十四日

(潮湯)

俗に之を神興洗ひと唱へ、南祭渡御の神興を松原公園に出して潮水で、以て清める式です、此日遠近の老若群集して住吉浦の潮水に浴し、又潮水海藻を汲取て潮湯にして浴します、之は百病平癒の爲といふ言ひ傳へです、是に依て見ますと、我國には古くより海水浴をして、只身を清める爲のみでなく、健康を保つ爲にする習慣があるのです、

七月三十一日、八月一日

(南祭)

此日は當社年中行事第一の祭典です、七月三十一日を夜宮と唱へ、堺の大浜で終夜大魚市を催します、其見物を兼ねて参詣人雲霞の如く、此夜鉄道會社は参詣人の便利を計つて、終夜臨時列車を出し、翌八月一日は南祭と唱へて、堺宿院の御旅所へ渡御、即日還御、此兩日の参詣人は、一月三日と伯仲して、實に盛かつ大です、此他にも種々の神事がありますが、一々は案内がいたしきれませんから、其中の重要なものを摘要でまうして来きます、又例祭の日でなくとも、各府縣より参詣人が断間なく、神樂殿には常に笙鼓の聲が洋々と響きわたつてゐます、社殿の結構、埴地の秀麗、殊に山水の眺望に富み、

神社としては恐らく日本第一と云つても過言ではありますまい、當社の境内では反橋と高燈籠の二名物を寫眞してをきました。

茶店

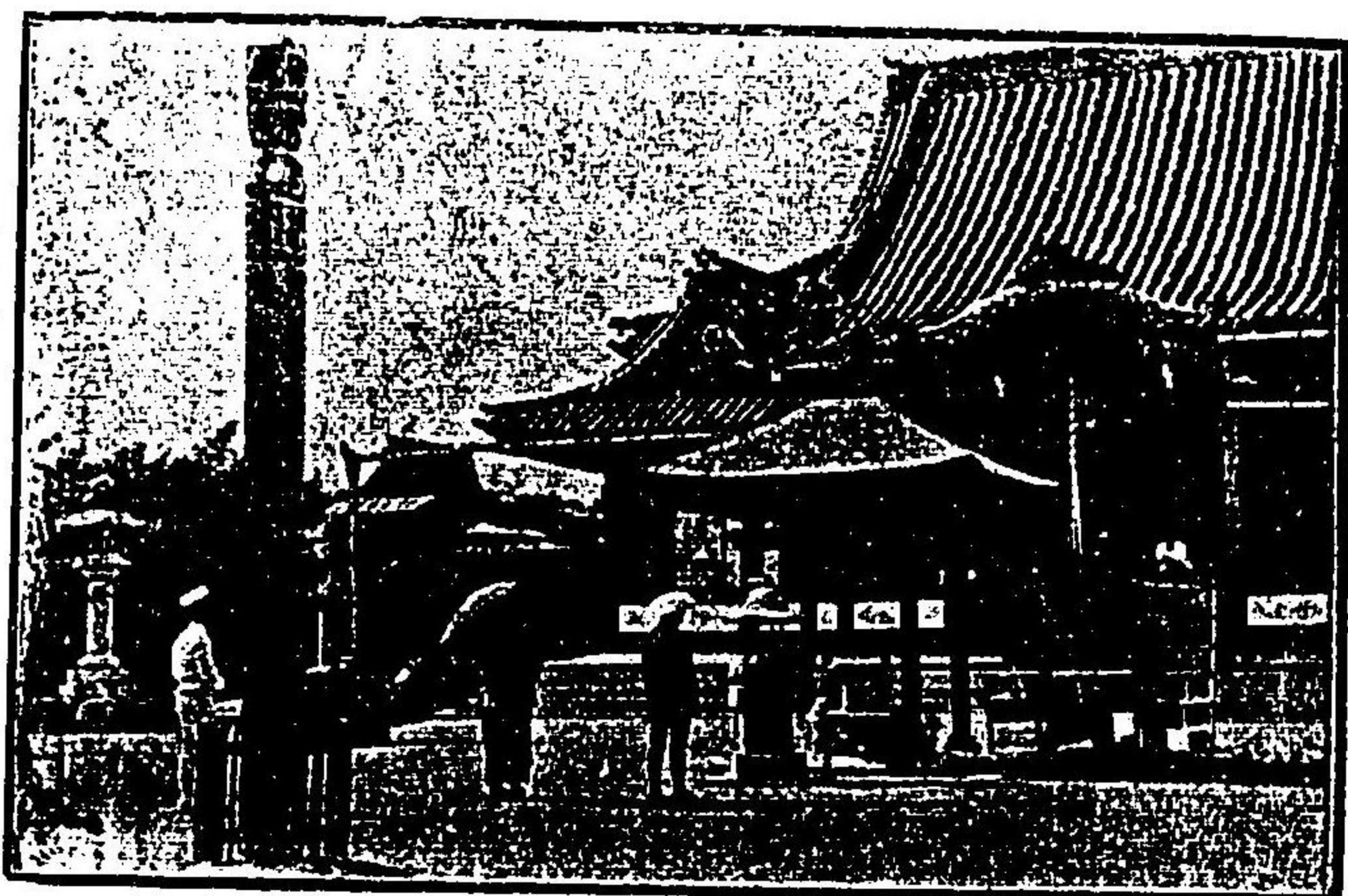
住吉社の境内、又は華表前の街道に軒を併べて、前に申した住吉踊りだの、土偶人の類を商ふてゐます、

林菜菴古蹟

住吉阪の井村にあり、曾て紫野大徳寺の一体和尚、暫く爰に假住居されし所、庵室荒廢に属す、當巷什寶和尚自筆の軸物數品、又後小松院の神牌等は、庵の門前大海神社の社人大領氏の許に納めある由、因に云ふ和尚は後小松院の落胤ゆゑ、己が住菴に此尊牌を安じたのであらふといふ説があります、今その軸物の中の一幅を左に

一休和尚像自贊  
詩情禪味俱無能、龍寶山中滅大燈、盲女飽歌欺樓子、虛堂七世孫  
直

音 觀 ノ 彦 吾  
丁 八 十 リ 日 場 車 停 吉 住



Abiko Kwannon (Buddhist temple dedicated to the Goddess of Kwannon). A little more than one mile from Sumiyoshi Station.

詣名住は距は西成郡にあつて、住吉神社を  
詣高吉屋、伊丹屋、三文字屋、分銅屋、  
詣の人料理屋があつて、住吉参  
詣の飲食をして中々の繁昌、  
詣松金油に雲鬢を薫らせ、一種

女奴は紅粉を施し、赤前垂に天鵝絨の襟

り近郷近村、或は遠國からも参詣の人が群集します、東京で名高い寶丹

新家町

の本舗守田は、此村から出たもので、寫真に探して此堂の大概をのぞらんに入ります、又此行基作の大神の尊像は、有名の作物で、是から本街道へ歸つて、堺驛の方へ御案内いたしませう。

吾彦

文 明 六 年 閏 五 月 日、天 澤 七 世、東 海 順 一 休 天 下 老 和 尙 印

住吉より南にあつて十八町ばかり、今吾孫子村と稱して、一小村があり、阿弭古の名があります、又萬葉集には網子海と詠じてあり、昔は海に近かつたのですが、今は海邊まで二十餘町あり、土人吾孫の孫の字を孫と讀む事を知らずに、子をつけ吾孫子と三字に書くやうに成たのです、此村に名高い

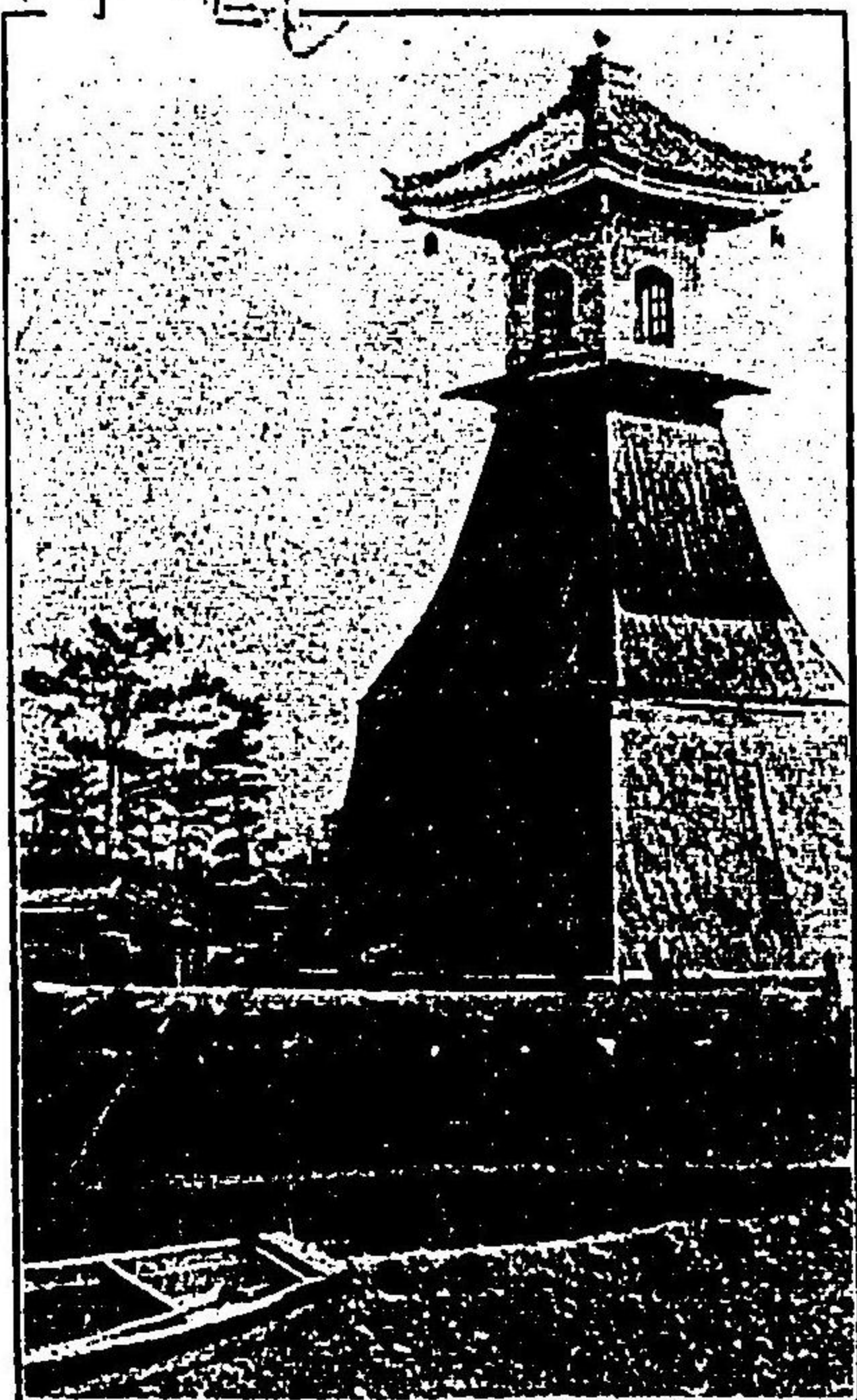
吾彦の觀音

が、あり、其寺の名は、吾彦山坊不動院と號して、眞言宗です、本尊聖觀音、長さ一寸八分、泉州南郡水間の瀧より出現したといふ傳へ、正体は一尺八寸で行基僧正の作、先年舞馬の災に掛りましたが、今は新に造營に成て、頗る壯嚴です、法會は例年の二月初午と、立春の兩度ですが、兩法會とも除厄の靈驗が著明だといふので、大阪堺は元よ



の風致を備へておましたが、参詣人が人力車と瀛車の便を假るやうに成てから、休息飲食する人が漸次に少なくなり、今では一軒もありません、まだしも僅に繁昌を保つてゐるのは、鯉の名物の丸太格子の酒店ばかり

住吉の吉住高燈籠  
全停車場ヨリ



The Lighthouse of Sumiyoshi, Settsu.  
Close to Sumiyoshi Station.

です、此町でもいろくの名物物を賣ておますが、中にも蒸芋と煎餅を澤山に賣ておます。

住吉公園

見の濱へ出で見れば、淡路島、攝州播州紀州の山々、遠近濃淡繪の如く風景得も言はれず、園内に温泉あり、茶肆あり、酒樓あり、料亭あり、近來は所々に池を掘て蓮を栽え、秋草を咲かせ、花紅葉さへ植添へたれ

ば、實に最上の四季の遊散場、學校生徒の運動會を始め、散步の遊客いつも松緑りに沙明な間を逍遙してゐます、此公園も亦日本有數のもので

霰松原

今の安立町、昔は此邊も皆松原であつたのを、後世安立といふ者が開いて町ついで成たのです、尙切残しの松が七本残つてゐたそうですが、今は畑地に成て僅に七本松の名のみとゞめてゐます。

小町茶屋

昔は住吉の松原の土手の上に席を設け、柄の長い杓に茶碗を載せ、往來の人に茶を勧めてゐたもの、今は安立寺町の北の端に茶店をしつらへ、其形を残してあります、此茶店の女は夫を持ぬゆる、小町茶屋といふとの傳へです。

難波屋の笠松

安立寺町壹町目難波屋の前裁にあつて、奇代の名松でした、古木は枯  
て今は新な松を栽え、名物の形ばかり残つてをります。

### 住吉神輿火替所

是は大和橋の詰にあり、七月三十日の夜の神事に、堺の人炬を持って  
此所まで送つて来て、住吉の生産人に渡す、住吉の生産人之を請取て社  
壇に納めるのです、之を御稜の火替と云ひます。

### 新大和川

は水源和川から流れて、住吉の南で海に入るので、是に架つてゐるの  
が

### 大和川停車場

は住吉停車場を距ること一哩餘、堺市大和川の南岸にあります、此停車  
場から、堺市の名所を見物するのに便利なる所は、並松町、高須、高須  
の廓の舊迹、高須の稻荷、七堂か濱、經王寺、金光寺、妙國寺、菅原神

社、寶珠院土佐十一士の墓、戎島等他にもあります、此所では只其  
名前のみを御案内申したので、詳しい事は、堺停車場で申し上げる事に  
いたしませう。

### 大和橋

といつて、此橋は、南は紀州和歌山に入り、北は大坂に達する一大國道  
であつて、當地の中央を貫通してゐる、橋の長さ二百餘間、南海鐵道の  
鐵橋と相並んで架つてゐます、橋の上から西を望むと、遙に武庫摩耶の  
諸山、播磨淡路の島々を一眸の中に集め、北は住吉社頭の松翠、東は淺  
香の丘など遊目頗る宜しいです、涼車は夫に併んで架けてある鐵橋を渡  
つて、堺の町へ這入ります。

### 堺市

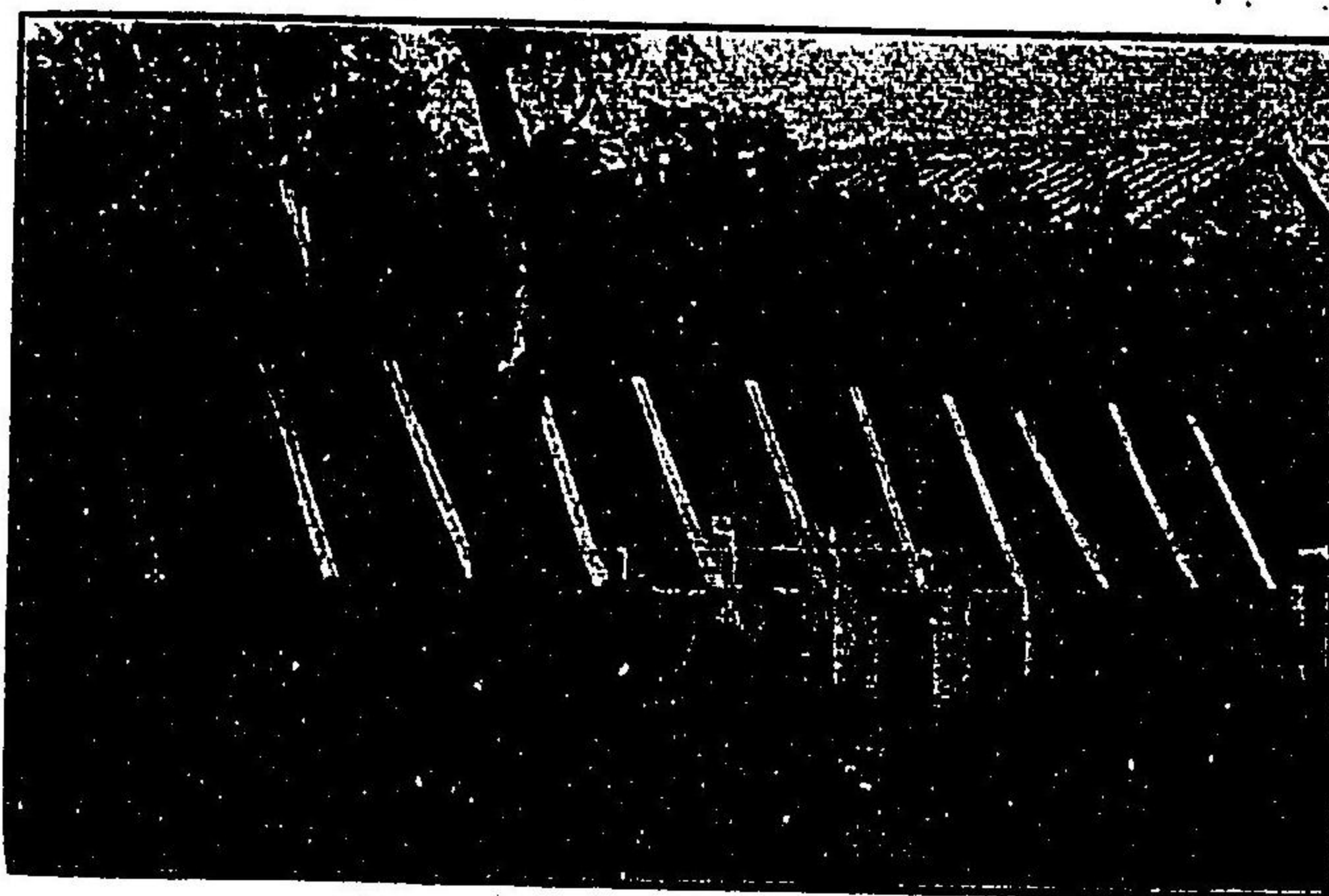
は和泉國の北端大鳥郡に屬し、大和川の海口に沿ふて西に堺港を擁し、  
市坊一百九十五ヶ町、南北三十町東西十五町、此地は攝河泉三國の堺  
乃ち地名の因て起る所、戸數九千三百五十六戸、人口四万七千二百〇五

海濱をうけ、南は高石濱寺に攝し、四面の風光極めて明媚です、足利氏の時、山名大内三好など守護となり、城を泉府と稱し、周防の山口と此地とが、日本に只二つの海外貿易の開港場で、其頃は戸數人口共に今より數倍多く、京都に續いての一大都會、豊臣氏の時に至り繁華の幾分を大阪へ移され、やゝ衰微を來しましたが、其後徳川氏の時に成つて、海外貿易を長崎に移され、いよゝ衰微を加へて、今の姿になりましたが、後に徳川氏の時には堺奉行を置き、明治の初年に堺縣を置れましたが、後に之を廢して大阪府の管轄となりました、加ふる名區でございますから、名所舊迹も随つて多く、商工の二業も頗る發達してをります、是からその概略な話をしませう、先づ

**堺停車場**  
 は住吉停車場を距ること二哩餘、堺市吾妻橋一町目にあります、少し北へ迹戻りしてから、

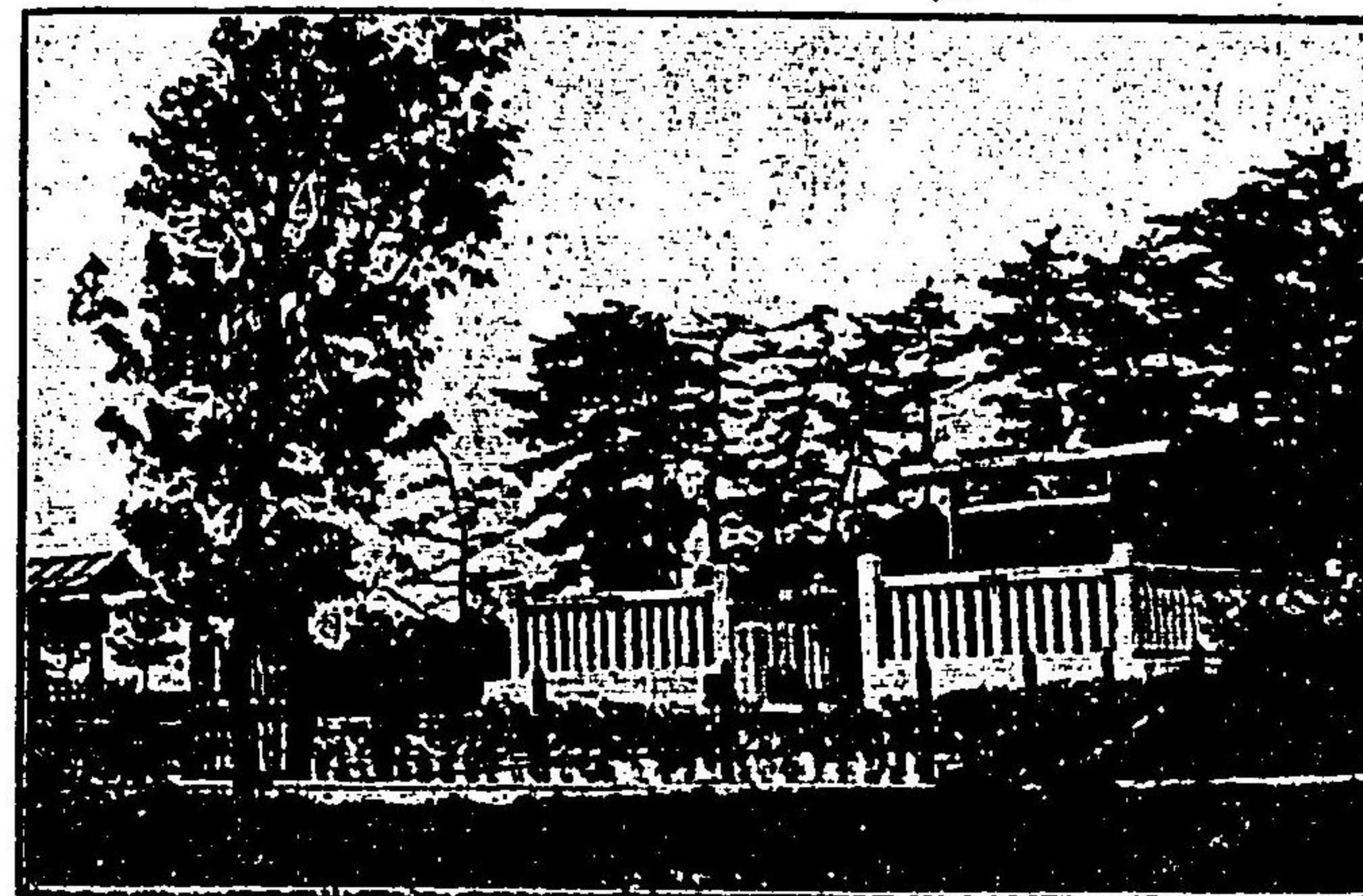
**戎島**

墓 ノ 土 一 十 ノ 佐 土 堺  
丁 三 二 十 リ ヲ 場 車 停 堺



The Graves of the Eleven Martyrs of Tosa, Sakai. One mile from Sakai Station.

景 ノ 陵 御 皇 天 正 反  
丁 二 十 リ ヲ 場 車 停 堺



The Sepulchre of Emperor Hanshō (A. D.406). One mile from Sakai Station.

ば、東は三國耳原の丘を控へ、遠く大和河内の名山を望み、西は茅渚の

人を有する一商區であつて、區畫端正、家屋鱗次、其地勢の大略を云へ

から御案内いたしませう、此島は寛文年間の開墾であつて、其頃蛭子の像を海中から得たので、此名があるのです、其蛭子の社は今尙儼存してをります、開墾の當時は、此島に遊所があつて、織田居茶屋が尤も高かつたのですが、今は物變り星移つて、夫等の名残は絶てなく、泉州紡績會社、酒家共同精米所、酒精會社附屬精米所、堺製油合資會社、堺煉化株式會社、其他製造、染工、鐵工などの諸工場、多數の烟突を空に聳かし、絃歌の聲は漁笛の響と變りました、又此邊に、

七堂ヶ濱

と云ふ舊地名が存してをりますが、是は古へ行基僧正が駐錫された高須寺に、七堂伽藍があつた、其迹だといふ事です、夫から

並松町

是は大和橋を渡るとすぐ、住吉の安立町までついでいてゐるのです、並松の名はやはり葎松原から出た名かと思はれます、大阪の名古町に似た場末の町ですが、堺製糸株式會社があつて、日夜數多の女工が蠶糸の業を

探つて働いてゐます、次に

高須

此所に

高須稻荷

の社があつて、境内に櫻樹が數株あつて風景も面白うございます、夫から

高須の遊廓の迹

今は此旅籠町櫻の町東貳町を云ふのです、昔は名高い遊女町であつて、彼一休禪師が地獄太夫と問答したのは此所です、今尙舊形を存してゐる家が二三残つてゐます、夫から市の東の端を南へ、九間の町東一町に至ると

經王寺